

中央東部地区遺跡群

YANAGIGAWARA-SITE

柳川原遺跡（第1～3次調査）

NAKAMACHI-SITE

中町遺跡（第1・2次調査）

－中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－

1998年3月

宮崎県都城市教育委員会



柳川原遺跡第1次調査 (YG1) 調査区全景



柳川原遺跡第2次調査・A地区 (YG2A) 調査区全景



柳川原遺跡第2次調査・B地区 (YG2B) 調査区全景



柳川原遺跡第3次調査 (YG3) 調査区全景

序 文

この報告書は、都城広域都市計画事業「中央東部土地区画整理事業」に伴って、平成7～9年度に都城市教育委員会が調査を実施した中央東部地区遺跡群の発掘調査概要報告書です。

中心市街地の活性化を目的とした土地区画整理事業が実施されている同地区は、元和の一国一城令による政治拠点の移動に伴って、新しく町並みや街路の整備が進められた地域の一角にあたり、江戸初期以降の市街地形成の過程を知る上では大変重要な地域となっています。

不幸にも近・現代の開発によって、すでにかんりの部分で遺跡の破壊が進んでいる状況ではありましたが、今回の調査では、こうした近世段階の遺構はもとより、縄文時代以降の同地区の変遷を明らかにする上で重要な資料を数多く確認することができました。

これらの資料をまとめた本書の刊行を通じ、地域に埋もれた文化財に対する理解と認識が深まっていくことを願うとともに、こうした調査の成果が現在進められている新しいまちづくりに少しでも寄与することができれば幸いです。

最後に、調査の実施に際して御理解と御協力をいただいた中央東部地区の皆様や関係各機関の方々、調査への御指導・御教示を拝しました先生方、そして厳しい環境下での発掘作業から報告書作成にいたるまで御協力いただいた多くの市民の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

1998年3月

都城市教育委員会
教育長 隈元幸美

例 言

- この報告書は、都城広域都市計画事業「中央東部土地地区画整理事業」の実施に伴い、都城市教育委員会が平成7～9年度に発掘調査を行った中央東部地区遺跡群の発掘調査概要報告書である。なお、本書には柳川原遺跡（第1～3次調査）と中町遺跡（第1・2次調査）の概要について収録している。
- 各遺跡の発掘調査地点、面積は次のとおりである。

柳川原遺跡（第1次調査）宮崎県都城市中町11-8ほか調査面積：710㎡
（第2次調査）宮崎県都城市天神町2195-7ほか調査面積：433㎡
（第3次調査）宮崎県都城市中町2149-3ほか調査面積：640㎡

中町遺跡（第1次調査）宮崎県都城市中町2666ほか調査面積：130㎡
（第2次調査）宮崎県都城市中町2675ほか調査面積：95㎡
- 各遺跡の発掘調査期間は次のとおりである。

柳川原遺跡（第1次調査）平成7年8月17日～平成7年10月31日
（第2次調査）平成8年11月5日～平成9年2月7日
（第3次調査）平成9年10月1日～平成9年10月30日

中町遺跡（第1次調査）平成8年11月5日～平成8年12月5日
（第2次調査）平成9年9月24日～平成9年9月30日
- 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体	都城市教育委員会		
調査責任者	都城市教育長	隈元幸美	
調査総括	同 文化課長	遠矢昭夫	
調査事務局	同 文化課長補佐	永野元保（平成7・8年度） 綿田秋嗣（平成9年度）	
	同 文化財係長	中村久司	
庶務担当	同 主事	児島咲子（平成7年度）	
	同 主査	矢部喜多夫（平成8・9年度）	
調査担当	同 主事	横山哲英	
- 発掘調査における出土遺構図の作成及び本書に掲載した出土遺物の実測・トレースは、横山が作業員の協力を得て行った。
- 遺構の写真撮影は横山が行い、空中写真の撮影については民間業者に委託した。
- 本書で使用した基準方位は真北であり、レベルは海拔絶対高である。
- 本書の執筆及び編集は横山が行った。
- 発掘調査及び報告書の作成に際しては、次の方々の御指導・御教示を受けた。

大盛祐子 榎畑光博 重永卓爾 矢部喜多夫（五十音順）
- 本書に掲載した各遺跡に関する記録類（写真・図面等）及び出土遺物については、都城市立図書館内の埋蔵文化財整理収蔵室において保存・管理している。
- 本書で用いた略記号は次のとおりである。

YG - 柳川原遺跡	NM - 中町遺跡	SA - 竪穴住居	SB - 掘立柱建物
SC - 土坑	SD - 溝状遺構	SF - 道路状遺構	SS - 散石遺構
SX - 倒木痕			

本文目次

I. 調査に至る経緯	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の概要	2
IV. 調査の記録	6
1. 柳川原遺跡の基本層序	6
2. 柳川原遺跡・第1次調査 (YG1)	7
3. 柳川原遺跡・第2次調査	21
1) A地区 (YG2A)	21
2) B地区 (YG2B)	30
4. 柳川原遺跡・第3次調査 (YG3)	39
5. 中町遺跡の基本層序	47
6. 中町遺跡・第1次調査	47
1) A地区 (NM1A)	47
2) B地区 (NM1B)	49
7. 中町遺跡・第2次調査	52
1) A地区 (NM2A)	52
2) B地区 (NM2B)	55
3) C地区 (NM2C)	57
V. 小結	59

挿図目次

第1図 中央東部地区遺跡群位置図	1
第2図 中央東部地区遺跡群遺跡区域図及び調査区域図	3
第3図 柳川原遺跡 (第1次～第3次)・中町遺跡 (第1・2次) 調査区域図	4～5
第4図 柳川原遺跡基本土層図	6
第5図 柳川原遺跡・第1次調査 (YG1) 遺構分布図	8～9
第6図 YG1・基本土層図及び遺構土層断面図 (SD01, SX03)	10
第7図 YG1・掘立柱建物跡実測図① (SB07)	10
第8図 YG1・掘立柱建物跡実測図② (SB01～03)	11
第9図 YG1・掘立柱建物跡実測図③ (SB04～06)	12
第10図 YG1・出土遺物実測図①	14
第11図 YG1・出土遺物実測図②	15
第12図 YG1・出土遺物実測図③	16
第13図 YG1・出土遺物実測図④	17
第14図 YG1・出土遺物実測図⑤	18
第15図 柳川原遺跡・第2次調査A地区 (YG2A) 遺構分布図	22
第16図 YG2A・遺構土層断面図 (SA01, SD01～04, SC01・02)	23
第17図 YG2A・1号竪穴住居跡 (SA01) 実測図	24
第18図 YG2A・出土遺物実測図①	25
第19図 YG2A・出土遺物実測図②	26

第20図	YG2A・出土遺物実測図③	27
第21図	柳川原遺跡・第2次調査B地区（YG2B）遺構分布図	32～33
第22図	YG2B・1号溝状遺構（SD01）土層断面図①	32～33
第23図	YG2B・1号溝状遺構（SD01）土層断面図②	34～35
第24図	YG2B・遺構土層断面図（SD02, SC01・02）	36
第25図	YG2B・出土遺物実測図①	37
第26図	YG2B・出土遺物実測図②	38
第27図	柳川原遺跡・第3次調査（YG3）遺構分布図	40～41
第28図	YG3・基本土層図及び遺構土層断面図（SD01, SC01～04, SX02）	42
第29図	YG3・掘立柱建物跡実測図①（SB01・04）	43
第30図	YG3・掘立柱建物跡実測図②（SB02・03）	44
第31図	YG3・出土遺物実測図	45
第32図	中町遺跡基本土層図	47
第33図	中町遺跡・第1次調査A地区（NM1A）遺構分布図	48
第34図	NM1A・1号溝状遺構（SD01）実測図	48
第35図	NM1A・トレンチ土層断面図	48
第36図	中町遺跡・第1次調査B地区（NM1B）遺構分布図	49
第37図	NM1B・基本土層図	49
第38図	NM1B・出土遺物実測図①	50
第39図	NM1B・出土遺物実測図②	51
第40図	中町遺跡・第2次調査A地区（NM2A）トレンチ配置図	53
第41図	NM2A・トレンチ土層断面図	53
第42図	NM2A・出土遺物実測図	54
第43図	中町遺跡・第2次調査B地区（NM2B）トレンチ配置図	56
第44図	NM2B・1号溝状遺構（SD01）実測図	56
第45図	NM2B・トレンチ土層断面図及び礫群分布図	57
第46図	NM2B・出土遺物実測図	57
第47図	中町遺跡・第2次調査C地区（NM2C）トレンチ配置図	58
第48図	NM2C・トレンチ土層断面図	58
第49図	NM2C・出土遺物実測図	59

図版目次

巻頭口絵 1	柳川原遺跡第1次調査（YG1）調査区全景 柳川原遺跡第2次調査・A地区（YG2A）調査区全景	
巻頭口絵 2	柳川原遺跡第2次調査・B地区（YG2B）調査区全景 柳川原遺跡第3次調査（YG3）調査区全景	
図版 1	YG1 SB01完掘状況 YG1 SB02・03完掘状況 YG1 遺構完掘状況（全景） YG2A 遺構完掘状況（全景） YG2A SA01完掘状況 YG2A SD01・05完掘状況 YG2B SD01掘り下げ状況 YG2B SD01土層断面 YG2B 遺構完掘状況（全景） YG3 掘立柱建物群完掘状況 YG3 掘立柱建物群検出状況 YG2A SB01・02検出状況 NM1A 遺構完掘状況（全景） NM1A SD01検出状況 NM1A SD01完掘状況	61

図版 2	NM1B 遺構完掘状況 (全景) NM2A 第2トレンチ土層断面	
	NM2B 第1トレンチ・SD01検出状況 NM2B 第2トレンチ・SD01完掘状況	
	NM2B 第4トレンチ・SC01検出状況 NM2C 第2トレンチ・土層断面	
	NM2C 第3トレンチ・礫出土状況 NM2C 第4トレンチ礫・土器片出土状況	62

表目次

表 1	YG1・出土遺物観察表①	19
表 2	YG1・出土遺物観察表②	20
表 3	YG2A・出土遺物観察表①	29
表 4	YG2A・出土遺物観察表②	30
表 5	YG2B・出土遺物観察表①	38
表 6	YG2B・出土遺物観察表②	39
表 7	YG3・出土遺物観察表	46
表 8	NM1B・出土遺物観察表①	51
表 9	NM1B・出土遺物観察表②	52
表10	NM2A・出土遺物観察表	55

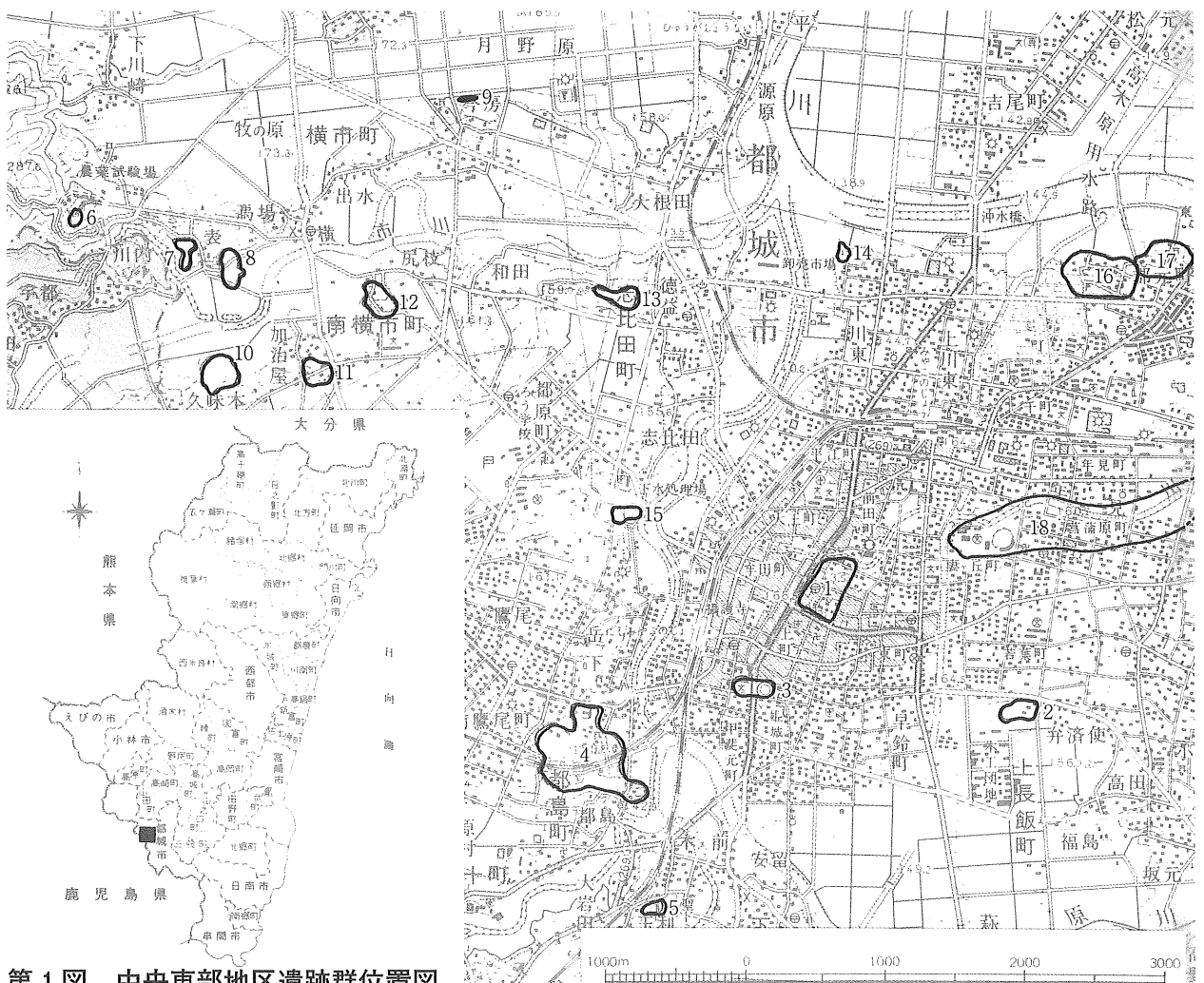
I. 調査に至る経緯

都城市では、停滞した状況にある中心商店街の活性化と、隣接する住宅地域の居住環境の向上を目的に、平成8年度から都城広域都市計画事業「中央東部土地区画整理事業」に着手している。この事業の対象地である中央東部地区（対象面積：約12.9ha）は、当市の主要幹線道である国道10号沿いに形成された中心市街地の北東部に位置しており、戦前から続く商店街と昭和初期以降の住宅が密集・混在した地域となっている。

この中心市街地一帯は、文献史料等から江戸初期（元和年間）以降に整備された町屋群がその基盤になっていると推測されており、実際にその町並みの一部には、現在でも寺院や家臣団の屋敷地の名称を冠した近世期の町割小路が活かされている。そのため、今回の区画整理事業の本格的な開始により、同地区に遺存している景観を含めた文化財の喪失が危惧されたことから、平成6年度に事業を所管する都城市区画整理課（旧都市開発課）と同文化課との間で文化財の保護策について協議を行った。その結果、事業の実施に先立って同地区内に残っている小路・史跡等の映像記録化を目的とした「都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査」を行うとともに、埋蔵文化財への影響が予想される道路・公園新設部分については発掘調査を実施することとなった。これを受け、史跡・旧街路等調査は平成8年度に映像記録の作成と報告書^{*1}の刊行を、発掘調査については平成7年度の柳川原遺跡第1次調査を皮切りに、事業と並行しながら現在も継続的に調査が実施されている。

なお、このうち本書には、平成7～9年度に実施した柳川原遺跡第1～3次調査と、平成8・9年度に実施した中町遺跡第1・2次調査の概要について所収している。

※1 都城市文化財調査報告書第41集「都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書」1997



第1図 中央東部地区遺跡群位置図

- 1. 中央東部地区遺跡群 2. 上ノ園第2遺跡 3. 都城島津氏領主館跡 4. 都之城跡 5. 大岩田村ノ前遺跡 6. 母智丘原第1遺跡 7. 新宮城跡 8. 鶴喰遺跡
- 9. 月野原第2遺跡 10. 中尾山・馬渡遺跡 11. 加治屋遺跡 12. 田谷・尻枝遺跡 13. 正坂原遺跡 14. 下川東牧ノ原地下式横穴墓群 15. ニタ元遺跡 16. 松原地区遺跡 17. 久玉遺跡 18. 年見川遺跡

Ⅱ. 遺跡の位置と環境

中央東部地区遺跡群の所在する都城市は、九州島の東南部、宮崎県の南西部に位置している。市域は東を柳岳や東岳を主峰とする鰐塚山地に、西を白鹿岳、瓶台山から霧島山系へと連なる山地に囲まれた、南北に細長い地溝状の盆地底のほぼ中央を占めている。当遺跡群が所在している中央東部地区は、この盆地底の中央に形成された都城市街地の北東部に位置しており、行政区分上は天神町、中町、蔵原町の一部がこれにあたる。地形的には、都城盆地東部に連なる鰐塚山地の裾野から、盆地中央を南北に貫流している大淀川に向けてなだらかに広がる一万城扇状地の端部に立地しており、全域が標高145m前後のほぼ平坦な地形を呈しているが、大淀川の支流・年見川に面した当地区の北側部分は比較的河川による開析が進んでおり、その流域には扇状地面と比高差約3mを計る緩やかな低地面が形成されている。

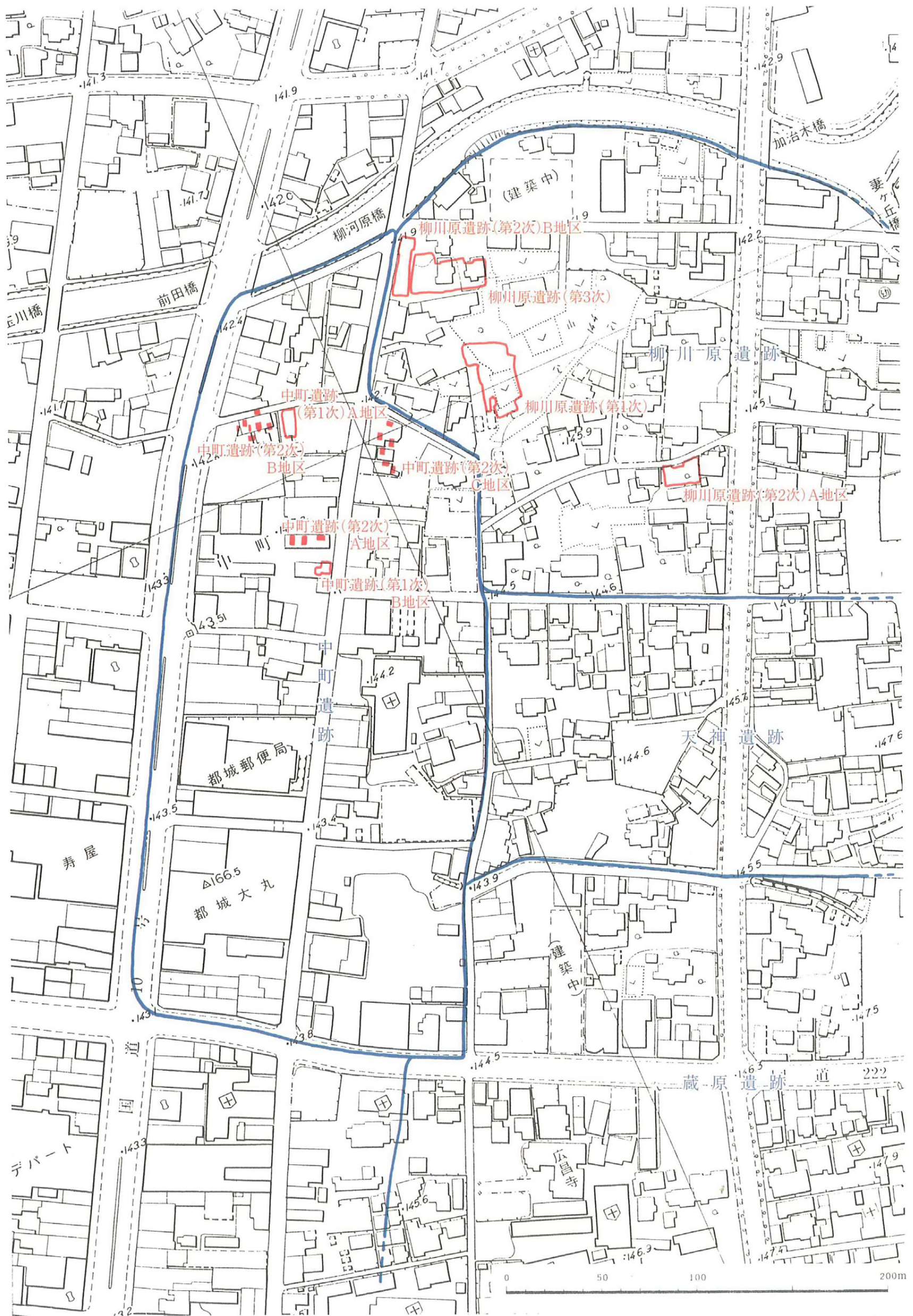
市内では最も早い段階から市街化が進んできた当地区周辺の歴史的環境については、文献史料や地名等から推察される近世以降の状況を除けば、年見川の上流部で確認された年見川遺跡（弥生時代後期～終末期頃の集落遺跡）の調査がほぼ唯一の事例であり、これまで中世以前の状況についてはほとんど明らかにされていなかったのが実情である。しかし、今回中町遺跡においてP11（桜島・末吉軽石）、KMS（蒲牟田スコリア）層の下位に遺存する縄文時代早期の遺構・遺物が確認されたほか、柳川原遺跡では集落跡の存在を示唆する弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の竪穴住居跡や土器・石器、古代末～中世初頭頃の掘立柱建物群や舶載磁器、黒色土器等が検出されたことから、長年の開発によって攪乱を受けた断片的な資料からではあるものの、中世以前の人々の営みの一端がおぼろげながら明らかになってきたといえよう。

近世以降の様相については、文献史料や古絵図等に描かれた町割より、概ねそのアウトラインをイメージすることができる。現在の市街地形成に直接的、間接的に関与しているこうした近世町屋群の成立は、元和元年（1615年）の一国一城令後に都城領主・都城島津氏によって進められた領主館（現在の都城市役所周辺）の造営が契機となっている。その整備は、領主館と当時の幹線道であった高岡筋往還（高岡街道）及び志布志往還（志布志街道）周辺を中心に進められ、これらの幹線道を結ぶ小路・馬場によって区画された領主館の周辺部には、家臣団の屋敷群が配されていたことが明らかになっている。さらにその外郭には町屋群である本町・唐人町（幕末には広小路町・本町・唐人町の三町）が求心的に配置されており、領主館を中心とする城下町の性質を意図した都市基盤の整備であったことが指摘されている。今回調査を実施した中央東部地区もこうした町屋群の一部（唐人町の東半部）にあたり、現在の町並みからも往時の町割に関係する小路や史跡を局所的ながら確認することができたが、それらの詳細については「都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書」（都城市文化財調査報告書第41集 1997）に譲りたいと思う。

なお、今回調査を実施した中央東部地区は、戦前から住宅・商店等が密集した地域であったことから、表面採集を中心とした遺跡詳細分布調査の実施が困難であり、昭和61年に行った市内中央部の分布調査の際にも、当地区を含む中心市街地一帯は調査対象から除外されていた。そのため、今回はまず本調査に先立って試掘調査を実施し、遺跡の所在の有無を確認する作業から着手することとなった。その結果、複数の試掘トレンチで中～近世期の遺構・遺物が確認されたことから、周知の埋蔵文化財包蔵地として当地区周辺の広い範囲を指す「前田・中原地区」に依拠する遺跡名を新規登録し、平成7年度分を同遺跡の第1次調査として本調査を開始した。しかし、その後の作業で調査地点が複数の小字にまたがることが判明したため、平成8年度以降は小字名に依拠した4遺跡（柳川原遺跡、天神遺跡、中町遺跡、蔵原遺跡）に細分・再登録し、これらの総称についても「中央東部地区遺跡群」に変更して表示することとした。そのため、平成7年度に実施した前田・中原地区遺跡第1次調査についても、柳川原遺跡第1次調査に名称を改めている。

Ⅲ. 調査の概要

当遺跡群における発掘調査は、地区の北側から順次着手される区画整理事業に先行して行う計画であり、平成7～9年度は柳川原遺跡と中町遺跡の範囲内において、都市公園や市道が新設・整備される部分と、住宅や店舗予定地の一部を対象に調査を行っている。ただし、住宅や店舗が密集している地域における区画整理事業



第2図 中央東部地区遺跡群 遺跡区域図及び調査区域図

第3図 柳川原遺跡(第1~3次)
中町遺跡(第1・2次)調査区域図

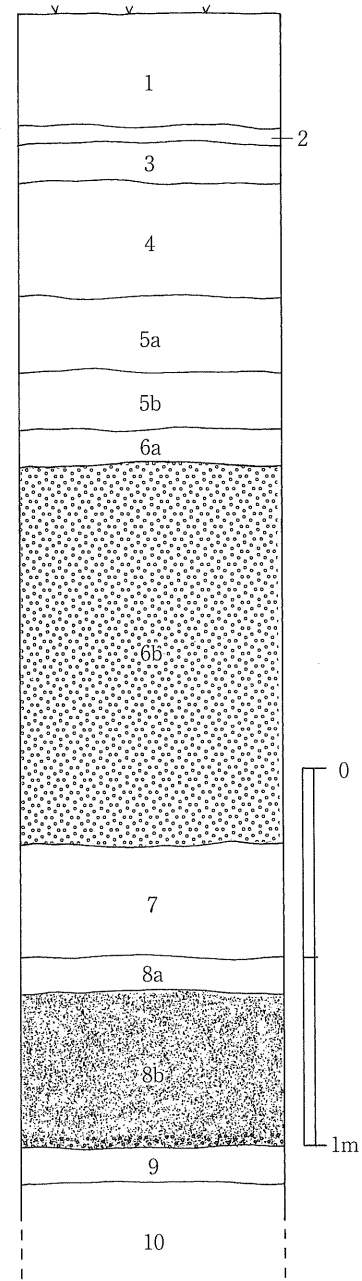


では、既存施設の撤去から移築・新設までの期間が限られていることから、結果的にそれが調査箇所や調査期間に対する大きな制約となっているのが実情である。そのため、個人住宅が中心で換地計画にも比較的余裕があった柳川原遺跡では、公共座標軸系のS・N座標線に一致するメッシュをもとにしたグリッド法（10m×10mを1単位とする）を用いて調査を行うことが可能であったが、店舗の解体・建設までに時間的余裕がなく、既存の建物による著しい攪乱も予想された中町遺跡については、部分的なトレンチ調査を行うにとどまっている。なお、面調査を行った柳川原遺跡では、調査の便宜上、各調査地点ごとにグリッドを設定していることから、東西方向のアルファベットと南北方向の算用数字の組み合わせで呼称しているグリッド番号についても、各調査区ごとに個別表記している。

柳川原遺跡の各調査地点は、第1～3次調査（4地点）のうち、第1次調査（略記号：YG1）と第2次調査B地区（YG2B）、第3次調査（YG3）が年見川沿いに形成された低地面上に、第2次調査A地区（YG2A）のみがやや内陸の扇状地上に立地している。また、中町遺跡第1・2次調査の各調査地点（NM1A・1B、NM2A～2C）は、いずれも低地面と扇状地の間に形成された緩傾斜部に立地している。

調査の結果、柳川原遺跡では近世の溝状遺構や掘立柱建物跡を中心に、弥生時代後期後半～古墳時代前期頃の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、古代末～中世初頭頃の掘立柱建物跡等が検出されている。また、大半の調査地点が御池降下軽石層（縄文中期以降の遺構検出面）まで至る削平を受けていた中町遺跡においては、近世から近代にかけての柱穴群や溝状遺構が検出されたほか、アカホヤ火山灰層下位で縄文時代早期の散石遺構等が確認されている。遺物については、両遺跡とも近世の遺物が主勢を占めているが、貝殻系の円筒形条痕文土器片をはじめ、黒色磨研土器や弥生時代後期末～古墳時代前期頃の土器、古代末～中世初頭頃の舶載磁器や黒色土器など、わずかではあるがこの地における縄文時代以降の断続的な営為の痕跡をうかがい知ることができる資料も確認されている。

以下、各調査区ごとに出土遺構・遺物の概要に触れ、当遺跡群全体の中での資料の位置付けについては、V. 小結でまとめて行うこととした。



第4図 柳川原遺跡基本土層図

IV. 調査の記録

1. 柳川原遺跡の基本層序

[第4図]

当遺跡の基本層序は、後世の攪乱や造成工事等の影響、地形の形成過程の違いなどにより、必ずしもすべての調査地点が同一の様相を示しているわけではない。そのため、ここでは比較的遺存状態が良かった第1次調査の基本土層をベースに当遺跡の基本層序を示し、調査地点ごとの状況については各項で個別に触れることとした。各層の概要は、次の通りである。

第1層：文明降下軽石粒、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層（表土層）、第2層：文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層、第3層：黒色粘質シルト層、第4層：御池降下軽石細粒をまばらに含む黒色粘質シルト層、第5a層：御池降下軽石細粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層、第5b層：御池降下軽石細粒と黒色粘質シルトの混土層、第6a層：御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層（御池降下軽石層の漸移層）、第6b層：御池降下軽石層（霧島山系御池火口を噴源とする黄橙色の軽石層；約4,200年前）、第7層：漆黒色粘質シルト層、第8a層：アカホヤ火山灰を多量に含む黒褐色粘質シルト層（アカホヤ火山灰層の漸移層）、第8b層：アカホヤ火山灰層、第9層：乳白色砂質シルト層、第10層：灰褐色弱粘質シルト層。

当遺跡では、攪乱の影響も含め、第1層から第5b層にかけて各期の遺物

が混在して出土する状況も見受けられたが、古代末～中世初頭や近世の遺物は概ね第1層～第3層に、縄文時代晩期～古墳時代前期頃の遺物は第5a層～第5b層に集中する傾向が指摘できる。なお、調査の便宜上、いずれの時期の遺構も御池降下軽石粒の混入量が多くなる第6a層下面から第6b層上面で検出を行っている。

2. 柳川原遺跡・第1次調査 (YG1)

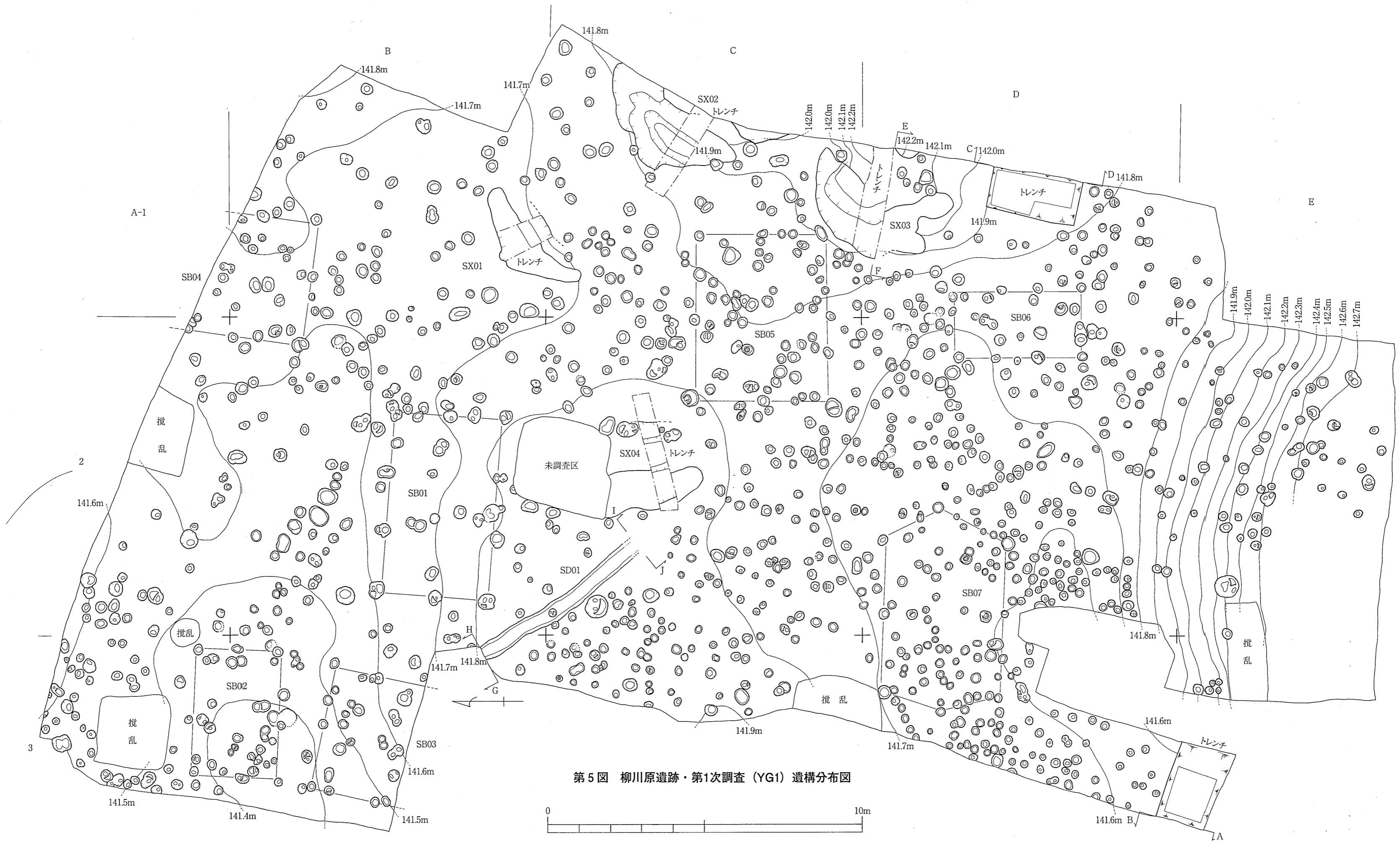
[第5図～第14図, 表1・2, 図版1]

当地区の調査は、市道新設部分及び宅地予定地の約710㎡を対象に、平成7年8月17日から同年10月31日にかけて実施している。当区の現況は荒蕪地であったが、戦後まもなくの時期まで製糸工場が所在していた関係で、現在でも周辺にはその関連施設が多数遺存している。今回の調査範囲内でも、こうした建物の基礎などによる攪乱が一部で認められたが、遺構検出面となる御池降下軽石層の残存状態は概ね良好であった。御池降下軽石層上面で確認した当地区内の地形は、中央部東側がわずかに隆起した自然堤防状の地形を呈しているほか、南部は比高差約1mを計る河岸段丘状の様相を示しており、これらの間をぬうように北西ないし南西方向へと延びる浅い谷地形が認められる。また、御池降下軽石層の堆積状況を観察すると、下位になるにつれて互層となった砂粒層や軽石と砂粒の混土層が堆積しており、鉄分の沈着による軽石の赤化傾向が認められる同軽石層下面付近は、現在でも地下水の湧水レベルとなっている。そうしたことから、当調査区一帯では御池軽石噴出中も河川の影響を受けながら先に触れた微地形の形成が進み、噴出が完全に終わった段階でようやく離水したと推測され、本格的に居住空間として機能しはじめたのは地形的に安定した縄文時代後・晩期以降であると考えている。今回の調査では、こうした御池降下軽石層上面で弥生時代後期後半～終末期頃と古代末～中世初頭頃の二時期を中心とする遺構群を検出したほか、弥生時代から近世にかけての時期の遺物を確認している。

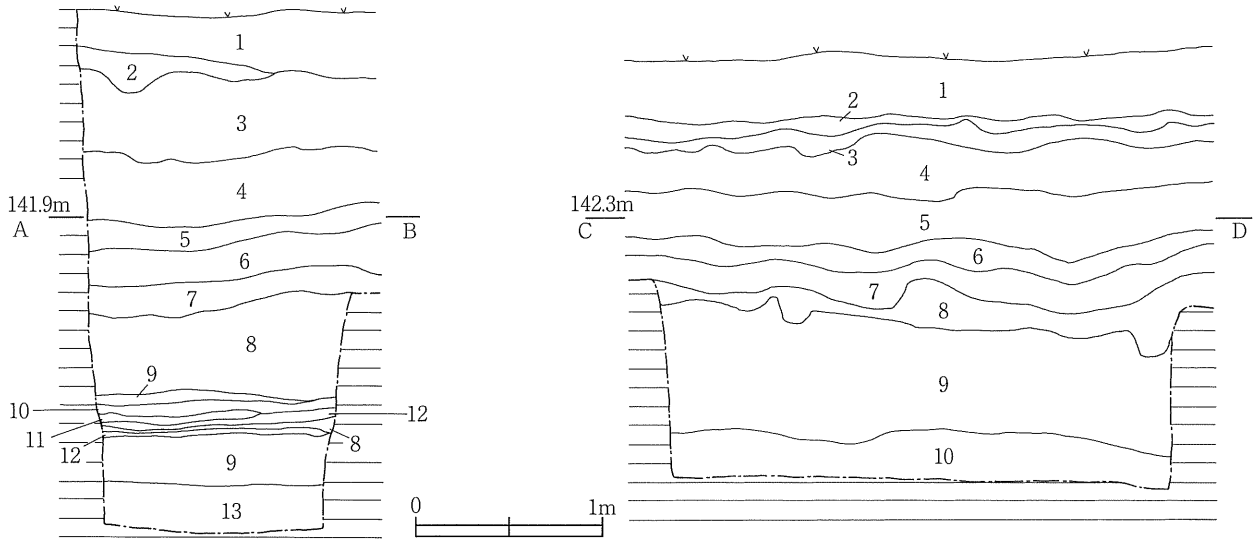
まず、遺構については、掘立柱建物跡7棟と柱穴群、溝状遺構1条、倒木痕4ヶ所が挙げられる。約1000箇所確認している柱穴は、埋土の状況から4タイプ(①群:主たる埋土が基本土層の第1層ないし第2層、②群:第3層ないし第4層、③群:第5a層、④群:第5b層)に大別でき、出土遺物等からみて、①群を中世後半～近世(一部近代も含む)、②群を古代末～中世初頭頃、③群を弥生時代後期後半～終末期頃に比定している。また、遺物を伴わない④群については、他地区の調査事例から縄文時代晩期頃と考えている。これらの検出割合は③群→④群→②群→①群の順に多く、①・④群は調査区南側、②群は北側に偏在する傾向が認められる。また、これらに伴う遺物としては、①群の柱穴から16C代の福建・広東系とみられる青花・碗(10)や薩摩焼の土瓶(茶家)の蓋(82)が、③群の柱穴からは、頁岩製で基部に挟りがほとんど入らない正三角形の打製石鏃(6)が出土している。

つぎに掘立柱建物跡については、検出した柱穴数に比してわずか7棟のみの確認であったが、これらは建物を構成している柱穴の埋土から、概ね2時期(②群:SB01～03、③群:SB04～07)に大別することができる。古代末～中世初頭頃に比定しているSB01は、梁間2間(約3.6m)・桁行3間(約5.8m)の東西棟建物跡で、柱穴の切り合いが認められることから同じ場所での建て替えを想定している。SB02も東西棟建物跡で、梁間2間(約2.6m)・桁行2間(約4.0m)を計る。なお、この建物の範囲内からは12C前半頃の白磁・碗(9)が出土しており、遺構への所属関係が不明確ではあるものの、時期比定を行う上で有用な資料であると考えている。また、SB01・02の2棟は、主軸方向が類似していることから、同時期の建物である可能性が高いと思われる。SB03は調査区際で確認した建物跡で、南北棟・東西棟の別は不明である。規模は東西2間(約4.0m)、南北1間(約2.0m)以上を計る。これら古代末から中世初頭にかけての建物群は、同時期とみられる他の柱穴群と同様に、調査区北側一帯に集中する傾向がある。

SB04～07は、弥生時代後期後半～終末期頃に比定している建物群である。SB04は調査区北側で検出した建物跡で、区域外へ延びているため南北棟・東西棟の別は不明である。東西2間(約4.0m)、南北1間(約2.0m)以上を計る。SB05は東西棟建物跡で、梁間2間(約4.0m)・桁行2間(約5.4m)を計る。SB06は梁間1間(約2.2m)・桁行3間(約4.0m)の南北棟建物跡である。SB07は梁間の中央柱穴が突出している、いわゆる棟持ち型の建物跡である。類例としては、市内丸谷町所在の中大五郎第2遺跡⁽¹⁾においてほぼ同時期の遺構が確認されている。規模は梁間2間(約4.0m)・桁行2間(約5.0m)で、東西棟建物跡である。これら4棟のうち、主軸の向きがほぼ一致しているSB05～07については、並存関係にあったことが想定される。また、この時期の建物群の分布には偏在した傾向は認められず、調査区全体にまんべんなく広がる様相を示している。今回の調査では、



第5図 柳川原遺跡・第1次調査 (YG1) 遺構分布図



〈YG1 基本土層図①〉

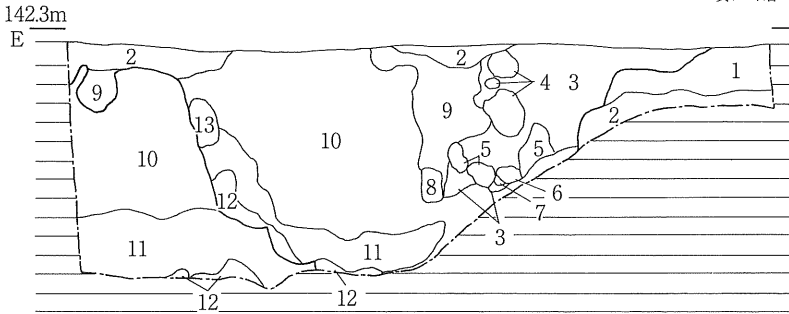
1. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層(表土層)
2. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
3. 黒色粘質シルト層
4. 御池降下軽石細粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
6. 御池降下軽石細粒と黒色粘質シルトの混土層

7. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
8. 御池降下軽石細粒層(下に灰青色砂粒を含む)
9. 御池降下軽石層(黄褐色の細粒軽石層)
10. 御池降下軽石層(黄褐色の細粒軽石層)
11. 9と灰青色砂粒の混土層
12. 灰青色砂粒層
13. 灰青色砂粒を多量に含む 8

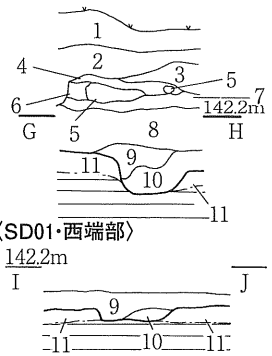
〈YG1 基本土層図②〉

1. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層(表土層)
2. 黒色シルト層
3. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
4. 黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石細粒をこわすかに含む黒色粘質シルト層
6. 御池降下軽石細粒をまばらに含む黒色粘質シルト層

7. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
8. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
9. 御池降下軽石細粒層
10. 赤化した 9



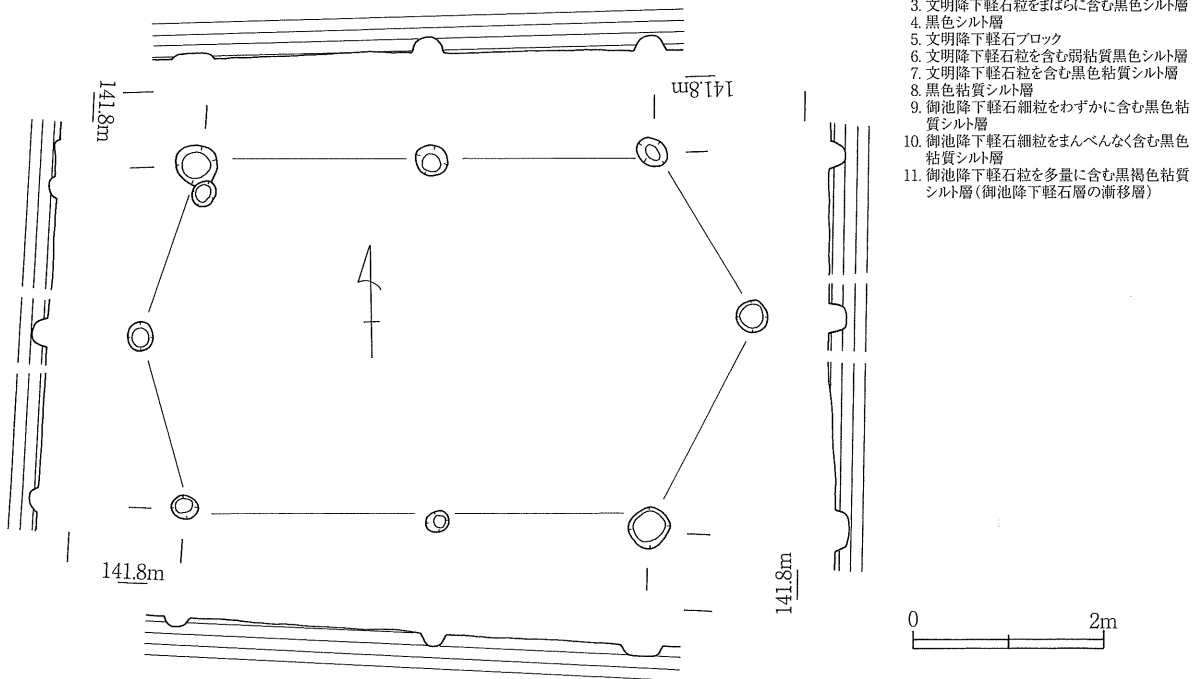
1. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層(表土層)
2. 黒色シルト層
3. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
4. 黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石細粒をこわすかに含む黒色粘質シルト層
6. 御池降下軽石細粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
7. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
8. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
9. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
10. 御池降下軽石細粒層
11. 赤化した10
12. 漆黒色粘質シルト層
13. 10と11の混土ブロック



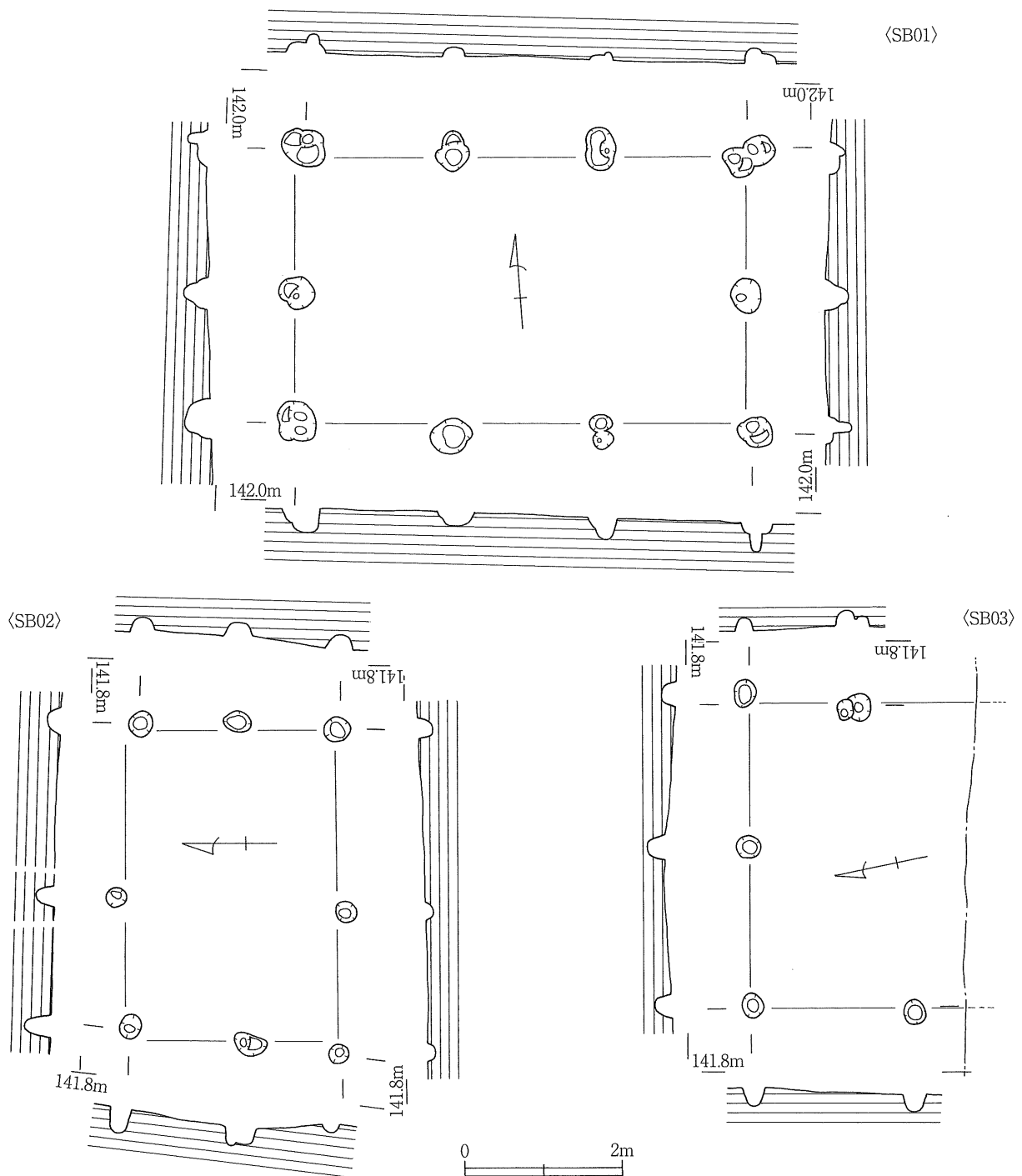
〈SX03〉

1. 御池降下軽石粒をまんべんなく含むやや褐色がかった黒色粘質シルト層
2. 御池降下軽石粒を多量に含むやや褐色がかった黒色粘質シルト層
3. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
4. 御池降下軽石細粒をわずかに含む黒色粘質シルトブロック

第6図 YG1・基本土層図及び遺構土層断面図 (SD01, SX03)



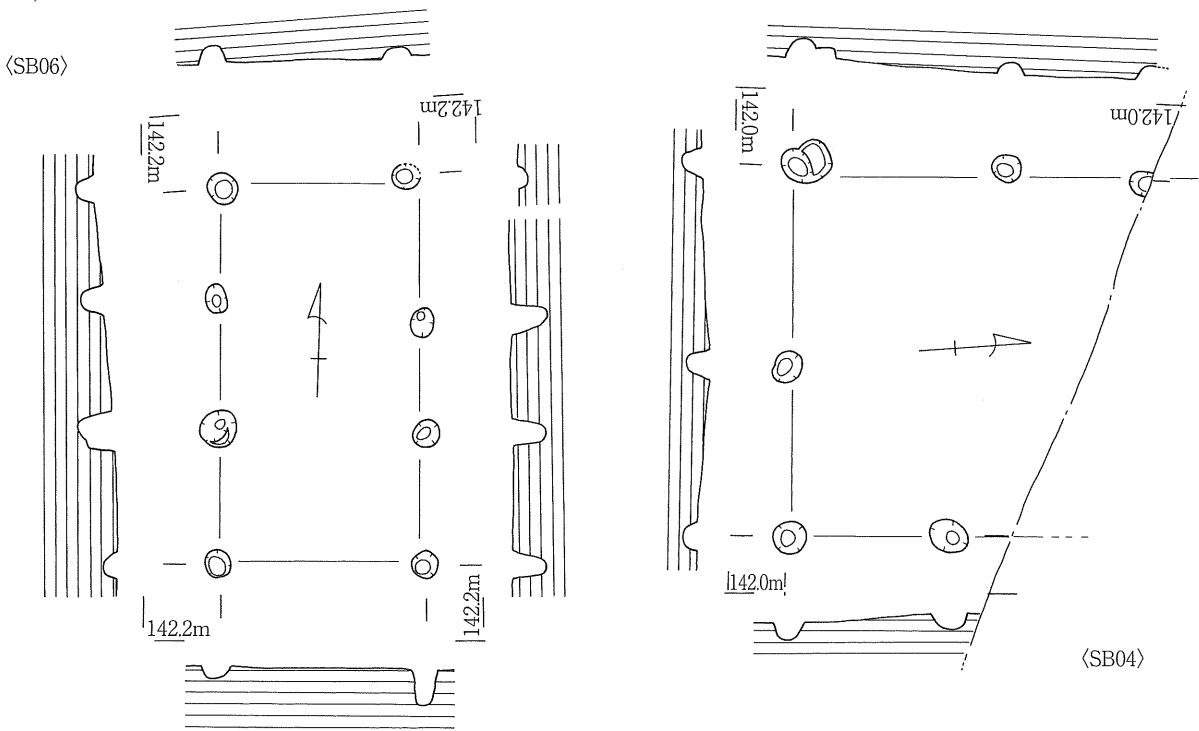
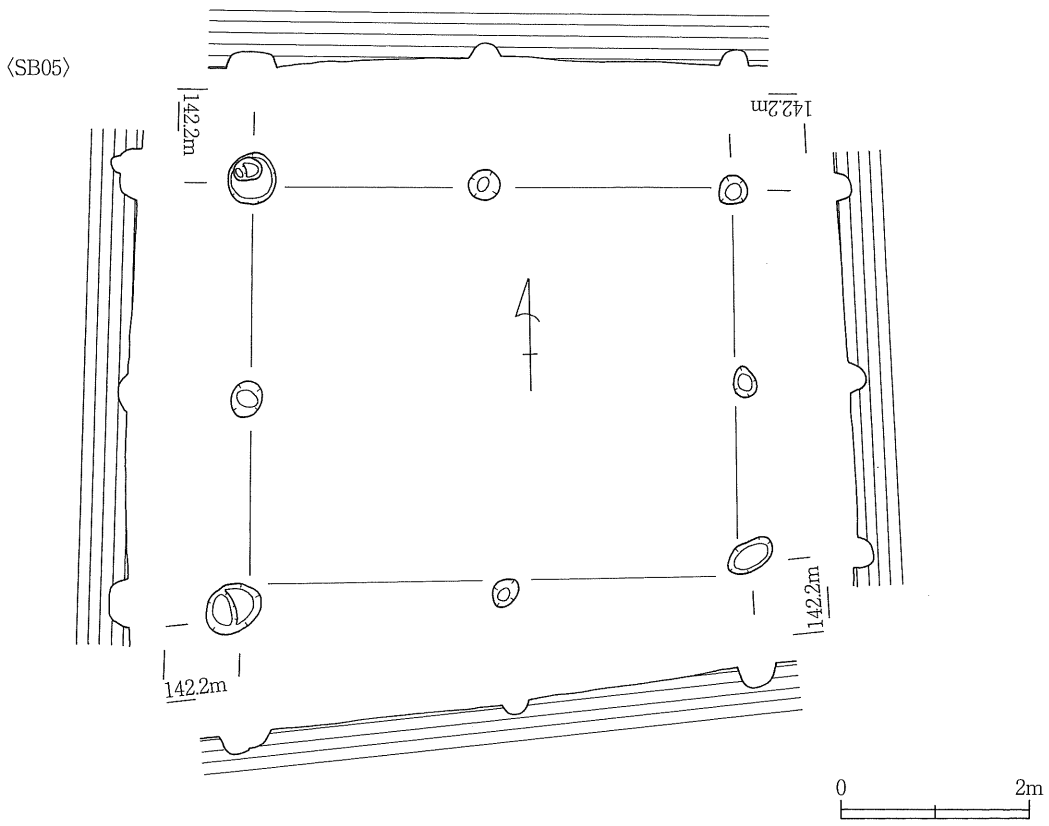
第7図 YG1・掘立柱建物跡実測図① (SB07)



第8図 YG1・掘立柱建物跡実測図② (SB01~03)

掘立柱建物群に伴う竪穴住居跡等は確認されていないが、やや内陸に位置する第2次調査A地区 (YG2A) でこれらに後出するとみられる住居跡が検出されていることや、調査区北西部でまとまった量の遺物 (1~4) が出土していることから、この段階にはすでに河川沿いの低地面一帯まで当該期集落が広がっていた可能性を示唆することができよう。

SD01は、SB01~03が分布する調査区北西部から南東方向に延び、途中で消失する溝状遺構である。幅員約0.5m、深さ約0.2~0.5m、確認した長さは約5.8mを計る。基本土層の第4層ないし第5a層を主たる埋土とし、埋没後かなりの時間をおいて文明降下軽石が堆積していることから、古代末~中世初頭頃のSB01~03等に伴う遺構であると考えている。



第9図 YG1・掘立柱建物跡実測図③ (SB04~06)

SX01～04は倒木痕とみられる。古代末～中世初頭頃の柱穴に切られていることから、それ以前の痕跡と考えられるが、明確な時期は不明である。いずれも東ないし南東側への倒木痕であり、台風等を含めた自然災害に因る可能性が高い。

出土遺物については、遺構に共伴するものが皆無であり、大半が包含層中からの出土であった。これらは大きく弥生時代後期後半～終末期、古代末～中世初頭頃、近世～近代の3期に分けられるが、出土遺物量の約9割を近世以降の遺物が占めるという状況であった。

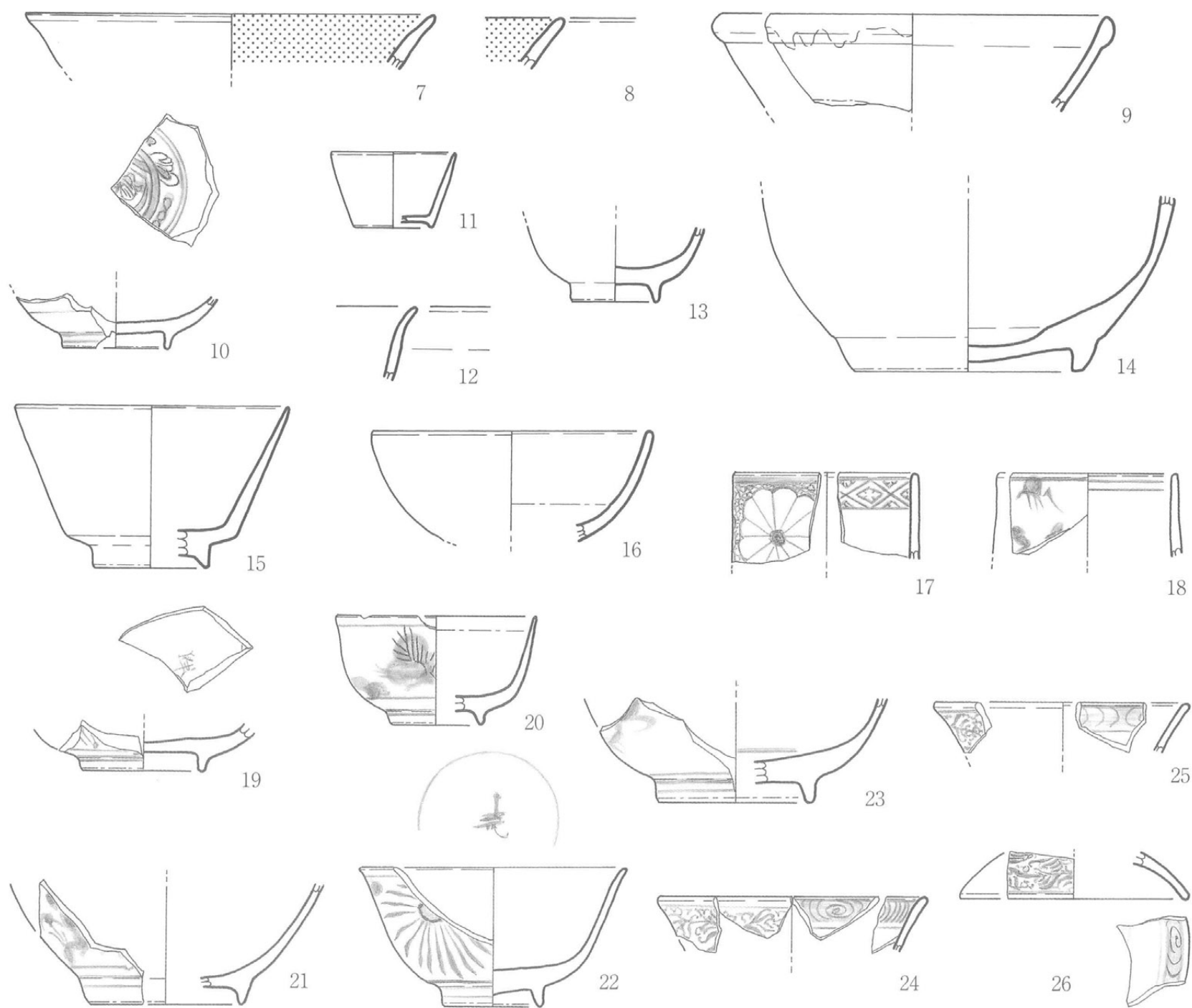
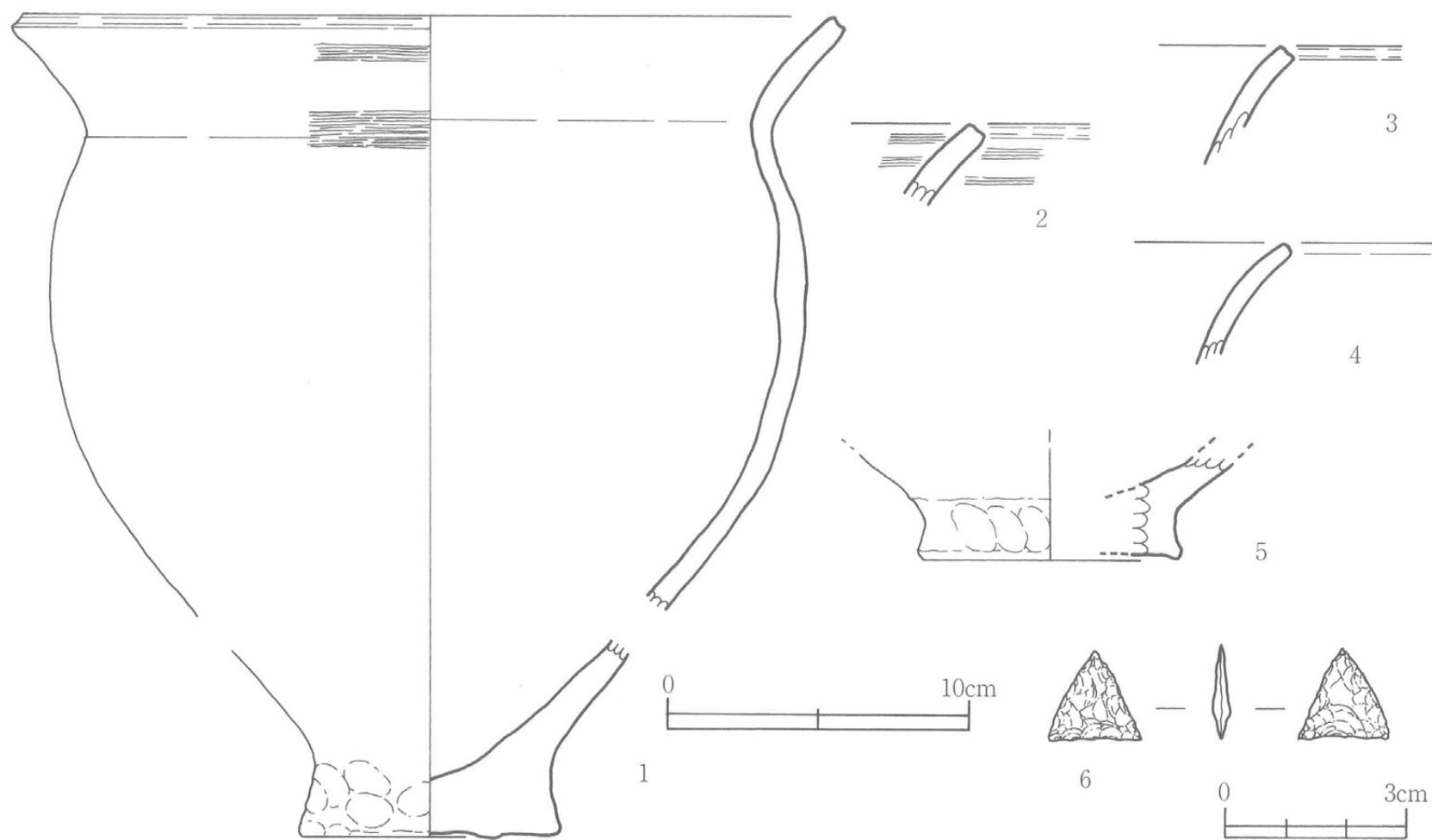
まず、弥生時代後期後半～終末期頃の遺物としては、調査区北西部の包含層中からまとめて出土した甕（1～5）がある。1は胴部上位に最大径部が位置し、ややぶい稜を伴うくびれた頸部から口縁部が緩やかな「く」の字状に外反する甕である。底部は指押えによって横に張り出した平底であり、さほど小ぶりではないものの、最大径部からやや外湾しながら底部にいたる胴部のシルエットから、全体的にしまった印象を受ける。2～5も同種の甕の破片であり、1～3の口唇部には強い横ナデによる凹線状のくぼみが、1・5の底部外面には指押えに伴う明瞭な指頭痕が認められる。口縁部から胴部にかけての調整は、いずれもナデ及び横位のハケ目である。これらは大半が包含層中からの出土であるが、③群柱穴の埋土上面で確認した土器も含まれることから、当該期の掘立柱建物群に伴うと考えている。

古代末から中世初頭頃（12C中～後葉）に位置付けられる遺物として7～9が挙げられる。7・8は黒色土器で、口縁部のみの破片であるため、坏・壺の別、高台の有無は不明である。2点とも口唇部がやや尖り気味で、直線的に外反する器形であると考えられる。黒化処理はともに内器面のみであるが、8は内外器面に丁寧なミガキが施されている。太宰府土器型式のXIIIないしXIV期⁽²⁾を想定している。9は口縁が玉縁状を呈する白磁碗である。玉縁のつくりは小ぶりであるが、底部の形状が不明で外面体部下半も露胎であることなどから、いわゆる白磁碗Ⅳ類⁽³⁾と考えたい。

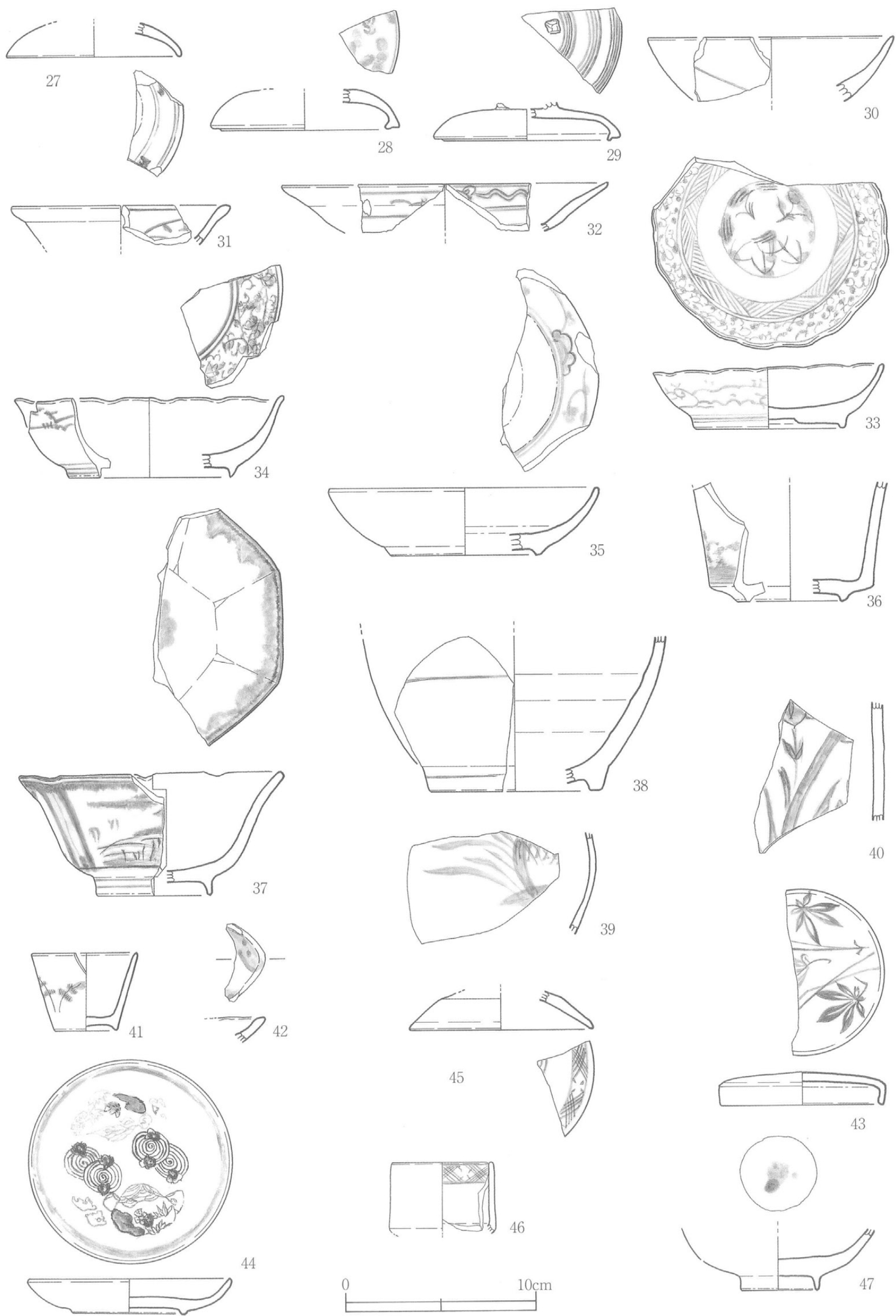
今回の調査で確認した近世の遺構は柱穴のみであるが、包含層中より出土した遺物の大部分は当該期のものである。種別的には陶器、磁器、土師器、金属製品、石製品に分かれ、陶磁器類が他を圧倒している。

近世の磁器類（11～47）の大半は波佐見焼も含めた肥前系とみられるが、薩摩藩内では17C後半以降に磁器生産が開始されており⁽⁴⁾、同藩に属す私領地であった当地にも18C以降には少なからずそうした製品が流入していたことも念頭に置いておく必要があると思われる。11～16は白磁及び青磁の猪口、小杯、瓶、碗で、細部の特徴からいずれも18C後葉～19C中葉頃の範疇に収まると考えている。染付（17～43）には、碗、皿、鉢、蓋、瓶、猪口等々のバリエーションが認められる。碗（17～25）は筒形碗、丸形碗、広東碗、端反碗に分かれ、筒形碗（17・18）や高台が低めの広東碗（21）などは18C末～19C初頭頃、蓋（26）が付く端反碗（22・24・25）は19C前半頃に比定している。皿は輪花形の34が18C後半頃で、内面見込が蛇ノ目釉剥ぎとみられる30・35は18C末～19C初頭頃、端反（31・32）や蛇ノ目凹形高台の輪花皿（33）はこれにやや後出すると考えている。概ね19C前半頃と考えている鉢には、蓋（28・29）付きで小ぶりのもの（20）や、型打成形の角鉢（37）がある。蓋付鉢は身の内面口縁部と蓋の身受部が露胎で、29の身受部には熔着防止のために塗布されたアルミナ砂とみられる熔着物がある。瓶類には徳利形（38・39）のほか、板作りの角瓶（40）とみられる酒瓶がある。前者は19C代、後者は17C末～18C初頭頃に比定している。41は11とほぼ同時期の猪口、42は19C代のレンゲ、明治時代以降まで下がる43は合子蓋である。44も幕末以降の所産で、赤色・緑色の顔料を用いた「上絵」の色絵皿である。45～47は青磁染付で、45・46は18C末頃の肥前系の蓋付筒形碗、47も肥前系の可能性が残る19C中頃の碗である。

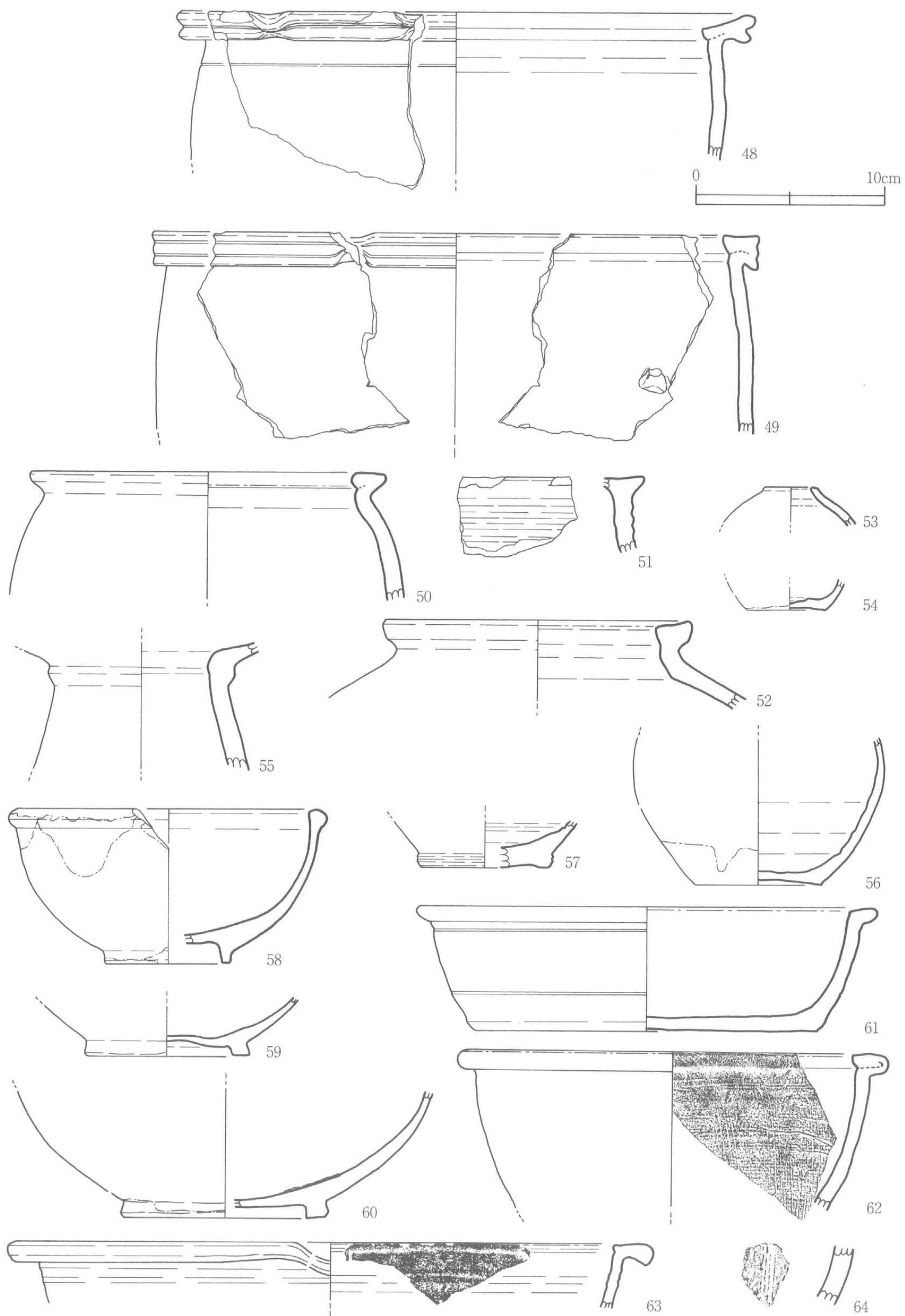
陶器（48～90）には、甕、壺、瓶、鉢、搗鉢、碗、火入、皿、土瓶等の器種が見られる。これらの大部分はいわゆる薩摩焼であるが、その主たる生産窯は薩摩藩内でも複数にわたっており⁽⁵⁾、また同様の技術・意匠を用いた小規模生産地の存在（柳川原遺跡でも窯道具が出土しており、地焼的な窯の存在が示唆できる）も否定できないことから、ここではそれらの総称として「薩摩系」陶器という表現を用いた。なお、今回出土した陶器類の上限は、共伴する磁器類とほぼ同じ18C後半頃を想定しているが、薩摩系陶器については未だにその編年作業が停滞した状況にあるため、下限は19C代とするにとどめおきたい。まず、甕には口縁部を折り返して肥厚させ、さらに波状につまんで装飾するもの（48・49）と、口縁断面が三角形を呈するもの（50・51）があり、51には苗代川系の特徴である表面の銀化作用がみられる。また、49の内面に認められる鉤状の貼付は、重ね焼きを行う際に施した胎土目積の亜種の可能性がある。壺には口縁が肥厚する中型壺（52）のほか、茶入のよう



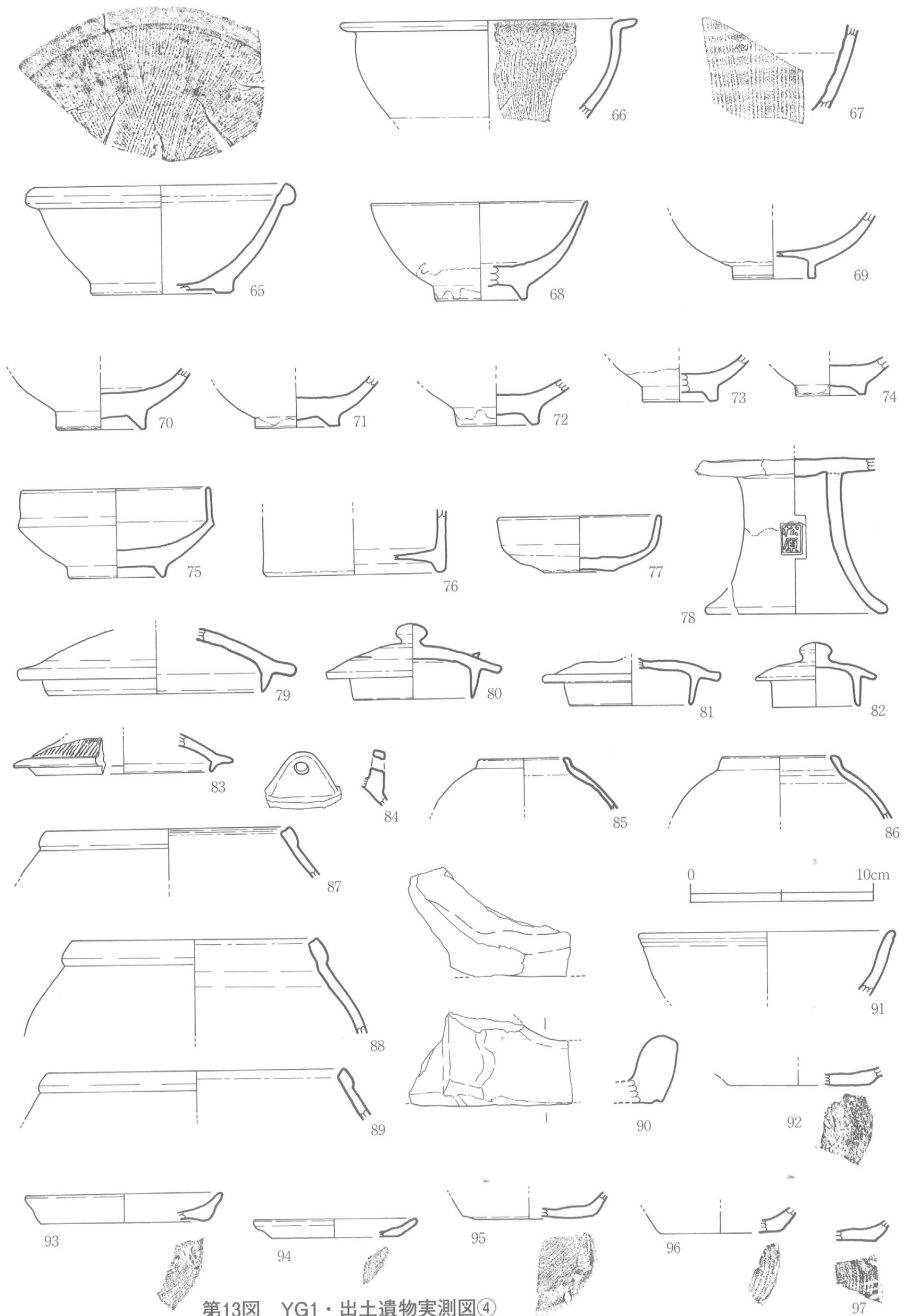
第10图 YG1·出土遺物実測図①



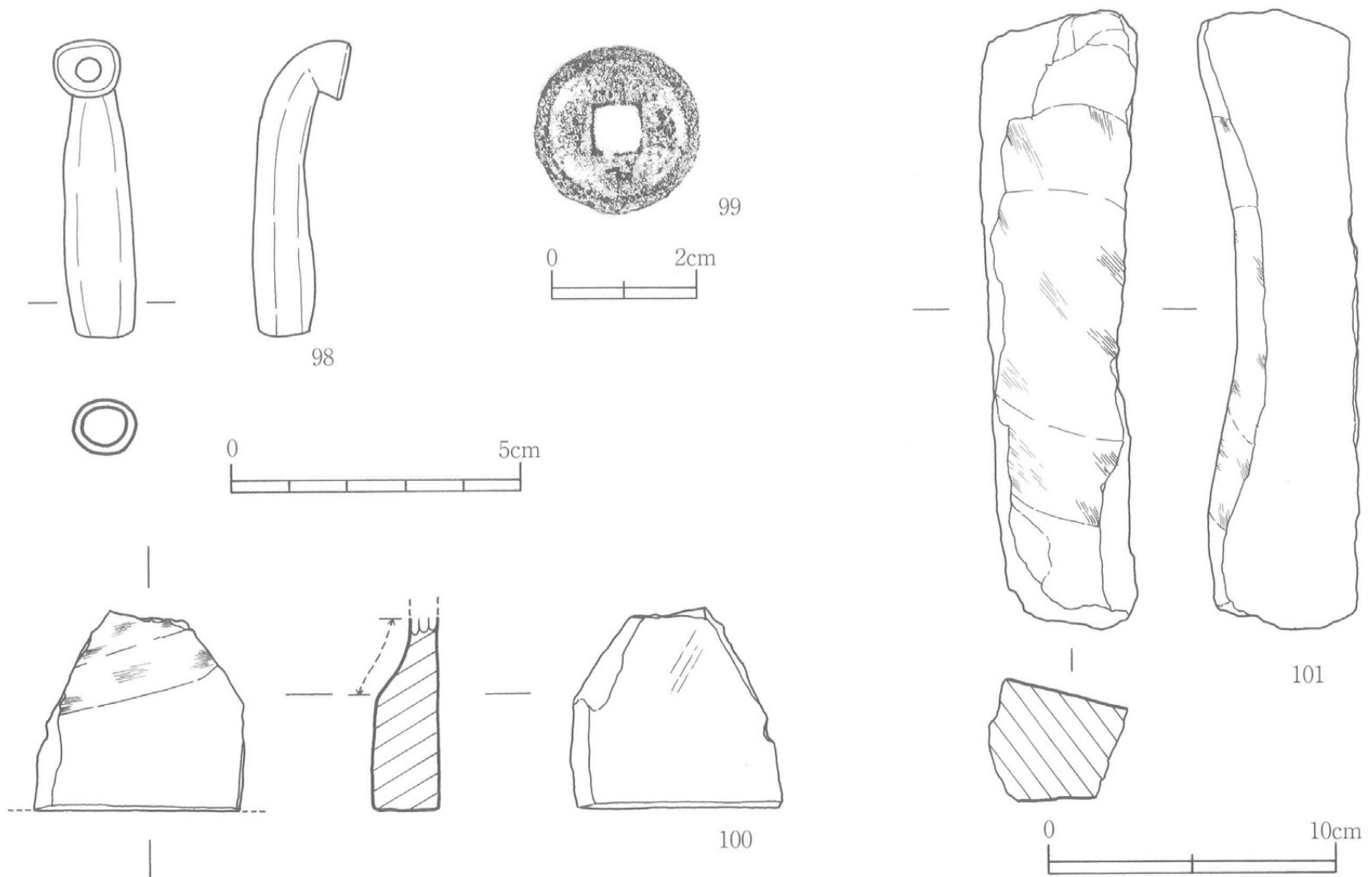
第11図 YG1・出土遺物実測図②



第12図 YG1・出土遺物実測図③



第13図 YG1・出土遺物実測図④



第14図 YG1・出土遺物実測図⑤

な小壺（53・54）がある。瓶類は、口縁が大きく外反し、頸部に突帯を有する仏花瓶（55）と胴部が膨らむ徳利（57）に分けられる。鉢は、半球状の器形を呈すもの（58～60）と円筒形で水盤状の浅鉢（61）に大別される。58は、ベースとなる淡黄色の釉に緑色系や褐色系の釉薬が掛けられたいわゆる龍門司三彩で、鹿児島（鶴丸）城本丸跡⁶⁾等でも散見される遺物である。59も同種とみられ、内面見込には等間隔に配置された長方形の胎土目積痕が認められる。60は片口鉢で、内面見込には砂目積痕や別個体の熔着痕が残る。底部が高台状に肥厚する57は体部の器形が不明であるが、一応この範疇に含めた。62～67は播鉢である。口縁形態は、折り返して肥厚させるもの（62）、「L」字形に折って外反させるもの（63・66）、玉縁状に肥厚するもの（65）がある。播目は、やや小ぶりの器形（65・66）の方が目が細かく、深い傾向がある。丸形を呈する碗は、底部が肉厚で高台が低いもの（68・70～74）と、器壁が薄く高台の高いもの（69）に分かれ、さらに前者は見込に施された蛇ノ目釉剥ぎの有無で細分できる。また、高台内に兜巾状の削り出しがみられるものは、蛇ノ目釉剥ぎが施されたものと共通する傾向がある。なお、腰折れ形の75をここでは碗に加えたが、山元古窯跡⁷⁾では類似品が小鉢に分類されており、検討の余地がある。76は火入、77は皿で、75同様白化粧土が施されている。脚台付皿とした76は、胎土や釉薬の雰囲気が他の薩摩系陶器とは異なっており、時期差ないし生産地の差異が示唆できる。79～89は土瓶及びその蓋である。いずれも身の口唇部から内面口縁部が釉剥ぎ取り、蓋の身受部は露胎となっていることから、身・蓋一体での重ね焼きを意図していたと考えられる。ただし、80の庇部には別個体の熔着痕が認められることから、蓋のみ、もしくは別器種の重ね焼きも想定できよう。なお、83・85には白薩摩風に白化粧土が施されている。90は白濁色地に藍色・緑色の釉が掛けられた三彩で、盤状の器形を呈す可能性があるが詳細は不明である。関西系の意匠の強い遺物である。

91～97は土師器の坏及び小皿である。底部の切り離しは、92のみヘラ切りで、93・96・97は糸切りである。また、92・95は切り離し後の板状圧痕が認められる。法量や体部の傾き等から、古代末～中世初頭頃と中世後半～近世の2時期に大別されると思われる。

98は青銅製の煙管の雁首部、99は寛永通寶である。99はかなり磨滅しているため、古寛永、新寛永の別は不明である。100・101はともに明瞭な擦痕・研磨痕が認められる石製品で、100は墨痕等はみられないが、その形状から石英斑岩製の硯と考えている。また、101は粘板岩製の砥石である。

〈註〉

- (1) 山田洋一郎 1996 「中大五郎第2遺跡」『丸谷地区遺跡群中大五郎第1遺跡・中大五郎第2遺跡・本池遺跡・前畑遺跡』
都城市文化財調査報告書第34集 都城市教育委員会
- (2) 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- (3) 前掲(2)
- (4) 関一之 1995 『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書1 加治木町教育委員会
- (5) 前掲(4)
- (6) 戸崎勝洋・吉永正史編 1983 『鹿兒島(鶴丸)城本丸跡』鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書(26)
鹿兒島県教育委員会
- (7) 前掲(4)

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
1	B-3	5a層	弥生土器	甕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	横H・N (底部: 指頭痕)	N	㊸㊹大・多	㊸胴部下半:炭化物付着 ㊹胴部~底部:スス付着 口唇部:強い横ナデによる凹線
2	〃	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	横H	横H	㊺中・並 ㊻中・少	口唇部:強い横ナデによる凹線 硬質
3	〃	〃	〃	〃	浅黄橙	〃	N	N	㊼中・並 ㊽中・少	口唇部:強い横ナデによる凹線
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃?	〃?	㊾中・多 ㊿中・少	全体的に磨耗
5	一括	一括	〃	〃	〃~にぶい橙	〃	N(底部: 指頭痕)	N	㊿中・多	
6	C-1	pit	石器	石鏃						頁岩製
7	一括	4層	黒色土器	碗?	浅黄橙	褐灰	ロクロN	一部M	精良 混入物なし	
8	C-2	5a層	〃	〃?	淡黄	黒	M	M	〃	㊿㊿丁寧なミガキ 黒色土器B類か?
9	B-3	〃	磁器(白磁)	碗	灰白	灰白	ロクロN	ロクロN	㊿微・少	白磁碗IV類 体部下半:露胎
10	E-2	pit	〃(青花)	〃	〃	〃	〃	〃	精良 混入物なし	高台置付:露胎 福建・広東系?
11	一括	3層	〃(白磁)	猪口	〃	〃	型作り	型作り	〃	高台置付:露胎 貫入多い
12	〃	〃	〃(〃)	〃	〃	〃	ロクロN	ロクロN	〃	貫入多い
13	〃	〃	〃(〃)	小杯	青白	青白	〃	〃	〃	高台置付:露胎 貫入多い 青白磁か?
14	〃	一括	〃(〃)	瓶?	灰白	灰白	〃	〃	〃	高台置付:露胎,アルミナ砂状の熔着物あり ㊿露胎
15	〃	1層	〃(青磁)	碗	青白	青白	〃	〃	㊿微・少	高台置付:露胎 朝顔形 貫入多い 発色悪い
16	〃	2層	〃(〃)	〃	淡緑	灰白	〃	〃	〃	㊿見込:蛇ノ目釉剥ぎ,砂目積痕あり
17	〃	1層	〃(染付)	〃	灰白	〃	〃	〃	精良 混入物なし	㊿口縁:「四方襷文」 ㊿「菊花文」 筒型碗 肥前系か?
18	〃	一括	〃(〃)	〃	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	〃	㊿「雪持笹文」 筒型碗 肥前系か?
19	〃	1層	〃(〃)	〃	灰白	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	高台置付:露胎 ㊿見込:銘款あり
20	〃	2層	〃(〃)	鉢?	〃	灰白	〃	〃	〃	高台置付:露胎 貫入多い ㊿口縁:露胎 蓋付鉢
21	〃	一括	〃(〃)	碗	〃	〃	〃	〃	〃	高台置付:露胎 肥前系 広東碗
22	〃	〃	〃(〃)	〃	青みがかった 灰白	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	高台置付:露胎 端反碗 ㊿見込:「寿字文」 ㊿「菊花文」
23	〃	2層	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高台置付:露胎 ㊿口縁:「菊唐草文」の崩れ ㊿見込:蛇ノ目釉剥ぎ
24	〃	〃	〃(〃)	〃	灰白	灰白	〃	〃	〃	㊿「唐草文」 蓋付碗
25	〃	〃	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊿「唐草文」 蓋付碗
26	〃	一括	〃(〃)	碗蓋	〃	〃	〃	〃	〃	24・25とセットになる蓋
27	〃	1層	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊿天井部:露胎
28	〃	2層	〃(〃)	鉢蓋	〃	〃	〃	〃	〃	㊿身受部:露胎
29	〃	一括	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊿「四条圏線」3段 ㊿身受部:露胎,アルミナ砂状の熔着物あり
30	〃	〃	〃(〃)	皿?	〃	〃	〃	〃	〃	
31	〃	〃	〃(〃)	〃?	やや緑色が かった灰白	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	端反碗
32	〃	〃	〃(〃)	〃	灰白	灰白	〃	〃	〃	㊿見込:「波状文」 ㊿「唐草文」 端反碗
33	〃	〃	〃(〃)	〃	青みがかった 灰白	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	㊿見込:「松竹梅文」の崩れ? ㊿口縁:「唐草文」 ㊿「唐草文」 輪花皿 高台部:蛇ノ目凹形高台 アルミナ砂状の熔着物あり
34	〃	2層	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	㊿㊿「唐草文」 高台置付:露胎 輪花皿 肥前系?
35	〃	〃	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高台置付:露胎 ㊿口縁:「菊唐草文」の崩れ ㊿見込:蛇ノ目釉剥ぎ 波佐見焼?
36	〃	〃	〃(〃)	火入	〃	灰白	〃	〃	〃	筒型 ㊿露胎
37	〃	〃	〃(〃)	鉢	〃	青みがかった 灰白	型打成形	型打成形	〃	㊿見込:「花文」 ㊿「区割山水文」 八角形鉢 高台置付:露胎 肥前系
38	A-2	一括	〃(〃)	瓶	〃	灰白	ロクロN	ロクロN	〃	高台置付:露胎 ㊿ロクロ痕明瞭 肥前系
39	一括	2層	磁器(染付)	〃	青みがかった 灰白	〃	〃	〃	〃	㊿「草文」 肥前系か?
40	〃	〃	〃(〃)	角瓶 or壺	〃	〃	板作り	板作り (K,Nの痕 跡)	〃	㊿「草花文」 肥前系

表1 YG1・出土遺物観察表①

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
41	一括	2層	磁器(染付)	猪口	灰白	灰白	ロクロN	ロクロN	精良 混入物なし	高台置付:露胎 ㊦:「松樹文」
42	〃	〃	〃(〃)	蓮華	緑色がかった 灰白	緑色がかった 灰白	型押し 成形	型押し 成形	〃	
43	〃	3層	〃(〃)	合子	灰白	灰白	ロクロN	ロクロN	〃	身受部~天井部:露胎 ㊦:「八手文」 合子蓋
44	〃	一括	〃(色絵)	皿	〃	灰白・緑・赤	〃	〃	〃	高台置付:露胎 ㊦:「渦巻文」「松竹梅文」
45	〃	2層	(青磁染付)	碗蓋	淡緑	緑色がかった 灰白	〃	〃	〃	㊦:口縁:「四方禪文」 肥前系
46	〃	〃	〃(〃)	碗	〃	〃	〃	〃	〃	㊦:口縁:「四方禪文」筒型碗 肥前系
47	〃	〃	〃(〃)	〃	〃	灰白	〃	〃	〃	㊦:見込:蛇ノ目釉剥ぎ,砂目積痕あり 高台置付:露胎,砂目積痕あり
48	〃	3層	陶器	甕	暗灰黄	暗灰黄	〃	〃	㊦:微・少	口唇:釉剥ぎ 口縁:折り返し口縁 焼成やや悪い 口唇:釉剥ぎ 口縁:折り返し口縁 ㊦:体部:胎土目痕あり 焼成やや悪い
49	〃	〃	〃	〃	〃	黄灰	〃	〃	〃	口唇~㊦:口縁:釉剥ぎ 半胴甕
50	〃	2層	〃	〃	オリーブ黒	オリーブ黒	〃	〃	〃	㊦:銀化 苗代川系?
51	〃	〃	〃	〃	〃~灰白	〃~灰白	〃	〃	㊦:微・少	㊦:口唇:釉剥ぎ 焼成やや悪い
52	〃	一括	〃	壺	灰	灰	〃	〃	㊦:微・少	口唇:アルミナ砂状の熔着物あり ㊦:口縁以下:露胎
53	〃	2層	〃	〃?	暗オリーブ褐	暗オリーブ褐	〃	〃	〃	㊦:体部下端以下露胎 ㊦:露胎
54	〃	〃	〃	〃?	暗褐	灰褐	〃	〃	〃	仏花瓶
55	〃	3層	〃	瓶	灰オリーブ	灰オリーブ	〃	〃	〃	㊦:体部下端露胎 ㊦:自然釉状
56	〃	1層	〃	〃?	黒褐	灰	〃	〃	㊦:微・少	㊦:見込:砂目積痕 ㊦:露胎
57	〃	2層	〃	鉢?	灰白	灰白	〃	〃	〃	混入物なし
58	〃	〃	〃(三彩)	〃	淡黄・緑・灰・灰 オリーブ	淡黄	〃	〃	㊦:微・少	高台置付:露胎 龍門司三彩(淡黄色系,茶色系,緑色系)
59	〃	〃	〃	〃	浅黄	浅黄	〃	〃	〃	混入物なし
60	〃	3層	〃	〃	オリーブ黄	オリーブ黄	〃	〃	㊦:微・少	高台部:端部をヘラ状工具で面取り 高台置付以下:露胎 ㊦:見込:長方形の胎土目積痕5ヶ所(本来は6ヶ所か?) 高台部:露胎,端部をヘラ状工具で面取り ㊦:見込:砂目積痕,重ね焼きの際の別個体の熔着痕あり 関西系の技術? 片口鉢
61	A-3	2層	〃	〃	オリーブ黒	褐	〃	〃	㊦:中・少	口唇:底部:釉剥ぎ ㊦:体部:工具による沈線2条
62	一括	3層	〃	播鉢	オリーブ灰	灰褐	〃	〃	〃	㊦:7条1単位の播目,自然釉 口唇:釉剥ぎ
63	〃	〃	〃	〃	オリーブ黒	〃	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ 焼成やや悪い 片口鉢
64	〃	一括	〃	〃	浅黄橙	浅黄橙	N?	N?	〃	混入物なし
65	〃	〃	〃	〃	にぶい黄	にぶい褐	ロクロN	ロクロN	㊦:微・少	㊦:4条1単位の播目 素焼状態 ㊦:15条1単位?の播目 高台置付以下:露胎 ㊦:口縁以下:露胎
66	〃	2層	〃	〃	オリーブ褐	褐灰	〃	〃	〃	㊦:7条1単位の播目 ㊦:体部下端以下:露胎 口唇:釉剥ぎ
67	〃	3層	〃	〃	灰オリーブ	灰オリーブ	〃	〃	〃	㊦:下半:露胎 ㊦:6条1単位の播目
68	〃	〃	〃	碗	にぶい黄褐	灰白	〃	〃	〃	高台部:露胎 ㊦:見込:蛇ノ目釉剥ぎ ㊦:体部上半:白化粧土
69	〃	2層	〃	〃	浅黄	浅黄	〃	〃	㊦:微・少	㊦:体部下端以下:露胎 貫入多い
70	E-2	3層	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい黄褐	〃	〃	㊦:微・少	高台部:露胎,兜巾状 ㊦:見込:蛇ノ目釉剥ぎ
71	一括	一括	〃	〃	浅黄	浅黄	〃	〃	㊦:微・並	高台部以下:露胎 ㊦:見込:蛇ノ目釉剥ぎ ㊦:体部上半:白化粧土 高台内:兜巾状
72	〃	2層	〃	〃	灰白	灰オリーブ	〃	〃	㊦:微・少	高台部以下:露胎
73	〃	一括	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	〃	混入物なし
74	〃	〃	〃	〃	灰	灰	〃	〃	㊦:微・並	㊦:体部下端:露胎 ㊦:体部下端:スス付着 高台置付以下:露胎 ㊦:見込:蛇ノ目釉剥ぎ
75	〃	3層	〃	〃?	にぶい黄	にぶい黄	〃	〃	㊦:微・多	㊦:口縁:白化粧土 高台部:露胎 ㊦:見込:砂(ノミス状?)の目積痕あり
76	〃	〃	〃	火入	灰白	灰	〃	〃	〃	混入物なし
77	〃	一括	〃	皿	にぶい赤褐	灰白	〃	〃	㊦:微・少	㊦:高台内:露胎 ㊦:高台内:白化粧土 ㊦:体部上半:白化粧土 ㊦:見込:砂目積痕 底部:露胎,切り離し後に板状圧痕あり
78	〃	〃	〃	脚台 付皿	暗赤灰	灰赤	〃	〃	〃	混入物なし
79	〃	2層	〃	土瓶 蓋	暗赤~暗赤褐	赤	〃	〃	㊦:微・少	㊦:底部:釉掛け分け ㊦:身受部~天井部:露胎
80	〃	一括	〃	〃	褐	褐灰	〃	〃	㊦:微・少	㊦:身受部~天井部:露胎 ㊦:底部:別個体の熔着痕
81	〃	2層	〃	〃	赤黒	橙	〃	〃	〃	㊦:身受部~天井部:露胎
82	E-2	pit	〃	〃	黒~褐	灰褐	〃	〃	〃	㊦:身受部~天井部:露胎
83	A-3	1層	〃	〃	黄褐	暗灰黄	〃	〃	〃	㊦:身受部~天井部:露胎 ㊦:底部:トビガンナ ㊦:底部~㊦:身受部:白化粧土
84	一括	2層	〃	土瓶	灰オリーブ	灰オリーブ	型作り?	型作り?	㊦:微・少	
85	〃	〃	〃	〃	淡橙	淡赤橙	ロクロN	ロクロN	〃	混入物なし
86	〃	3層	〃	〃	オリーブ褐	オリーブ褐	〃	〃	㊦:微・少	口唇~㊦:口縁:露胎 ㊦:貫入多い 二次的火熱受ける? 白薩摩風
87	〃	2層	〃	〃	オリーブ黒	オリーブ黒	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ ㊦:口縁下:一部施釉
88	〃	〃	〃	〃	灰オリーブ	灰褐	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ ㊦:自然釉状
89	〃	一括	〃	〃	〃	にぶい赤褐	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ
90	〃	〃	〃(三彩)	器種 不明	灰白~藍	灰白~藍~ 淡緑	手捏ね?	手捏ね?	㊦:中・並	三彩(藍色,緑色系) 底部:露胎 信楽焼?(関西系?)
91	B-3	4層	土師器	坏	黒褐~黄褐	灰黄褐	ロクロN	ロクロN	〃	混入物なし
92	D-2	3層	〃	〃	浅黄	にぶい黄橙	〃	〃	㊦:微・少	㊦:口縁:段差あり
93	B-3	〃	〃	小皿	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	〃	底部:ヘラ切り離し後に板状圧痕あり
94	C-2	〃	〃	〃	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	底部:糸切り離し
95	一括	4層	〃	〃	〃	橙	〃	〃	〃	底部:切り離し後に板状圧痕あり
96	C-2	2層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	〃	〃	㊦:微・少	底部:糸切り離し
97	一括	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底部:糸切り離し
98	〃	〃	銅製品	煙管						煙管の雁首部
99	D-3	1層	〃	銭貨						寛永通寶
100	一括	一括	石製品	銀?						石英班岩?
101	C-2	2層	〃	砥石						粘板岩?

表2 YG1・出土遺物観察表②

〈出土遺物観察表凡例〉 ※この凡例は各調査地点の出土遺物観察表にも適用する。

- 1 色調名は『新版標準土色帖-1987年版-』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を参考にした。
- 2 器面調整には次の略号を用い、調整方向はそれぞれ縦位：「縦」、横位：「横」、斜位：「斜」で示した。
N = ナデ M = ミガキ H = ハケ目 K = ケズリ
- 3 胎土に混入している鉱物の種類については、その色調をベースに次の略号を用いた。
⊕：赤色鉱物 ⊖：白色鉱物 ⊙：黒色鉱物 ⊚：透明鉱物 ⊛：黄色鉱物
- 4 混入物の含有率及び粒子の大きさについては、次のように分類した。
(粒子の大きさ)「大」= 2mm以上 「中」= 1mm以上 2mm未満 「微」= 1mm未満
(含有率：約5mm四方)「多」= 7個以上 「並」= 4～6個 「少」= 2～3個 「微」= 1個
- 5 特徴・備考に記したⓐは内器面、ⓑは外器面を示している。

3. 柳川原遺跡・第2次調査

1) A地区 (YG2A)

[第15図～第20図, 表3・4, 図版1]

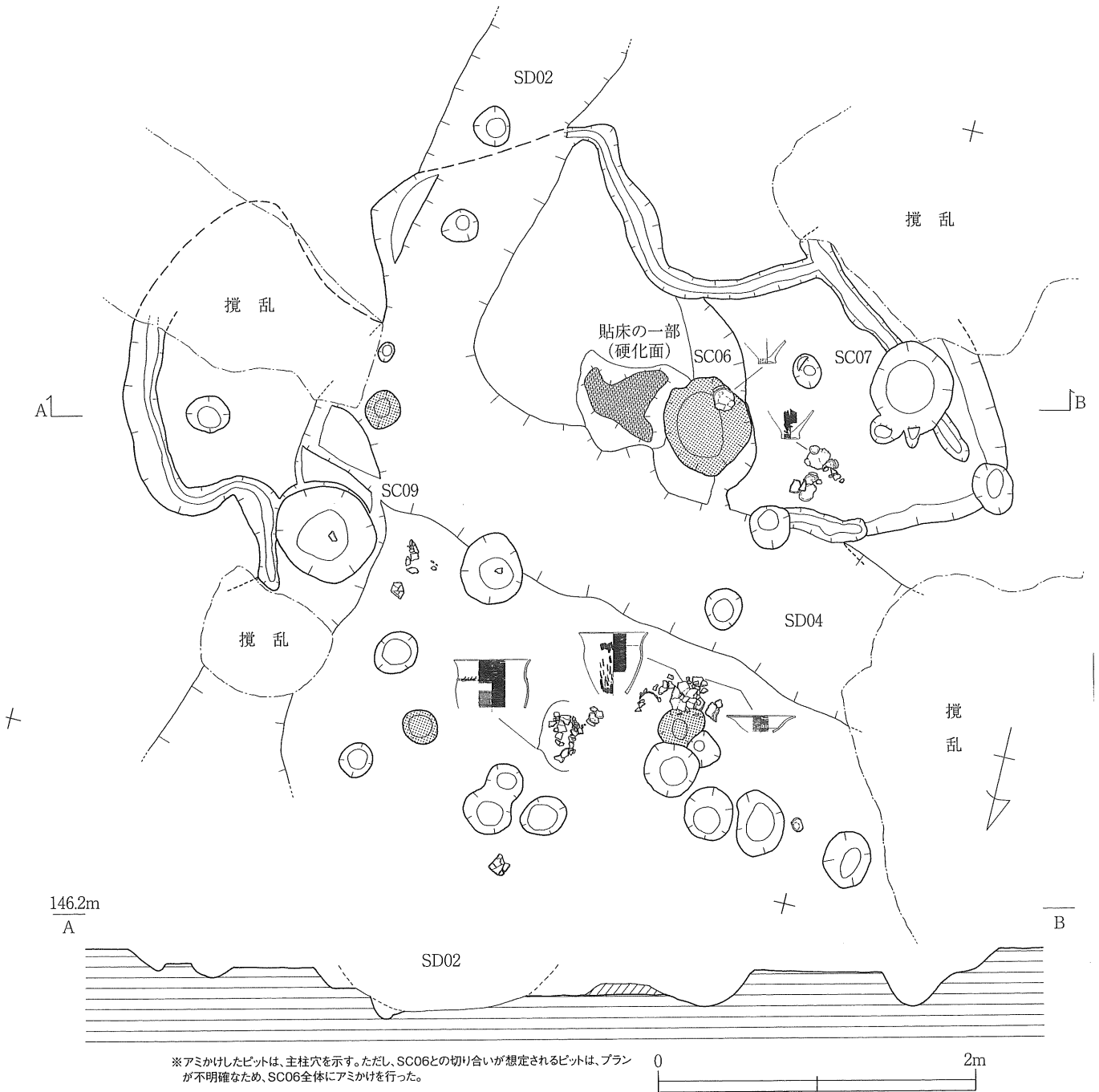
当地区では区画整理後の住宅予定地約207㎡を対象に、平成8年11月5日から同年12月19日にかけて調査を実施している。当区は調査着手直前まで宅地として利用されていたことから、調査区の南西部や北東部を中心に近・現代の著しい攪乱が認められ、遺構の全体像把握を困難にしている。また、柳川原遺跡発掘調査（第1～3次）では唯一内陸の扇状地上に立地する地点であることから、現表土面から遺構検出面となる御池降下軽石層までが比較的浅く、基本層序の第2～5a層の大半が遺構埋土中でブロック程度に残存するか、もしくはすでに造成工事等の影響を受けて消失しているという状況であった。

今回の調査では、古墳時代、中世（主に文明軽石降下期前後；中世後半）、近世～近代にかけての時期の遺構・遺物を確認している。まず、古墳時代の遺構としては、堅穴住居跡1軒と土坑2基、柱穴が検出されている。調査区のほぼ中央、SD02・04の切り合い部付近で検出したSA01は、不定形プランを呈する住居跡である。SC06との兼ね合いで1箇所は不明確であるが、本来は四本主柱であったとみられ、各柱穴間は約1.7～2.0mを計る。SC06際に残存している貼床の痕跡から推定した中央床面のレベルと比較すると、堅穴周壁部が一段高くなったいわゆる「ベッド状遺構」の体裁を整えており、攪乱を受けていない部分では一部不規則に走行するものも含め、周壁に沿って幅約0.1～0.2m、深さ5cm程度の壁帯溝が認められる。また、不明瞭ながら堅穴内部に向けて突出した土壁も確認されていることから、構造的には「花卉状住居」あるいは「日向型間仕切り住居」と称される「堅穴周壁から内部に向かう突出した土壁を持つ方形平面、円形平面を基調とした住居」⁽¹⁾であると考えている。後世の遺構による攪乱及び近現代の削平等により北半部が失われていたため、SA01の全体プランは不明であるが、古墳時代初頭から前期にかけての様相を示す土器が出土していることから、当該期の主流である方形基調平面形を呈し、祝吉遺跡（第2次調査）⁽²⁾で検出された方形プランの半分ないし一辺にベッド状遺構が付随するタイプ（第7・11号住居跡）のような花卉状住居最終段階の形態を想定している。なお、宮崎平野部ではこれらと形態的に類似する住居が熊野原遺跡B地区⁽³⁾等で検出されており、弥生時代後期前葉～末に比定されている。⁽⁴⁾ SC06・09はSA01に共伴あるいは後出する土坑で、埋土上層付近で当該期の土器片が出土している。柱穴はSA01内外を中心に分布しているが、掘立柱建物跡と確認できるものはなかった。

中世の遺構には、溝状遺構3条、土坑5基、柱穴がある。調査区の東側で検出したSD01・05はいずれも北走する溝状遺構で、掘り直しによる3条の溝の切り合いであることから、掘削された順にSD01-1→SD05→SD01-2とした。SD01-1はC-1・C-2グリッドの境界付近で輪郭が不明瞭になる溝で、確認できた幅員は約0.6～1.0m、現存する検出面からの深さは約0.1～0.15mを計る。断面形は「U」字形を呈すとみられ、床面から約0.5m上部まで硬化面が断続的に形成されていることから、本来の掘り込みもこの程度の深さを有していたと考えられる。この溝と並走し、途中で消失するSD05は、幅員約1.0m、現存する検出面からの深さは約5～10cmを計る。床面は部分的に硬化しており、溝の輪郭が消失した北側部分（SC11周辺）でも床面とほぼ同じレベルに残存する硬化面が確認されていることから、調査区外まで北進していた可能性がある。南端部において明確な掘り

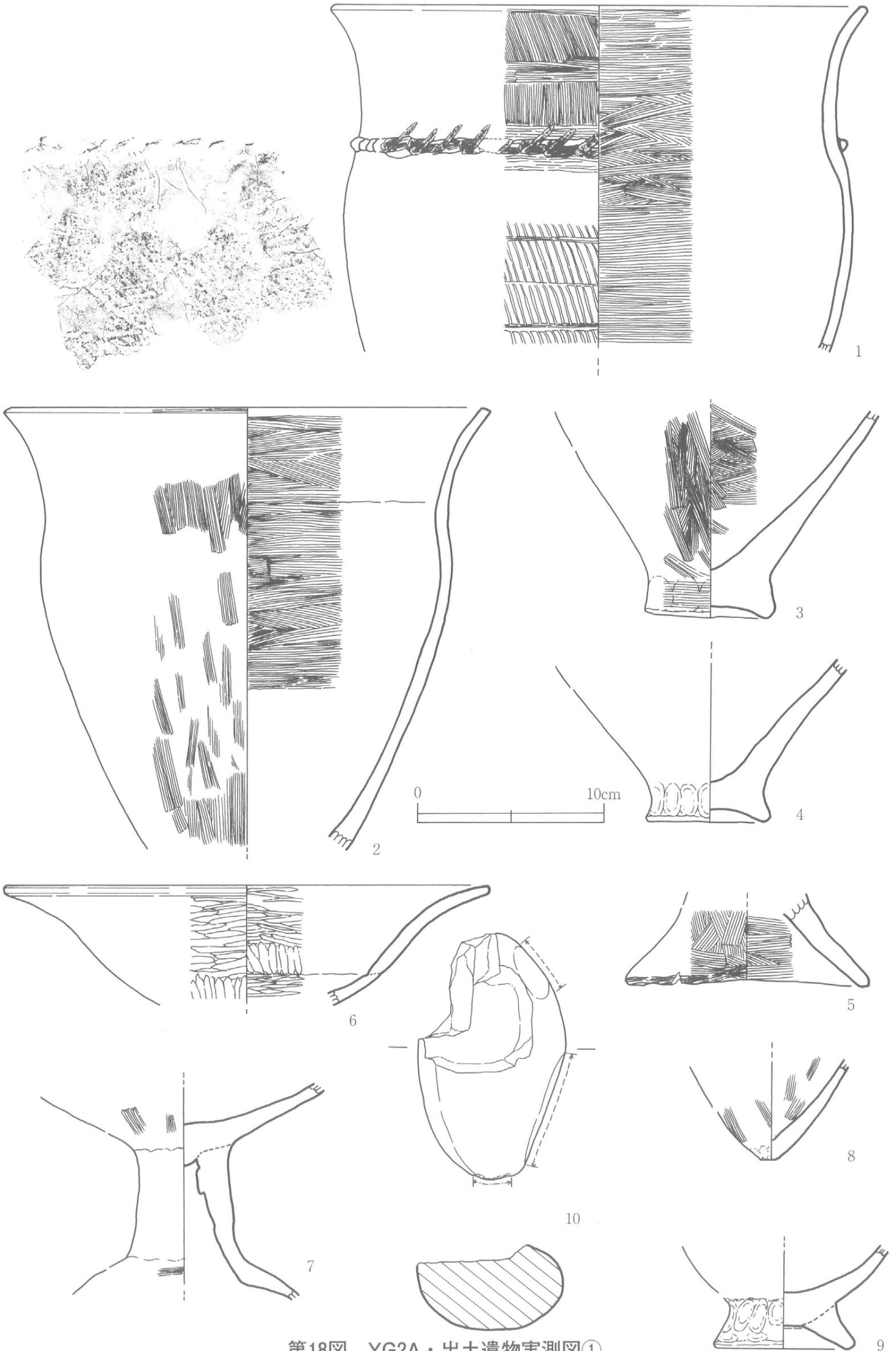


第15図 柳川原遺跡・第2次調査A地区 (YG2A) 遺構分布図

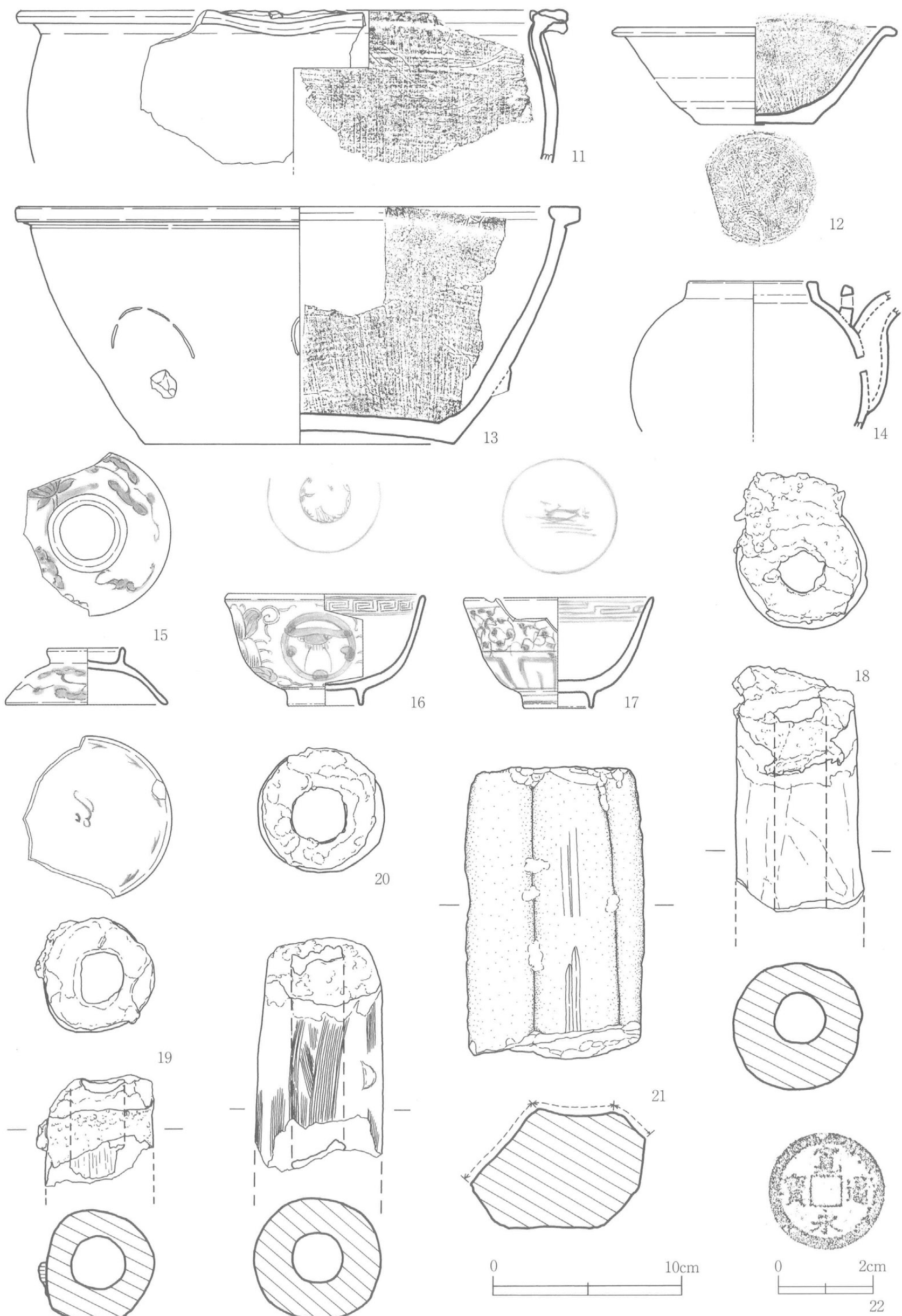


第17図 YG2A・1号竪穴住居跡 (SA01) 実測図

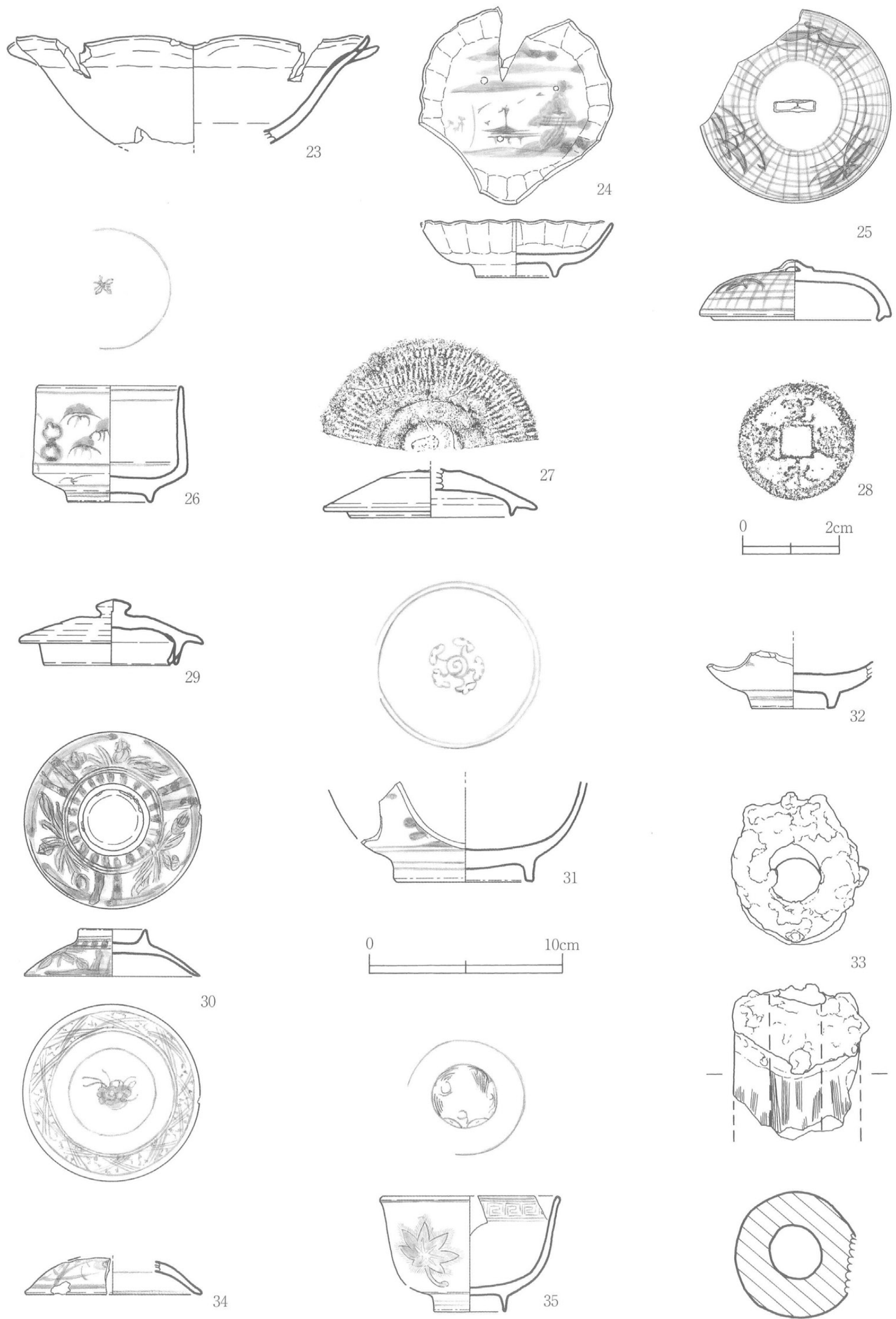
込みは確認できないものの、SD01-1の埋没過程で東側法面付近に形成された硬化面の一つとレベル的に合致することから、これを切って後出する溝であると考えたい。SD01-2は幅員約2.1~2.8m、残存する検出面からの深さは約0.4~0.6mを計る断面「逆台形」状の溝で、北走して調査区北東端付近で西折し、現在の市道とほぼ同じ軌跡を辿ると考えている。床面レベルと比較すると、南から北に向けてわずかに傾斜しながら走行している。SD01-1と同様に床面から埋土下層にかけて硬化面が形成されているが、埋土中位に堆積した文明降下軽石層より上位にこれは認められない。ただし、面的には把握していないものの、調査区南端の断面観察ではこの溝を切る近世以降の溝状遺構らしい痕跡が認められることから、文明降下軽石層上位にも硬化面が形成されていた可能性も否定できない。なお、これら3条の溝の埋土中には水成作用による砂層等の堆積が認められないことから、水路的役割を前提とした溝よりも、当地域で普遍的にみられる道路状遺構に伴う掘り込み、あるいは道路状遺構を伴う区割溝の可能性が高いと考えられる。ちなみに、幕末段階の町並を描いた絵図⁽⁵⁾には、当調査区のすぐ東側に「天神馬場」と接続する小路が明記されている。SD01-2における文明降下軽石の堆積状況から今回検出した溝状遺構は中世後半(15C代)頃に比定されるため、これらを同一視することはできな



第18图 YG2A · 出土遺物実測図①



第19图 YG2A · 出土遺物実測図②



第20図 YG2A・出土遺物実測図③

いが、近世期の小路と類似した方向性を示す道路状遺構が中世後半段階に構築されていた点は町割小路の出現期を考える上で興味深い資料であるといえよう。SC01・02・10は御池降下軽石をまばらに含む黒色粘質シルト、SC07・12は御池降下軽石をまんべんなく含む黒色粘質シルト、SC11は御池降下軽石と文明降下軽石をまんべんなく含む黒褐色粘質シルトを埋土とする土坑である。共伴遺物はないが、当該期の遺構と考えられる。柱穴は溝の床面を含め、調査区北東部周辺で散見される。

近世の遺構としては、溝状遺構3条、土坑5基、柱穴群が挙げられる。まず、当該期の溝状遺構については、埋土の状況や共伴遺物等からSD04→SD03→SD02の順に構築されたと考えている。SD02は調査区北西部から東進し、B-1・B-2グリッドの境界付近で「L」字状に南折する溝である。断面形は「U」字状ないし「逆台形」状を呈し、幅員約0.6～1.0m、深さ約0.4～0.55mを計る。その規模や形状は、ほぼ同時期の集落跡が確認されている久玉遺跡⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾において検出された屋敷割（区割）溝と類似しており、溝内に廃棄された状態で多数の遺物が出土している点でも共通性が認められる。そのため、今回の調査ではSD02に囲まれたいわゆる内区部分での建物跡等の確認はできなかったが、この溝が先に触れた近世後期の小路に面して配置された屋敷地の区割溝であった可能性も想定でき、今後の周辺部における調査の成果に期待したいと思う。SD03はSD02とほぼ平行に東進し、SD02との切り合い部で閉じる溝である。断面「逆台形」状で、幅員約0.8～1.0m、深さは約0.2～0.5mを計る。SD04も東西方向に走行する溝で、西端は調査区外に延び、東端はSD02に切られている。断面形は「U」字状を呈し、幅員約0.6～1.0m、検出面からの深さは約0.3mを計る。なお、埋土中位に認められる御池降下軽石ブロックは、その堆積状況から人為的造作の可能性がある。土坑（SC03～05・08）については、主にSD02の南側に分布する傾向にあり、遺物の出土はないもののSD02とほぼ同じ埋土であることから当該期の遺構とした。柱穴もSD02の内区部分を中心に散在するが、攪乱の影響を受けているため掘立柱建物跡は確認できなかった。

出土遺物については、包含層の残存域が少なかったことから、遺構（竪穴住居跡や溝状遺構）に共伴するものが主勢を占めている。これらは概ね古墳時代初頭～前期頃と近世の2時期に大別されるが、出土数の大半を近世以降の遺物が占めるという点では、他の調査区と同様の傾向を示しているといえよう。1～10はSA01内とその周辺包含層から出土した遺物である。1は胴部外面に斜位のタタキを有する甕で、間延びした頸部から口縁部が短く外反する。胴部の最大径は上位に位置するが膨らみは小さい。胴部と頸部の境には横位のハケ目部が施された突帯が巡り、布目痕の明瞭な刻目が施されている。市内においては、山ノ田第1遺跡⁽⁹⁾において類似した形態の土器が認められるほか、学頭遺跡⁽¹⁰⁾や熊野原遺跡C地区⁽¹¹⁾でも突帯は伴わないものの同様のタタキ痕が胴部に認められる土器が検出されている。2は口縁部が緩やかに外反する甕で、口唇部には横ナゲによる凹線状のくぼみが認められる。外面頸部の稜は鈍化しており、胴部は最上位をピークとする砲弾状の器形を呈しながら底部に向けて収束する。3～5はいずれも甕の底部で、3・4の外面には指押えの痕跡が残る。2点ともやや上げ底気味の形状を示しているが、4はつまみ出しによって横に張り出した印象を受ける。5はいわゆる成川式系統の甕の脚台部の可能性が指摘できる。高坏には、口縁部が大きく外反し、受部と口縁部の境は不明瞭で、受部がやや小さくなった坏部（6）と、脚柱部はわずかに内湾し、脚裾部が椀状を呈すとみられる脚部（7）がある。同一個体ではないが、ともに石川悦雄氏分類⁽¹²⁾のBⅠ類ないしBⅡ類に該当すると考えている。8は砲弾状に収束し、底部が尖底に近い平底となる小型鉢、9は脚台部と体部の接合部に明瞭な指頭痕が残る脚台付鉢である。なお、これらに共伴する石器には、側縁部に研磨痕、先端部に敲打痕が認められる磨石（10）がある。

近世の遺物も遺構内出土が主であることから、各遺構ごとにその概要について触れていきたいと思う。SD02内出土遺物（11～23）は陶磁器類が主であるが、鍛冶関連遺物とみられる鞆の羽口が複数出土している点は特筆される。陶器（11～14・23）はいずれも薩摩系陶器とみられ、播鉢、皿、土瓶等の器種がある。11～13は播鉢で、大型の2点は折り返しによる断面「T」字形の口縁形態を呈している。播目はいずれも7条1単位で、11は口唇部に、13は外面体部に胎土目積の痕跡が認められる。12は口縁を「L」字状に外反させる小型の播鉢で、目の細かい播目が6条1単位で施されている。底部の糸切り離し痕から、ロクロ操作は右回転と考えられる。SD03内出土遺物との接合資料である23は稜花形の皿で、内面見込に三足ハマの痕跡が認められる。磁器は15・16が肥前系、17は薩摩系の可能性のある染付で、いずれも19C前半頃に比定している。16・17は内面口縁に雷文の巡る端反碗で、見込には環状松竹梅文や岩に波文が入る。15はこのタイプの碗に伴う蓋で、外

面には蝙蝠文がみられる。18～20は轆の羽口で、平均して直径6～7cm、送風孔径3.5cmを計る。3点とも炉に接した側の先端部と考えられ、熔着物が付着しているほか、外面の一部は被熱によって変色・変質している。熔着物中に緑青状の混入物がないことから、主に鉄精製に用いられたものと考えられる。21は硬質砂岩製の砥石で、三面に研磨痕や金属製品によるとみられる擦過痕が確認できる。なお、こうした鍛冶関連遺物がまとまって出土するのは当地域でも稀有な例であり、周辺に関連施設が所在していた可能性も示唆できよう。SD03内からの出土遺物(23～25)は、SD02に比べるとかなり少ない。見込に東屋山水文が描かれ、重ね焼きの際の三足ハマの痕跡が残る24は輪花形の皿である。25は鉢の蓋で、外面には虫篋文がみられる。前者は19C中頃の薩摩系、後者は19C初頭頃の肥前系染付と考えている。SD04内出土の26は見込に崩れた手描き五弁花文がみられる筒形碗で、全体的に青みを帯びている。外面体部には雪持笹文、体部屈曲部下位には折松葉文が描かれており、18C末～19C初頭頃の肥前系磁器と思われる。27は薩摩系陶器の土瓶蓋である。外面から身受部にかけて白化粧土が施されており、底部にはトビガンナ装飾がみとめられる。SD02内側(南側)に散在する柱穴から出土した28は、いわゆる「ス」貝寶・「コ」通頭の古寛永通寶である。29～35は基本的に1層から出土した遺物である。29は薩摩系陶器の土瓶蓋で、外面天井部には重ね焼きの際に付着したと思われる別個体の熔着痕(高台ないし身受部とみられる円形の痕跡)が認められる。30・34は端反碗に伴う蓋で、19C前半頃に比定している。30は外面に区画花文、内面に四方襷文が描かれ、つまみ部縁にはアルミナ状の熔着物が付着している。31は見込に崩れた手描き五弁花文がみられる鉢である。32は見込が蛇ノ目釉剥ぎで砂目積状の痕跡が認められる碗、35は外面に楓文、口縁内面に雷文、見込に環状松竹梅文が施された19C前半頃の端反碗である。33は轆の羽口で、SD02内出土のものと同様に炉に接した側の先端部である。

〈註〉

- (1) 石川悦雄 1991 「宮崎における弥生時代竪穴式住居の展開」『宮崎県史研究』第5号 宮崎県
- (2) 面高哲郎 1982 『祝吉遺跡』都城市文化財調査報告書第2集 都城市教育委員会
- (3) 菅付和樹 1988 「熊野原遺跡A・B地区」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集 宮崎県教育委員会
- (4) 長津宗重 1985 「『日向型間仕切り住居』研究序説」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会
- (5) 横山哲英編 1997 『都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書』都城市文化財調査報告書第41集 都城市教育委員会
- (6) 矢部喜多夫 1993 「久玉遺跡第5次発掘調査」『久玉遺跡第5次発掘調査・油田遺跡・正坂原遺跡』都城市文化財調査報告書第25集 都城市教育委員会
- (7) 横山哲英・米澤英昭 1995 『久玉遺跡－第6次調査－』都城市文化財調査報告書第32集 都城市教育委員会
- (8) 横山哲英 1997 『久玉遺跡－第7・8次調査概要報告書－』都城市文化財調査報告書第39集 都城市教育委員会
- (9) 日高広人編 1996 『山ノ田第1遺跡』宮崎県教育委員会
- (10) 北郷泰道・石川悦雄・菅付和樹・長友郁子・松林豊樹 1995 「学頭遺跡」『学頭遺跡・八兒遺跡』宮崎県教育委員会
- (11) 面高哲郎 1985 「熊野原遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集 宮崎県教育委員会
- (12) 石川悦雄 1988 「弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器編年にむけて－予察1高坏－」『宮崎県総合博物館研究紀要』第15輯 宮崎県総合博物館

挿図番号	出土地区	遺構層位	種別	器種	色調		調整		胎土	特徴・備考
					外	内	外	内		
1	B-2	SA01上・中層	土師質土器	甕	にぶい橙～黒褐	にぶい黄橙～褐灰	口縁・縦H, 胴部・縦H 2段	横H	⑤⑥⑦中・多	刻目突帯部・横H調整後に布痕の明瞭な刻目 ⑥胴部:斜方向のタキあり ⑦スス付着
2	〃	〃中・下層	〃	〃	浅黄橙～黄褐	にぶい黄橙～黒	横N→縦H	横・斜位のH	〃	⑧黒変
3	〃	〃中層	〃	〃	にぶい黄橙	にぶい黄橙	胴部・縦H, 底部・横H	〃	⑤⑥⑦中・並	⑧胴部:スス付着 ⑨底部:指頭痕あり
4	〃	〃下層	〃	〃	にぶい黄橙～浅黄橙	〃	胴部:N	N	⑤⑥⑦中・多	⑧底部:つまみ出し状,指頭痕あり
5	C-2	5b層	〃	〃?	明黄褐	にぶい橙	上部・縦H, 下部・横H	横H	⑤⑥⑦中・少	甕の脚台部か? 成川式系統?
6	B-1 B-2	SA01中層 5a層	〃	高坏	淡黄	淡黄～黒	口縁～坏部 上半・横M, 下半・縦M	口縁上半・横M, 口縁下半・縦M, 坏部・横M	⑤⑥⑦微・多	⑧口縁:黒変

表3 YG2A・出土遺物観察表①

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
7	B-2	SA01 上・ 中層	土師質土器	甕	灰黄	灰黄	N(坏部の一 部に縦H)	N	㊸㊹微・多	
8	〃	5a層	〃	鉢	橙	橙	縦H→N	縦H→N	㊸微・少	
9	一括	3層	〃	脚台 付鉢	にぶい橙	にぶい黄橙	N	N	㊸中・多	㊸見込:スス付着,指頭痕あり ㊸脚部:指頭痕あり
10	B-2	SA01 中層	石器	磨石						先端部:敲打痕 側面部:研磨痕 硬質砂岩
11	B-1	SD02 下層	陶器	播鉢	暗褐	灰褐	ロクロN	ロクロN	㊸㊹中・多	㊸7条1単位の播目 口唇:釉剥ぎ,7mm角の胎土目 積痕(胎土目のある部位は口縁が変形・歪曲)
12	一括	〃 一括	〃	〃	オリーブ褐	オリーブ褐	〃	〃	㊸微・少	㊸6条1単位の播目 底部糸切り離し ㊸口縁~㊸体部上半:施釉
13	B-1	〃 下層	〃	〃	オリーブ黒	にぶい赤褐	〃	〃	㊸㊹微・並	底部・口唇:露胎 ㊸7条1単位の播目 ㊸体部中 央:別個体の高台部の熔着痕,胎土目積痕
14	一括	〃 一括	〃	土瓶	灰赤	暗赤灰	〃	〃	〃	口唇~㊸口縁露胎
15	〃	〃	磁器(染付)	碗蓋	灰白	灰白	〃	〃	精良 混入物なし	㊸:「唐草文」「蝙蝠文」 つまみ縁部:露胎
16	〃	〃	〃(〃)	碗	〃	〃	〃	〃	〃	高台壘付:露胎 ㊸見込:「環状松竹梅文」 ㊸口縁:「雷文」 薩摩系?
17	〃	〃	〃(〃)	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高台壘付:露胎 ㊸口縁:「雷文」 ㊸:「唐草文」 ㊸見込:「岩に波文?」 肥前系か?
18	B-1	〃 下層	土製品	鞆・ 羽口	にぶい赤褐~ にぶい黄橙	にぶい橙	N	軸木の 木目残る	㊸㊹中・並	先端部:スラグが垂れ下がった状態 先端部から2.5cmまでスラグ,3.5cmまで熱変性
19	〃	〃	〃	〃	にぶい橙 ~黒	〃	〃?	〃	㊸㊹微・並	先端部から3.5cmまでスラグ,4.5cmまで熱変性
20	〃	〃	〃	〃	黒~ にぶい褐	灰褐	H→N	〃	㊸㊹微・少	先端部から1.0cmまでスラグ,2.5cmまで熱変性
21	一括	〃 一括	石器	砥石						三面に研磨痕あり 部分的に擦痕あり 硬質砂岩
22	A-1	〃 下層	銅製品	銭貨						「コ」通頭 「ハ」貝寶 新寛永通寶
23	一括	SD02 SD03	陶器	皿	オリーブ灰	オリーブ灰	ロクロN	ロクロN	㊸微・微	稜花皿 ㊸見込:三足ハマの熔着痕あり
24	〃	SD03 一括	磁器(染付)	〃	灰白	灰白	〃→ 型押成形	〃→ 型押成形	混入物なし	菊花皿 高台壘付:露胎 ㊸見込:「東屋山水文」, 三足ハマの熔着痕あり 薩摩系?
25	〃	〃	〃(〃)	鉢蓋	〃	〃	ロクロN	ロクロN	〃	㊸:「虫篋文」
26	B-2	SD04 下層	〃(〃)	碗	青みを帯びた 灰白	青みを帯びた 灰白	〃	〃	〃	筒形碗 高台壘付:露胎 ㊸見込:「五弁花文」の 崩れ? ㊸体部:「雪持笹文」 ㊸屈曲部下位:「折 松葉文」 肥前系?
27	〃	〃	陶器	土瓶・ 蓋	暗オリーブ	浅黄~ にぶい赤褐	〃	〃	㊸㊹微・並	㊸:トビガンナ ㊸底部~㊸身受部:白化粘土
28	A-2	pit	銅製品	銭貨						「コ」通頭 「ス」貝寶 古寛永通寶
29	B-2	1層	陶器	土瓶・ 蓋	灰赤	にぶい赤褐	〃	〃	㊸微・多	㊸:別個体の熔着痕あり ㊸天井部:露胎
30	一括	〃	磁器(染付)	碗蓋	灰	灰	〃	〃	混入物なし	㊸:「区画花文」 ㊸口縁:「四方禰文」 つまみ部縁:露胎,アルミナ砂状熔着物あり
31	〃	〃	〃(〃)	鉢	青みを帯びた 灰白	青みを帯びた 灰白	〃	〃	〃	高台壘付:露胎 ㊸見込:「手描五弁花文」 肥前系?
32	B-2	〃	〃(〃)	碗	灰白	灰白	〃	〃	〃	㊸見込:蛇ノ目釉剥ぎ 高台壘付:露胎,砂目積状の熔着物あり
33	B-1	〃	土製品	鞆・ 羽口	黒~ にぶい橙	にぶい橙	H→N	軸木の 木目残る	㊸㊹微・少	先端部:スラグが垂れ下がった状態 先端部から2.5cmまでスラグ,3.5cmまで熱変性
34	一括	一括	磁器(染付)	碗蓋	灰白	灰白	ロクロN	ロクロN	混入物なし	㊸:「草文」
35	〃	3層	〃(〃)	碗	〃	〃	〃	〃	〃	高台壘付:露胎 ㊸口縁:「雷文」 ㊸見込:「環状松竹梅文」 肥前系?

表4 YG2A・出土遺物観察表②

2) B地区 (YG2B)

[第21図~第26図, 表5・6, 図版1]

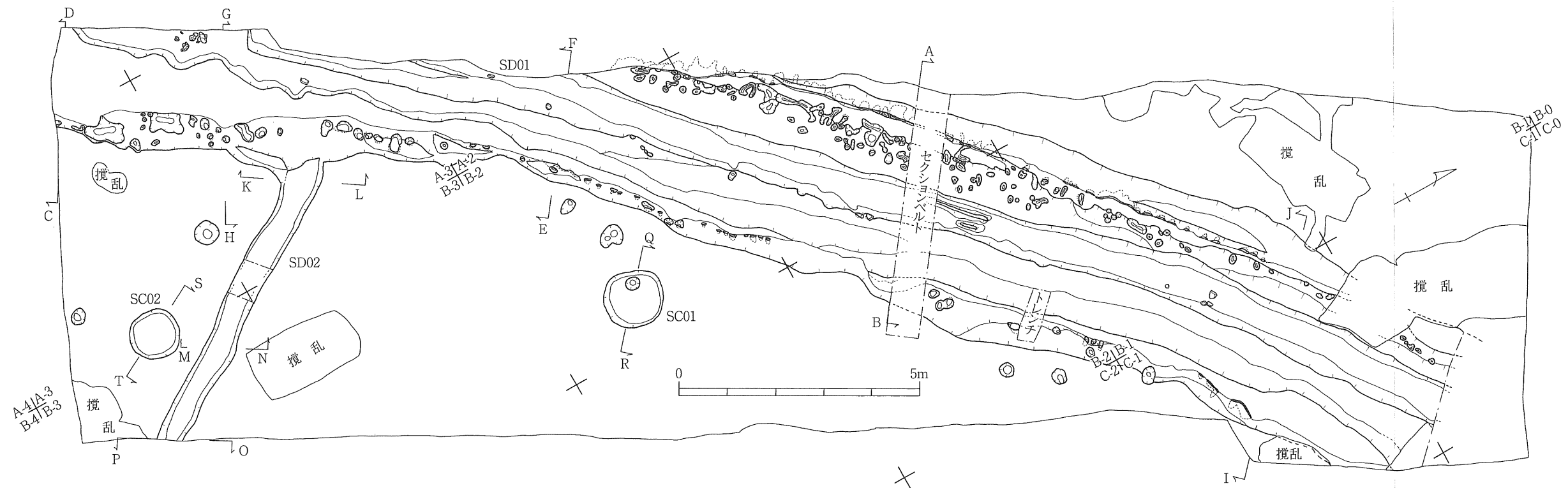
当地区では市道「東中町通線」の拡幅予定地約226㎡を対象に、平成8年12月9日から平成9年2月7日にかけて調査を実施している。当区は一部アスファルト舗装の駐車場として利用されていたため、以前解体された店舗の廃材が埋められていた調査区北側を除けば、遺構の残存状態は比較的良好であった。また、局部的に攪乱や盛土の痕跡が認められたものの、当調査区では柳川原遺跡の基本層序をほぼすべて確認することができた。地形的には、遺構を検出した御池降下軽石層上面及びアカホヤ火山灰層上面で観察する限りほぼ平坦な地形を呈しているが、アカホヤ火山灰層下面以下ではわずかに起伏が認められる。

今回の調査では、中世及び近世の遺構・遺物を確認している。調査区の南西隅から北東方向へと延びるSD01は、中世から近世にかけてのかなり長期間に亘り使用されたとみられる溝状遺構である。面的には把握していないものの、溝に伴う道路状遺構の走行方向や断面観察により、少なくとも5条の溝の輪郭を確認することができ、文明軽石降下期を挟んだ中世後半~近世の溝(SD01-1~3)と、明確な時期比定はできないがそ

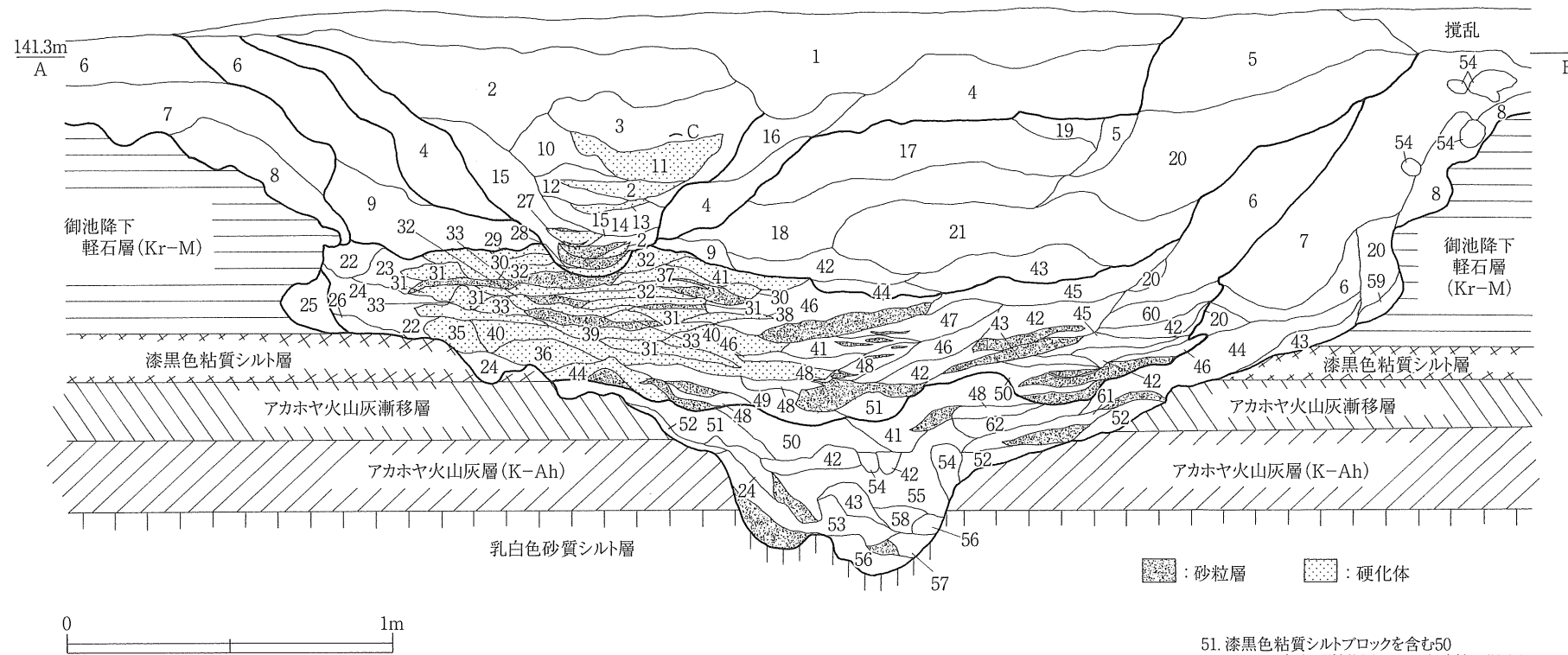
れ以前の段階に位置付けられる溝（SD01-4・5）に分けられる。SD01-1は断面形が鈍い「V」字形ないし「U」字形を呈し、確認できた幅員は約1.2～1.5m、深さ約0.55～0.8mを計る。調査区南端壁では確認できないことから、南西方向に延びて調査区外に続くと考えられる。埋土の下層を中心に、流水作用に伴うとみられる小礫を含んだ砂粒ブロックが散見されるほか、中層から上層にかけて複数の硬化面が認められる。SD01-2は「逆台形」状の断面形を示す溝で、全体的に緩やかな東側法面では部分的にテラスが形成されている。推定幅員は約2.8m、深さ約0.6～0.7mを計り、黒色シルトと文明降下軽石の混土層を切る。一部床面の硬化が認められるものの、基本的には砂層ブロックや硬化面を伴わない溝である。SD01-3は断面形が「逆台形」状ないし緩やかな「U」字形を呈し、確認できた幅員は約3.8m、深さは約0.8～0.9mを計る。埋土の最上層には、プライマリーな状態に近い文明降下軽石層が認められる。なお、この溝にも砂粒ブロックや硬化面は伴わない。SD01-4も「逆台形」状ないし幅の広い「U」字形の断面形を示す溝で、中央部付近には床面から十数面に亘って硬化面が形成されており、各硬化面の間には小礫を含んだ砂粒ブロックが認められる。全幅員が確認できる部分で観察すると、西側法面基部付近では硬化面が途切れて小溝状の落ち込みとなっていることから、硬化面（道路状遺構）に伴う側溝が備わっていた可能性を示唆できる。全幅遺存箇所での幅員は約3.8m、深さ約1.1～1.5mを計る。SD01-5も基本的に断面「逆台形」状の溝であると思われるが、調査区南西部（セクションポイントG-Fライン付近）まで床面中央に溝状の窪みを伴っていることから、今回検出した範囲では「逆凸」字形の断面形を示している。確認できた幅員は約3.7～4.0m、深さは約1.4～1.6mを計る。この溝は床面の一部が第9層まで達しているが、このうち第7層から第8a層にかけての法面部には小ピット状のポットホールが複数残存しており、その中の一部では砂粒ブロックの堆積が認められる。また、崩落しやすい第6b層下部は、法面自体がオーバーハングして井戸の壁面等でみられるような空洞状の断面形を呈している。こうしたことから、SD01-5では恒常的な流水があったと推測でき、床面レベルが調査区北側を西流している年見川方向へと緩やかに傾斜している点とも合わせて、この溝が年見川への排水路あるいは導水路的な役割を果たしていた可能性を考えている。このようにSD01については、当初水路的役割を目的に構築されたとみられるSD01-5が、SD01-4の段階で通路（堀底道）へと機能が転化し、硬化面や流水砂層を伴わないことから区割溝の役割も想定される文明降下前後（SD01-2・3）の時期を経て、最終段階の近世期には再び通路（SD01-1）として機能し始める、という変遷過程を追うことができよう。なお、幕末期の絵図等で確認する限りこの遺構の記載例は見受けられないことから、近世段階の遺構については、いわゆる小路といわれる主要道に比べかなり小規模なものであったと推測される。

SD02は調査区南東部から北西方向に延び、SD01に切られる溝である。出土遺物がないため厳密な時期比定はできないが、この溝を切る形で最上層部に堆積した文明降下軽石層が認められることから、SD01-3が構築される際にはすでに埋没していたと思われる。また、SC01・02についても、共伴遺物や文明降下軽石の堆積が認められないことから、埋土の状況よりSD02とほぼ同時期に比定している。

今回の調査で出土した遺物は、すべてSD01に共伴しているが、その中でもSD01-1に伴う遺物が主勢を占める傾向にある。各溝の面的な把握ができなかったことから、観察表では相対的な層序で位置を表記しているが、概ね最上層・上層はSD01-1、中層はSD01-2、床面はSD01-5に該当する。陶器（1～15）はその大部分が薩摩系の産品である。1・2は碗で、ともに内面見込に蛇ノ目釉剥ぎが施されており、2の釉剥ぎ部にはパミス状の目積痕が認められる。口縁部が玉縁状の3は捏ね鉢と考えられる。軟陶で緑釉の施された4は壺形を呈すと考えられ、肩部には陰刻がみられる。釉薬やその意匠から薩摩系以外の産品と思われる。5・6は茶入れと考えられる小壺である。土瓶（7～9）のうち、9の外面には鮫肌釉が施されている。10は小ぶりの羽釜で、鋳部以下にはススが固着している。11～15は播鉢で、器形の大小を問わず口縁形態は「L」字形に折って外反させるタイプである。口唇部はいずれも重ね焼きを前提とした釉剥ぎが施されているが、目積痕は認められない。播目は1単位5～9条とバリエーションに富んでいる。また、11の口縁部には銀化作用の痕跡が認められ、13の口縁の一部は注口状となっている。磁器類はかなり少量であったが、肥前系のほか他の産地の磁器もみられる。口縁がやや端反となる16は肥前系の猪口、内面口縁部に青海波文が施された17は薩摩系磁器の可能性があり、いずれも19C前半～幕末期頃を考えている。19は体部下端から高台部が露胎の白磁皿である。SD01・02の切合部付近で出土した20は中国南部系の青磁と考えているが、胎土が粗いことから美濃系陶器の可能性もある。その他の遺物としては、窯道具とみられる22・23の出土が特筆される。素焼の陶質製品である23は三足ハマとみられ、円板部上面には高台の熔着痕が認められる。窯道具について当地域周辺で比較できる資料として

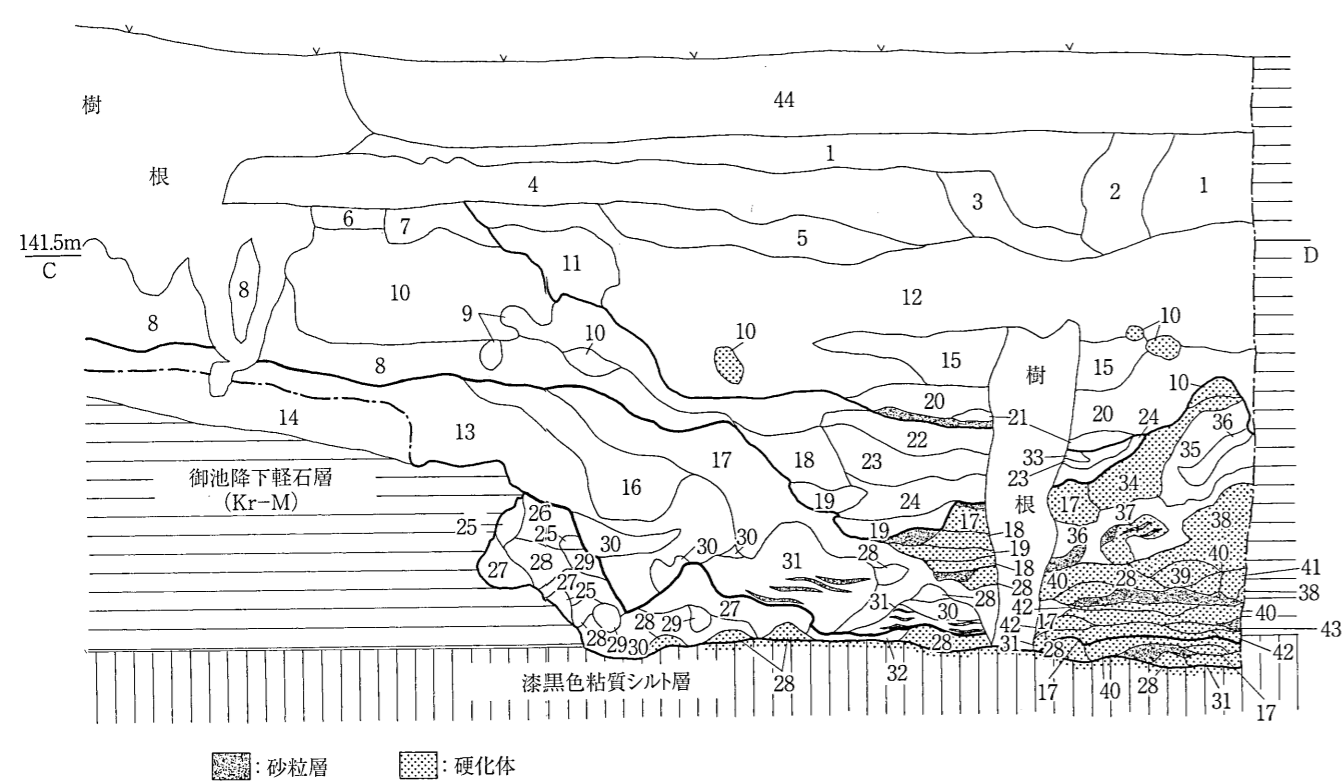


第21図 柳川原遺跡・第2次調査B地区 (YG2B) 遺構分布図

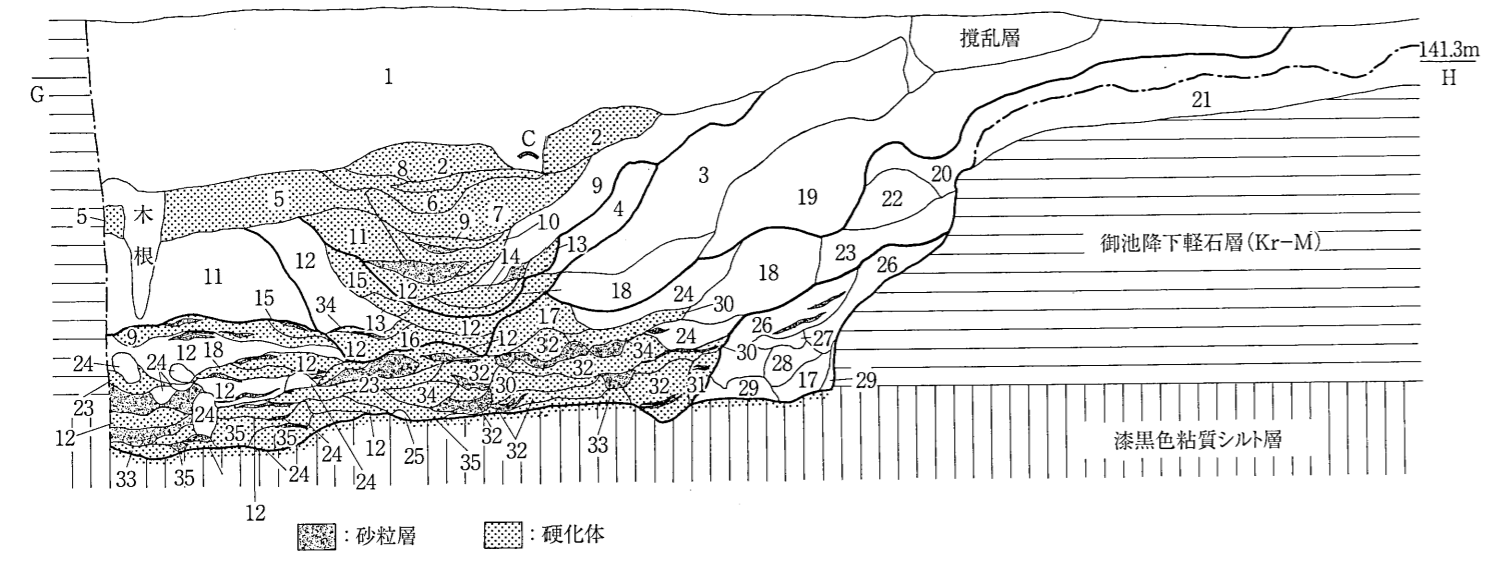


1. 文明降下軽石粒をまんべんなく含む灰黒色シルト層
2. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
3. 文明降下軽石粒をわずかに含む灰黒色シルト層
4. 文明降下軽石粒を多量に含む黒色シルト層
5. 文明降下軽石層
6. 御池降下軽石粒をわずかに含む弱粘質黒色シルト層
7. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒褐色シルト層
8. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層 (御池降下軽石層の漸移層)
9. 御池降下軽石ブロックをまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
10. 文明降下軽石粒をごくわずかに含む灰黒色シルト層
11. 御池降下軽石、文明降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
12. 文明降下軽石粒をわずかに含む黒色シルト層
13. 砂粒を多量に含む2
14. 砂粒をまばらに含む12
15. 御池降下軽石、文明降下軽石粒をまばらに含む灰褐色シルト層
16. 文明降下軽石粒と黒色シルトの混土層
17. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒褐色シルト層
18. 御池降下軽石粒をわずかに含む弱粘質黒褐色シルト層
19. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をわずかに含む弱粘質黒褐色シルト層
20. 弱粘質黒色シルト層
21. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質灰褐色シルト層
22. 弱粘質黒色シルト、アカホヤ火山灰漸移層ブロック、御池降下軽石粒の混土層
23. アカホヤ火山灰漸移層ブロック、御池降下軽石粒の混土層
24. アカホヤ火山灰漸移層ブロック
25. 御池降下軽石粒をまばらに含む24
26. 弱粘質黒色シルト、アカホヤ火山灰漸移層ブロックの混土層
27. 砂粒、文明降下軽石粒をわずかに含む黒色シルト層
28. 御池降下軽石粒を含む2
29. 御池降下軽石ブロックを含む9
30. 御池降下軽石ブロックと漆黒色粘質シルトブロックの混土層
31. 23と30の混土層
32. 砂粒を含む30
33. 漆黒色粘質シルトブロック、御池降下軽石粒をわずかに含む24
34. 砂粒を含む24
35. 御池降下軽石粒をまばらに含む34
36. アカホヤ火山灰ブロック、御池降下軽石粒、アカホヤ火山灰漸移層ブロックの混土層
37. 砂粒を多量に含む32
38. 御池降下軽石粒、砂粒をまばらに含む弱粘質灰褐色シルト層
39. 漆黒色粘質シルトブロックを含む38
40. アカホヤ火山灰ブロックを含む36
41. 御池降下軽石粒、砂粒、漆黒色粘質シルトブロック、アカホヤ火山灰漸移層ブロック、弱粘質灰褐色シルトの混土層
42. 弱粘質灰褐色シルト層
43. 御池降下軽石粒を多量に含む42
44. 御池降下軽石粒をまばらに含む42
45. 御池降下軽石粒をごくわずかに含む42
46. 砂粒を含む42
47. 砂粒、御池降下軽石粒をごくわずかに含む42
48. 漆黒色粘質シルトブロックを含む46
49. 御池降下軽石粒を多量に含む48
50. 砂粒を多量に含む43
51. 漆黒色粘質シルトブロックを含む50
52. アカホヤ火山灰漸移層ブロックと砂粒の混土層
53. 漆黒色粘質シルトブロック
54. 御池降下軽石ブロック
55. 御池降下軽石ブロックをまんべんなく含む42
56. 砂礫を含む42
57. 砂粒を多量に含む53
58. 漆黒色粘質シルトブロックを含む55
59. 赤化した御池降下軽石粒を多量に含む42
60. やや赤化した御池降下軽石粒をまんべんなく含む20
61. 砂粒を多量に含む55
62. 砂粒を多量に含む43

第22図 YG2B・1号溝 (SD01) 土層断面図①



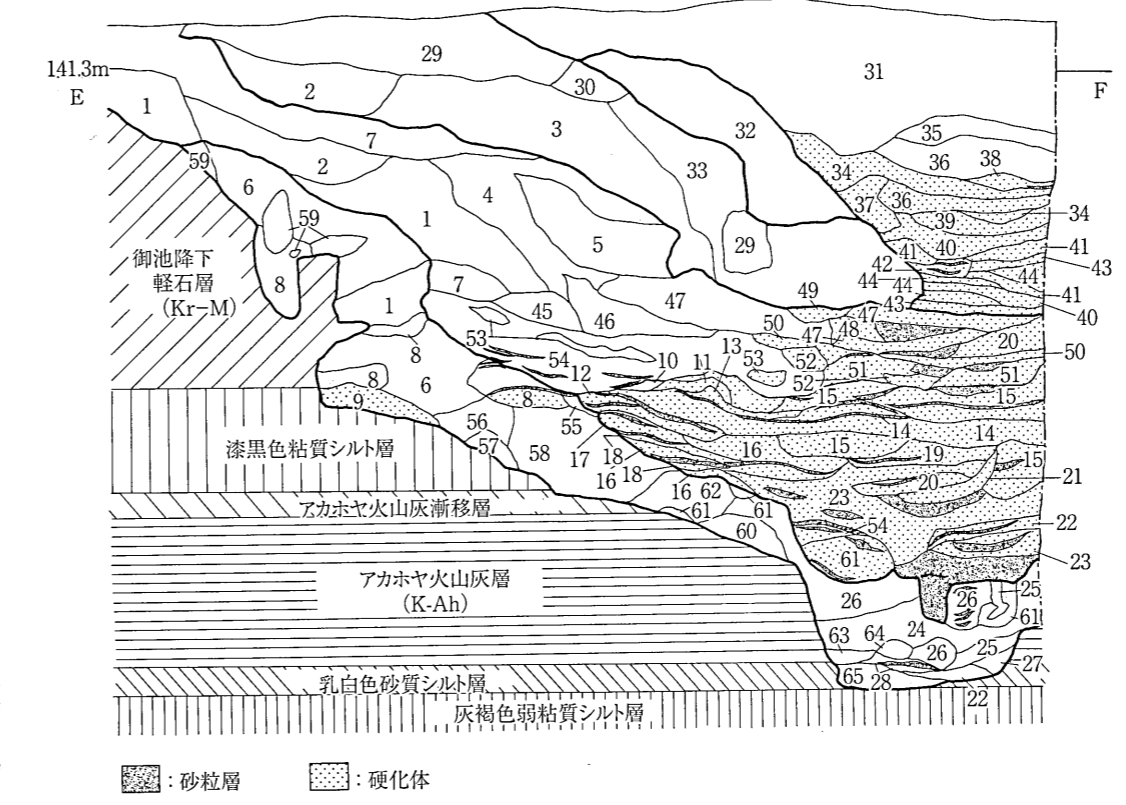
1. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む灰オリープ色砂質シルト層
2. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
3. 文明降下軽石粒、アカホヤ火山灰ブロックをまばらに含む灰白色砂質シルト層
4. 小礫を多量に含むシラス層(盛土層)
5. 文明降下軽石層
6. 炭化物を多量に含む黒褐色シルト層
7. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
8. 弱粘質黒色シルト層
9. 文明降下軽石層
10. 文明降下軽石層
11. 文明降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
12. 乳白色砂質シルト層
13. 御池降下軽石層
14. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
15. 文明降下軽石層の漸移層
16. 灰黒色シルト層
17. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
18. 灰褐色シルト層
19. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒褐色シルト層
20. 灰褐色シルト層
21. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む灰褐色シルト層
22. 文明降下軽石層
23. 文明降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
24. 御池降下軽石、文明降下軽石粒をまんべんなく含む黒色シルト層
25. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む灰褐色弱粘質シルト層
26. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
27. 御池降下軽石粒をわずかに含む灰褐色弱粘質シルト層



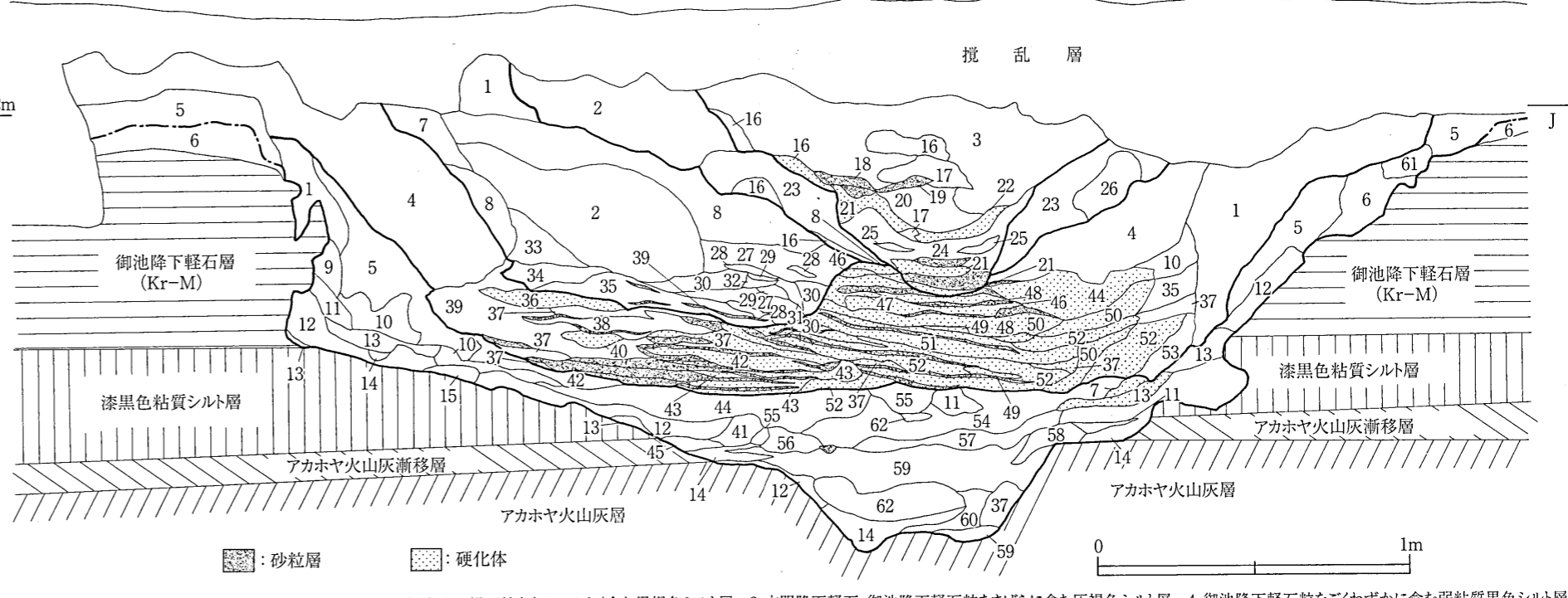
1. 軽石を含む灰黒色砂質シルト層
2. 灰褐色シルト層
3. 文明降下軽石層
4. 黒色シルトを含む文明降下軽石層
5. 文明降下軽石、御池降下軽石粒、砂粒をまばらに含む灰褐色シルト層
6. 文明降下軽石、御池降下軽石粒、砂粒を多量に含む灰褐色シルト層
7. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む黒褐色シルト層
8. 部分的に赤化した5
9. 文明降下軽石粒を多量に含む黒色シルト層
10. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む黒褐色弱粘質シルト層
11. 文明降下軽石粒をわずかに含む黒色シルト層
12. 砂粒を多量に含む9
13. 黒褐色弱粘質シルト層
14. 黒色シルト層
15. 砂粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
16. 御池降下軽石粒、砂粒、アカホヤ火山灰ブロックを含む13
17. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層
18. 黒色粘質シルト層
19. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
20. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
21. 御池降下軽石層
22. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
23. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
24. 灰褐色弱粘質シルト層
25. アカホヤ火山灰ブロック
26. 御池降下軽石粒をまばらに含む灰褐色弱粘質シルト層
27. 黒色粘質シルトと灰褐色弱粘質シルトの混土層
28. 御池降下軽石粒を多量に含む灰褐色弱粘質シルト層
29. 御池降下軽石粒を多量に含む暗灰褐色弱粘質シルト層
30. 砂粒を含む26
31. 砂粒を含む28
32. アカホヤ火山灰ブロック、砂粒を含む17
33. 御池降下軽石粒を含む漆黒色粘質シルト層
34. 御池降下軽石層
35. 砂粒を含む22

第23図 YG2B・1号溝 (SD01) 土層断面図②

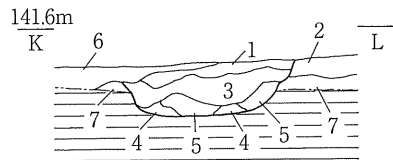
28. 御池降下軽石粒をまばらに含む灰褐色弱粘質シルト層
29. 御池降下軽石粒を多量に含む灰褐色弱粘質シルト層
30. 御池降下軽石粒、弱粘質黒色シルト層をまばらに含む灰褐色弱粘質シルト層
31. 灰褐色弱粘質シルト層
32. 御池降下軽石粒をわずかに含む漆黒色粘質シルト層
33. 御池降下軽石粒と弱粘質黒褐色シルト層の混土層
34. 文明降下軽石粒をまんべんなく含む灰黒色シルト層
35. 赤化した34
36. 灰褐色シルトを多量に含む文明降下軽石層
37. 砂粒を多量に含む35
38. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒褐色シルト層
39. 砂粒をまばらに含む38
40. 砂粒を多量に含む38
41. アカホヤ火山灰ブロックを含む40
42. 灰褐色弱粘質シルト層を含む御池降下軽石層
43. 砂粒を多量に含む42
44. アスファルト層及び砂利層(現地表層)



1. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
2. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
4. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒褐色シルト層
5. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒褐色シルト層
6. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
7. 御池降下軽石粒をこくわずかに含む黒色粘質シルト層
8. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む明黄褐色弱粘質シルト層
9. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色シルト層
10. 黄褐色砂質シルト層
11. 御池降下軽石粒を多量に含む灰褐色弱粘質シルト層
12. アカホヤ火山灰ブロック、御池降下軽石、黒色粘質シルト層の混土層
13. 御池降下軽石粒をまばらに含む灰褐色弱粘質シルト層
14. 砂粒、アカホヤ火山灰ブロック、御池降下軽石、黒色粘質シルト層、明褐色シルト層の混土層
15. 灰褐色シルト、砂粒、御池降下軽石、黒色粘質シルト層の混土層
16. 御池降下軽石、砂粒、灰褐色弱粘質シルト層の混土層
17. 御池降下軽石、砂粒、黒色粘質シルト層の混土層
18. 御池降下軽石、砂粒、黒色粘質シルト層の混土層
19. アカホヤ火山灰ブロック、灰褐色弱粘質シルト層、御池降下軽石、砂粒、黒色粘質シルト層の混土層
20. 御池降下軽石をまんべんなく含む灰褐色シルト層
21. 御池降下軽石をまばらに含む灰褐色シルト層
22. アカホヤ火山灰漸移層ブロック
23. 砂粒、御池降下軽石をまんべんなく含む灰褐色シルト層
24. 御池降下軽石、砂粒、小礫を含むアカホヤ火山灰漸移層ブロック
25. 黒褐色粘質シルトと御池降下軽石の混土層
26. 御池降下軽石をまばらに含む黒色粘質シルト層
27. 乳白色砂質シルト層と25の混土層
28. 御池降下軽石層
29. 文明降下軽石層
30. 文明降下軽石と黒色シルトの混土層
31. 礫、瓦片を含む灰オリープ色砂質シルト層
32. 文明降下軽石を多量に含む灰黒色シルト層
33. 黒色シルトを多量に含む文明降下軽石層
34. 文明降下軽石をまばらに含む黒色シルト層
35. 御池降下軽石をまばらに含む灰黒色シルト層
36. 灰褐色弱粘質シルト層
37. 文明降下軽石をわずかに含む灰黒色シルト層
38. 御池降下軽石をまんべんなく含む灰褐色シルト層
39. 文明降下軽石、御池降下軽石をわずかに含む黒色シルト層
40. 文明降下軽石、御池降下軽石をまばらに含む灰褐色シルト層
41. 灰褐色弱粘質シルト層
42. 文明降下軽石をまんべんなく含む灰褐色弱粘質シルト層
43. 文明降下軽石をまばらに含む灰褐色シルト層
44. 砂粒、文明降下軽石、灰黒色シルトの混土層
45. 砂粒、御池降下軽石を含むアカホヤ火山灰漸移層ブロック
46. 御池降下軽石を多量に含む灰褐色弱粘質シルト層
47. 漆黒色粘質シルトとアカホヤ火山灰漸移層ブロックの混土層
48. 御池降下軽石を多量に含む47
49. 文明降下軽石をまばらに含む47
50. 砂粒、御池降下軽石をまばらに含む黒褐色シルト層
51. 砂粒、御池降下軽石を多量に含む灰褐色シルト層
52. 御池降下軽石をまんべんなく含む黄褐色砂質シルト層
53. 御池降下軽石を多量に含むアカホヤ火山灰漸移層
54. 御池降下軽石をこくわずかに含むアカホヤ火山灰漸移層
55. 御池降下軽石をまんべんなく含むアカホヤ火山灰漸移層
56. 黒色粘質シルト層をまばらに含む8
57. 御池降下軽石をまんべんなく含むアカホヤ火山灰層
58. 御池降下軽石をこくわずかに含む漆黒色粘質シルト層
59. 御池降下軽石を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
60. 御池降下軽石をまばらに含む漆黒色粘質シルト層
61. アカホヤ火山灰漸移層ブロック
62. 御池降下軽石をまんべんなく含む47
63. 漆黒色粘質シルト層
64. 御池降下軽石層
65. 乳白色砂質シルト層

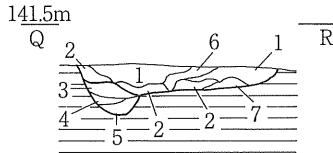


1. 御池降下軽石をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
2. 御池降下軽石をまんべんなく含む黒褐色シルト層
3. 文明降下軽石、御池降下軽石をまばらに含む灰褐色シルト層
4. 御池降下軽石をこくわずかに含む弱粘質黒色シルト層
5. 御池降下軽石をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
6. 御池降下軽石を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
7. 御池降下軽石をまばらに含む黒褐色シルト層
8. 御池降下軽石をこくわずかに含む黒褐色シルト層
9. 御池降下軽石層
10. 灰褐色粘質シルトを含む9
11. 御池降下軽石をまんべんなく含む灰褐色粘質シルト層
12. 御池降下軽石を多量に含む灰褐色粘質シルト層
13. 黒色シルトを含む12
14. 灰褐色粘質シルト層
15. 御池降下軽石、灰褐色粘質シルトを含む漆黒色粘質シルト層
16. 御池降下軽石、文明降下軽石をまんべんなく含む灰褐色シルト層
17. 明褐色弱粘質シルト層
18. 明褐色弱粘質シルト層
19. 16を含む砂粒層
20. 文明降下軽石をまんべんなく含む灰黒色シルト層
21. 文明降下軽石をまんべんなく含む灰褐色シルト層
22. 砂粒をまばらに含む16
23. 灰褐色シルトを含む文明降下軽石層
24. 暗褐色弱粘質シルト層
25. 御池降下軽石をまばらに含む明褐色弱粘質シルト層
26. 黒色シルト層
27. 御池降下軽石をまんべんなく含む黒褐色砂質シルト層
28. 御池降下軽石、砂粒をまばらに含む黒褐色砂質シルト層
29. 御池降下軽石、砂粒をまんべんなく含む黒褐色弱粘質シルト層
30. 御池降下軽石をまばらに含む黒褐色砂質シルト層
31. 御池降下軽石、砂粒を多量に含む黒褐色砂質シルト層
32. 黒褐色砂質シルト層
33. 黒色シルト層
34. 砂粒を含む8
35. アカホヤ火山灰漸移層ブロック
36. 御池降下軽石をまばらに含む黒褐色砂質シルト層
37. 漆黒色粘質シルトとアカホヤ火山灰漸移層の混土層
38. 御池降下軽石をまばらに含む37
39. 37と42がラミナ状に堆積した砂粒層
40. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層
41. 御池降下軽石、アカホヤ火山灰ブロックを含む38
42. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層をまばらに含む37
43. 37と42がラミナ状に堆積した砂粒層
44. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層
45. 砂粒、小礫を含む37
46. 砂粒を多量に含む8
47. 御池降下軽石を多量に含む8
48. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層をまばらに含む黒褐色シルト層
49. 御池降下軽石をまばらに含む漆黒色粘質シルト層
50. 御池降下軽石をわずかに含む37
51. 御池降下軽石と8の互層
52. 御池降下軽石、黒色粘質シルト層
53. 御池降下軽石を多量に含む37
54. アカホヤ火山灰ブロック、黒色粘質シルト層を含む12
55. アカホヤ火山灰ブロックを含む11
56. 漆黒色粘質シルト層
57. 砂粒を多量に含む12
58. 漆黒色粘質シルト層
59. 砂粒、漆黒色粘質シルト層
60. 黒褐色粘質シルト層
61. 御池降下軽石層
62. 漆黒色粘質シルト層



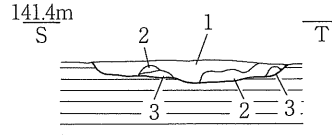
〔SD02・西端部〕

1. 御池降下軽石粒をこくわずかに含む黒色粘質シルト層(全体的に硬化)
2. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
4. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
5. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
6. 文明降下軽石層
7. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)



〔SD02・中央部〕

1. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
2. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
4. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
5. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)



〔SD02・東端部〕

1. アスファルト層及び砂利層(現地表層)
2. 文明降下軽石粒を多量に含む黒色シルト層(全体的に硬化)
3. 黒色粘質シルト層(全体的に硬化)
4. 御池降下軽石粒をこくわずかに含む黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石粒をわずかに含む黒色粘質シルト層(全体的に硬化)
6. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒褐色シルト層
7. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
8. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
9. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)

〔SC01〕

1. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
2. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
3. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルトブロック
4. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
5. 黒色粘質シルトを多量に含む御池降下軽石ブロック
6. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
7. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)

〔SC02〕

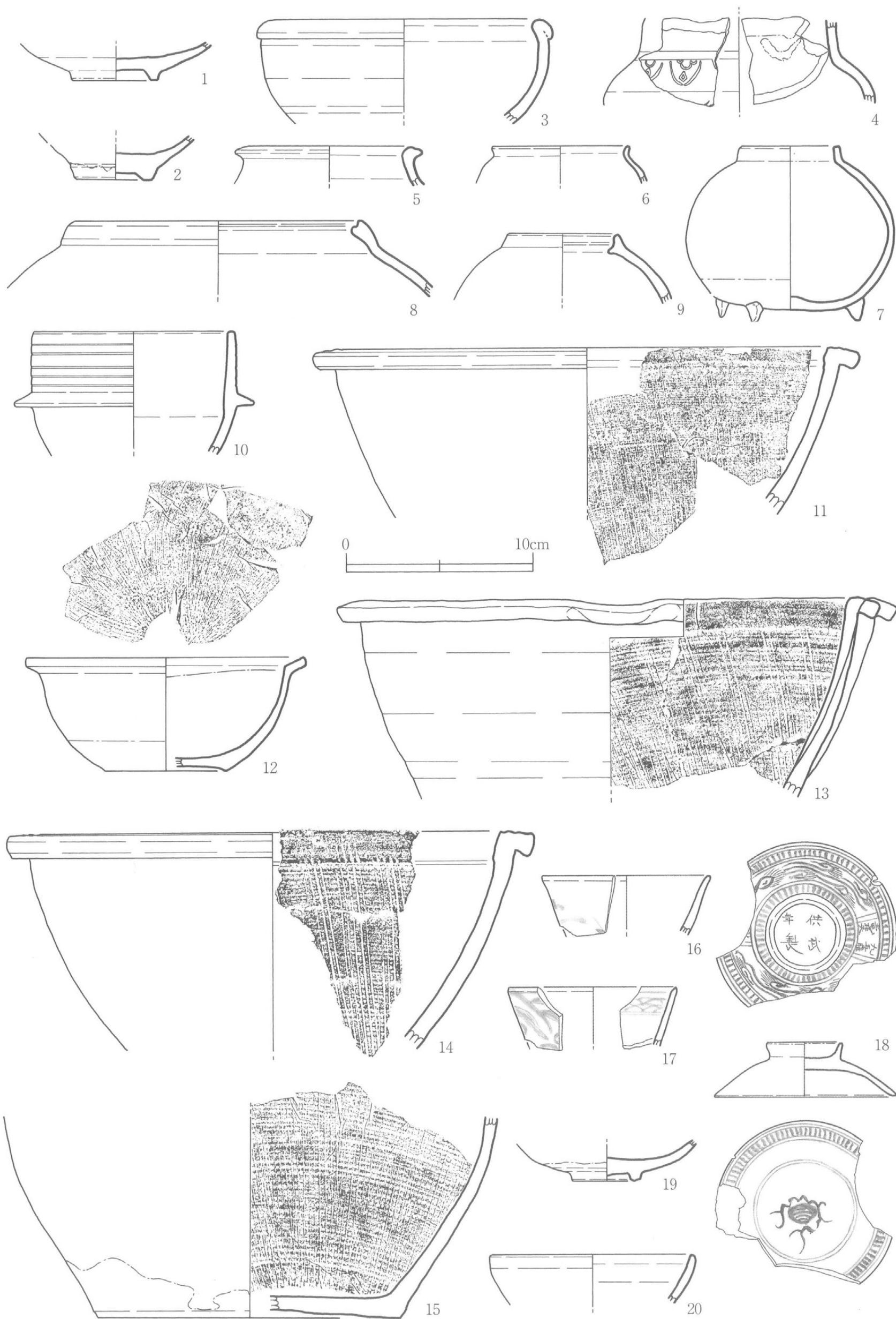
1. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
2. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層

第24図 YG2B・遺構土層断面図 (SD02, SC01・02)

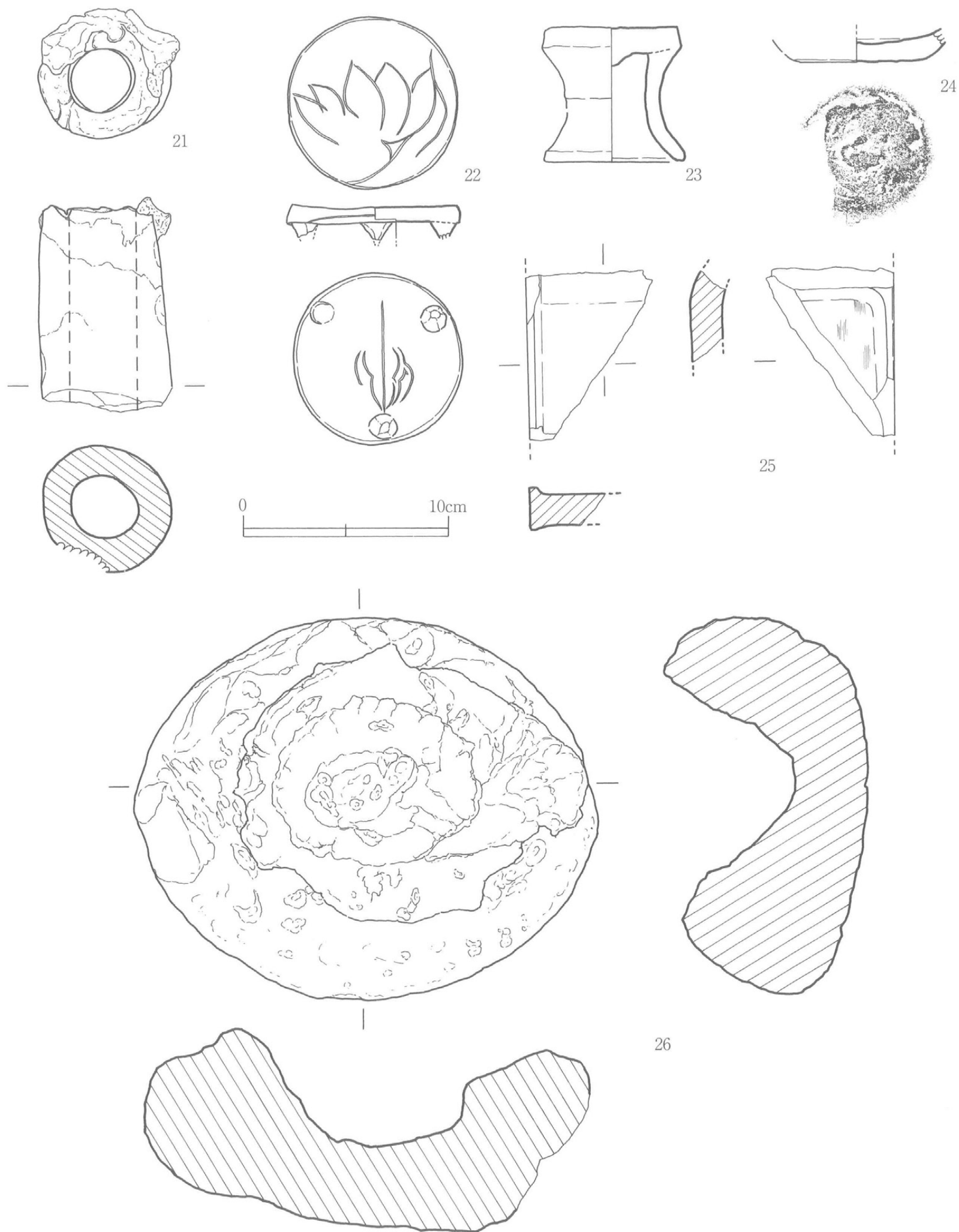
は、近年調査された薩摩系の山元古窯跡⁽¹⁾や元立院窯跡⁽²⁾が挙げられるが、両窯跡で出土したハマは基本的に足の付かない円板形や据台形、逆蓋形の形態を示すものが主で、元立院窯跡に高台を有するタイプがわずかにみられる程度である。また、円板部のつくりについても、両窯跡出土の円板状ハマは、「轆轤上に円柱状の粘土塊を成形し、糸切りで同規格のハマを量産的に作ったと思われる」⁽³⁾ため、基本的に片面には糸切り痕がみられるのに対し、今回出土したハマの円板部は切り離し痕を丁寧にナデ消した後、表裏面に花卉状の線刻が施されていることから、その製作方法の面でも相違点を指摘できる。この三足ハマの出自を含めた位置付けについては、今後薩摩系陶磁器の窯跡調査が進展し、こうした類例が増加することを期待するとともに、肥前系との技術交流も視野に入れながら検討していく必要がある。23は上面に残るわずかな釉薬痕から中空のトチンと考えたが、かなり磨耗していることからチャツの可能性も残る。山元古窯跡では「シノ形トチン」と分類されているもので、元立院窯跡でも少量ではあるが見受けられるタイプである。22と比較して、23の胎土は陶器よりも土器に近い形質を示すが、かなりの火熱を受けており焼き締まった印象を受ける。なお、これら窯道具の出土は今回の2点が都城市内でも初めての発見となったが、近世以降の窯業地帯として複数の窯跡の存在が示唆されてきた当該地域においてこうした発見がなされた点は、これまで全く伝承の領域を脱し得なかった近世の窯業遺跡の解明について、今後新たな展開が図られるきっかけになったといえよう。21は直径約6.5cmの轆の羽口で、やや楕円形に歪んだ送風孔径は約3.4cmを計る。一部が被熱によって変色しているほか、炉に接した先端部側には熔着物が認められる。24は底部へラ切り離しの土師器・坏で、内面にはススが付着している。25は硯の破片で、部分的に墨痕が残る。26は中央を彫り窪めた軽石製品で、水抜き孔は認められないが盆栽鉢と考えている。

〔註〕

- (1) 関 一之 1995 『山元古窯跡』加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書1 加治木町教育委員会
- (2) 下鶴 弘 1995 『元立院窯跡遺跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 始良町教育委員会
- (3) 前掲(1) p.96より引用



第25图 YG2B·出土遺物実測図①



第26図 YG2B・出土遺物実測図②

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
1	一括	SD01 最上層	陶器	碗	灰白	オリーブ灰～ 灰白	ロクロN	ロクロN	㊦微・少	㊦見込:蛇ノ目釉剥ぎ 高台畳付:露胎 ㊦～㊦体部上半:白化粧土
2	〃	〃 上層	〃	〃	極暗赤褐～ にぶい橙	極暗赤褐～ にぶい橙	〃	〃	混入物なし	㊦見込:蛇ノ目釉剥ぎ、ノミス細粒状の砂目積痕あり 高台部:露胎
3	〃	〃 最上層	〃	鉢?	灰オリーブ	灰オリーブ	〃	〃	〃	口縁:玉縁状
4	〃	〃	〃	壺?	淡緑	淡黄～淡緑	〃	〃	〃	㊦肩部以下:露胎 緑釉 軟陶 ㊦肩部:陰刻あり

表5 YG2B・出土遺物観察表①

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
5	一括	SD01 上層	陶器	小壺	オリーブ褐	オリーブ褐	ロクロN	ロクロN	㊸㊹中・少	
6	〃	〃 中層	〃	〃	浅黄	浅黄	〃	〃	混入物なし	貫入多い
7	〃	〃 最上層	〃	土瓶	灰褐	灰褐	〃	〃	㊸㊹微・並	㊸㊹体部下端～底部:露胎,ハケ目明瞭
8	〃	〃 上層	〃	〃	赤黒	オリーブ黒	〃	〃	㊸微・少	口唇～㊸㊹口縁:露胎
9	〃	〃 中層	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい赤褐	〃	〃	混入物なし	㊸鉄泥漿 ㊹サメ肌釉
10	〃	〃 上層	〃	羽釜	褐	褐	〃	〃	〃	軟陶 鋳部下位:スス付着
11	〃	〃 最上層	〃	播鉢	オリーブ黒	灰褐	ロクロN	ロクロN	㊸㊹微・多	㊸7条1単位の播目 ㊹口縁:銀化口唇～㊸体部下:露胎
12	〃	〃	〃	〃	灰赤～灰褐	灰赤～灰褐	〃→ 横K	〃→ 横K	㊸㊹微・並	㊸7条1単位の播目 ㊹口縁:㊸体部下:露胎
13	〃	〃	〃	〃	オリーブ黒	黒褐	〃 横H	〃 横H	㊸微・少	口縁:一部注口状 ㊸6条1単位の播目 口唇:釉剥ぎ
14	〃	〃 上層	〃	〃	〃	灰褐	〃	〃	㊸㊹微・並	口唇:釉剥ぎ ㊸5条1単位の播目
15	〃	〃 最上層	〃	〃	〃	黒褐	〃	〃	㊸微・並	㊸9条1単位の播目 ㊹体部下端～底部:露胎
16	〃	〃	磁器(染付)	猪口	青みを帯びた 灰白	青みを帯び た灰白	ロクロN	ロクロN	精良 混入物なし	口縁:端反状 貫入多い
17	〃	〃	〃(〃)	〃	灰白	灰白	〃	〃	〃	㊸口縁:「青海波文」 ㊹:「草花文」?
18	〃	〃 上層	〃(〃)	碗蓋	〃	〃	〃	〃	〃	つまみ部見込:「供武年製」の銘款 ㊸:「格子文」 ㊹見込:「宝文」? ㊸体部:「格子龍文」,「竜在天 九五龍」の銘 つまみ部縁:露胎
19	〃	〃	〃(白磁)	皿	〃	〃	〃	〃	〃	㊸体部下～高台部:露胎
20	〃	〃 中層	〃(青磁)	小碗	オリーブ黄	オリーブ黄	〃	〃	〃	貫入多い
21	〃	〃 最上層	土製品	鞆・ 羽口	浅黄～黒	浅黄	N	軸木の 木目残る	〃	先端部:スラグが垂れ下がった状態
22	〃	〃	土製品 (察道具)	三足 ハマ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ロクロN	ロクロN	〃	表・裏面:花卉を模した線刻装飾 表面:高台跡とみられる熔着痕あり
23	〃	〃 上層	〃 (〃)	トチ ン?	にぶい橙	にぶい橙	N	N	〃	火熱を受け赤化 底面:熔着物あり チャツの可能性あり
24	〃	〃 床面	土師器	坏	浅黄橙	浅黄橙	ロクロN	ロクロN	㊸微・微	底部:ヘラ切り離し ㊸:スス付着
25	〃	〃 最上層	石製品	硯?						部分的に墨痕あり
26	〃	〃	軽石製品	植木 鉢?						

表6 YG2B・出土遺物観察表②

4. 柳川原遺跡・第3次調査 (YG3)

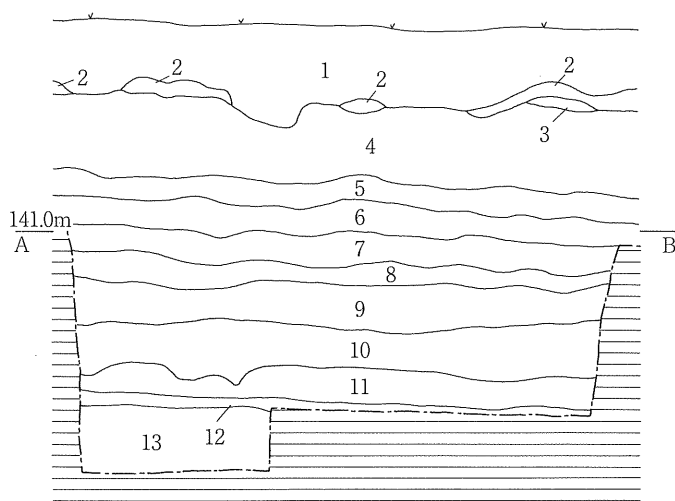
[第27図～第31図, 表7, 図版1]

当地区の調査は、市道「年見川通線」の拡幅部分及び都市公園予定地の約640㎡を対象に、平成9年10月1日から同年10月30日にかけて実施している。当区の現況は砂利敷きの駐車場及び荒蕪地で、以前個人住宅が所在していた関係で建物の基礎などによる攪乱が随所に認められたが、土層的には調査区南側一帯において良好な状態で遺存している基本層序の第1層～第7層を確認することができた。御池降下軽石層漸移層(第6a層)上面で確認した当区内の地形は、ピークとなる調査区北東部から西ないし南西方向への傾斜が認められるほか、調査区西半部では北及び西側からも緩やかに標高を減じてきており、結果的に最も低い南西部付近では比高差約0.9mほどの谷地形が形成されている。また、この谷の底部付近に設定した確認トレンチで観察すると、漆黒色粘質シルト層(第7層)との境界に近い御池降下軽石層(第6b層)下部付近からの湧水がみられるほか、その上部の軽石層は鉄分が沈着し、部分的な赤化も進んでいる。これは第1次調査(YG1)で確認した状況とほぼ合致していることから、当地区においてもYG1と同様に御池降下軽石層以降に本格的な居住空間としての活用が進んだものと推測される。

今回の調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を検出している。まず、遺構については掘立柱建物跡4棟と柱穴群、溝状遺構1条、土坑8基、倒木痕2ヶ所が挙げられる。約400箇所検出した柱穴は埋土によって4タイプ(①群:主たる埋土が基本土層の第1層、②群:第4層、③群:第5a層、④群:第5b層)に大別でき、

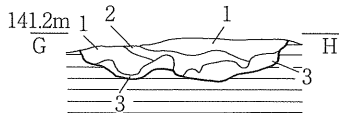


第27図 柳川原遺跡・第3次調査 (YG3) 遺構分布図



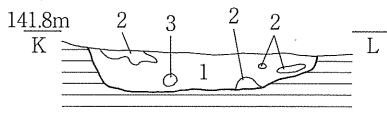
(YG3 基本土層図)

1. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層(表土層)
2. 文明降下軽石粒をまんべんなく含む黒色シルト層
3. 文明降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
4. 黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
6. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒色粘質シルト層
7. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(6~8の漸移層)
8. 御池降下軽石層(部分的に7の染み込みが認められる細粒軽石層)
9. 御池降下軽石層(細粒軽石層)
10. 御池降下軽石層(中粒軽石層)
11. 御池降下軽石層(部分的に赤化した10)
12. 御池降下軽石層(鉄分が沈着した11)→現在の湧水レベル
13. 漆黒粘質シルト層



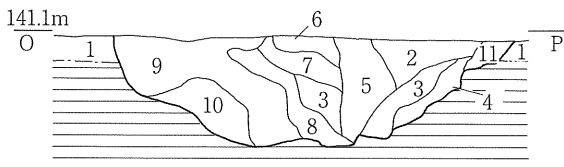
(SC03)

1. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
2. 御池降下軽石細粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒と黒褐色シルトの混土層

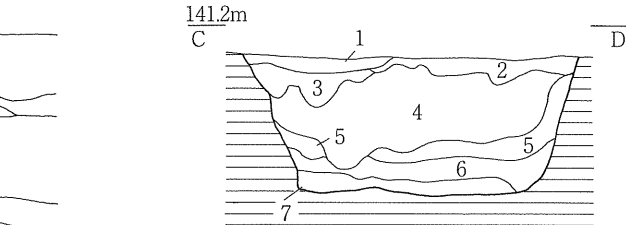


(SD01・中央部)

1. 御池降下軽石粒、炭化物、黒色粘質シルトブロックを含む灰オリーブ色砂質シルト層
2. 御池降下軽石粒を含む灰黒色シルトブロック
3. 黒褐色シルトを多量に含む御池降下軽石ブロック

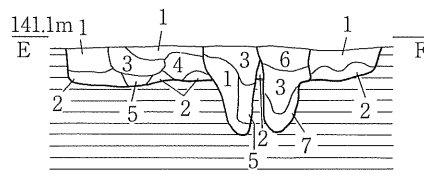


(SX02)



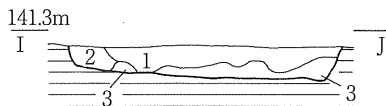
(SC01)

1. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む黒褐色シルト層
2. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルトブロック(漸移層ブロック)
3. 2をまばらに含む御池降下軽石層
4. 白色(脱色)化した御池降下軽石層(二次堆積)
5. 鉄分が沈着し、赤化した御池降下軽石層(二次堆積)
6. 黒褐色粘質シルトをわずかに含む御池降下軽石層(二次堆積)
7. 上面が赤化した御池降下軽石層(二次堆積)



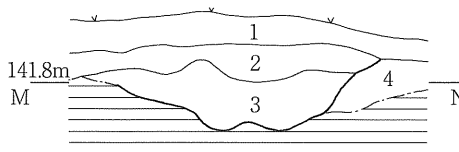
(SC02)

1. 御池降下軽石ブロックをまんべんなく含む黒褐色シルト層
2. 黒褐色シルトブロックを含む御池降下軽石層
3. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色シルト層
4. 黒褐色粘質シルトと御池降下軽石粒の混土層
5. 黒色シルトと御池降下軽石粒の混土層
6. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒褐色シルト層
7. 黒色シルトブロックをわずかに含む御池降下軽石層



(SC04)

1. 御池降下軽石粒と黒褐色シルトの混土層(鉄分が沈着し、全体的に赤化)
2. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色シルト層
3. 上面が赤化した御池降下軽石層(二次堆積)



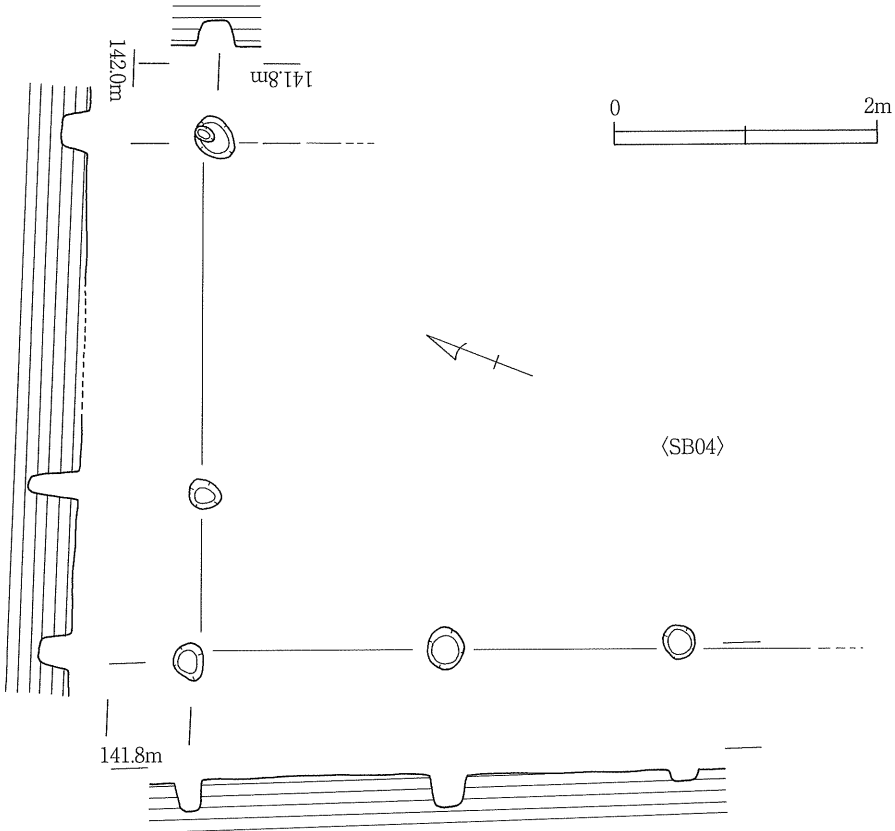
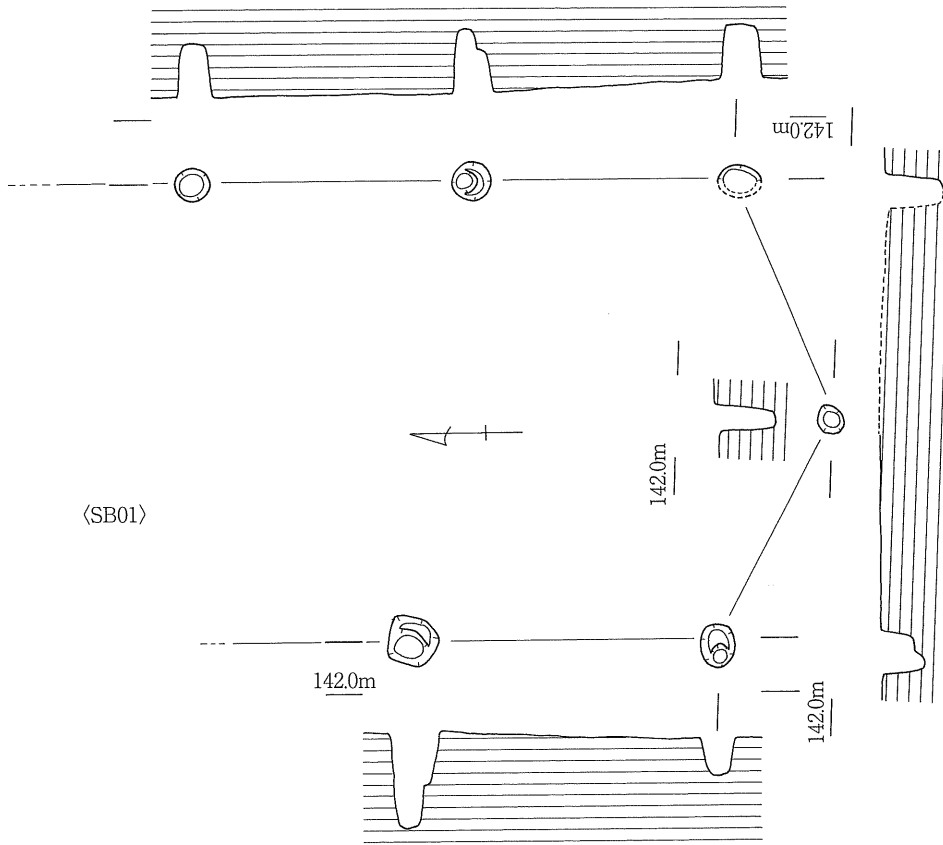
(SD01・北端部)

1. 文明降下軽石、御池降下軽石粒をまばらに含む灰オリーブ色砂質シルト層(表土層)
2. 1と3の混土層
3. 御池降下軽石粒、炭化物、黒色粘質シルトブロックを含む灰オリーブ色砂質シルト層
4. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む灰褐色シルト層

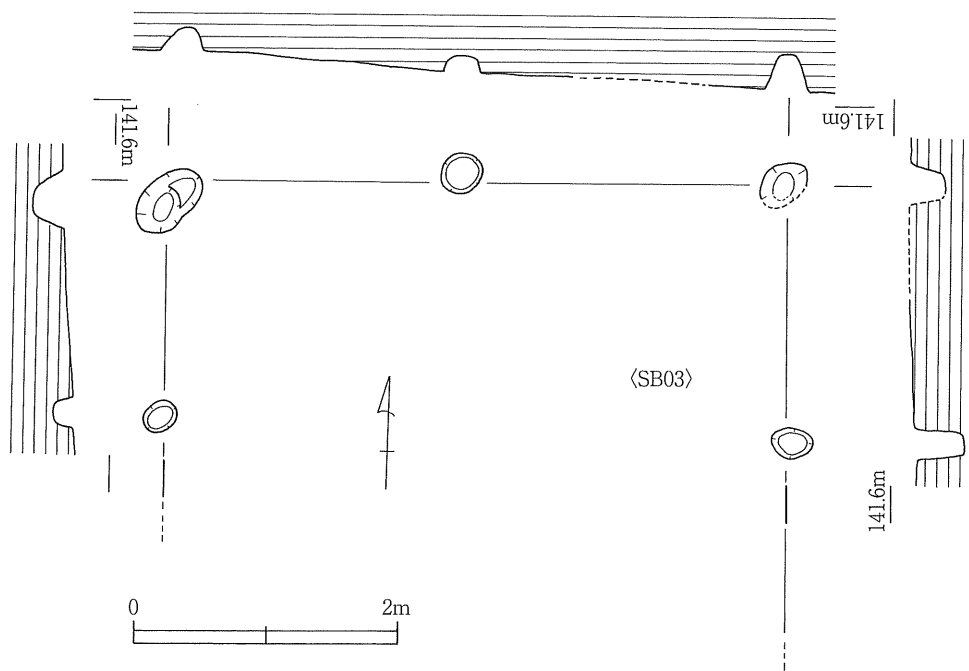
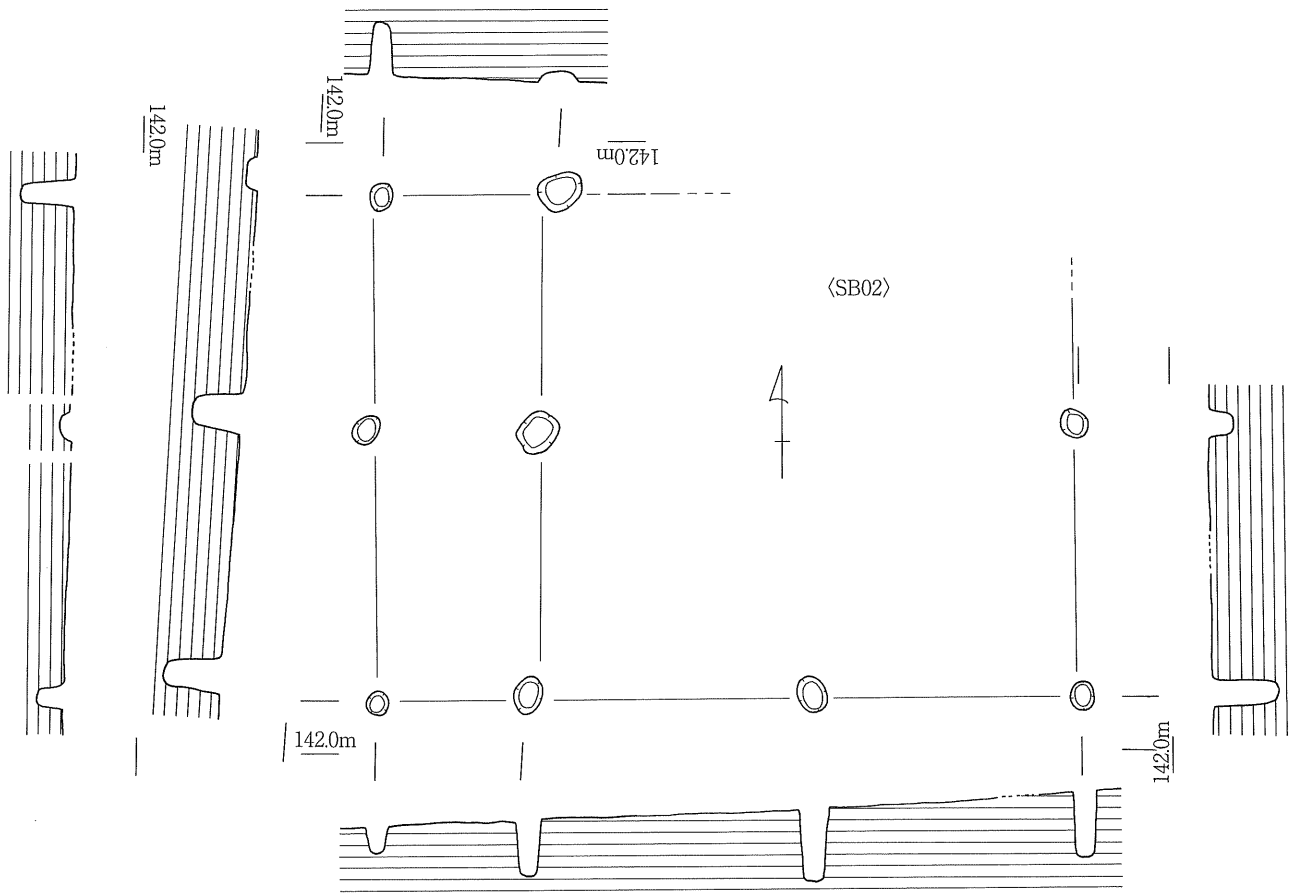
1. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層(御池降下軽石層の漸移層)
2. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
3. 御池降下軽石粒をまばらに含む弱粘質黒色シルト層
4. 御池降下軽石粒をまんべんなく含む弱粘質黒褐色シルト層
5. 御池降下軽石粒をわずかに含む弱粘質黒色シルト層
6. 御池降下軽石粒を多量に含む弱粘質黒色シルト層
7. 御池降下軽石細粒をまんべんなく含む弱粘質黒色シルト層
8. 御池降下軽石ブロックを含む黒褐色シルト層
9. 弱粘質黒色シルトブロックをまばらに含む御池降下軽石層(二次堆積)
10. 弱粘質黒色シルトブロックをこくわずかに含む御池降下軽石層(二次堆積)
11. 黒褐色シルトを多量に含む御池降下軽石層



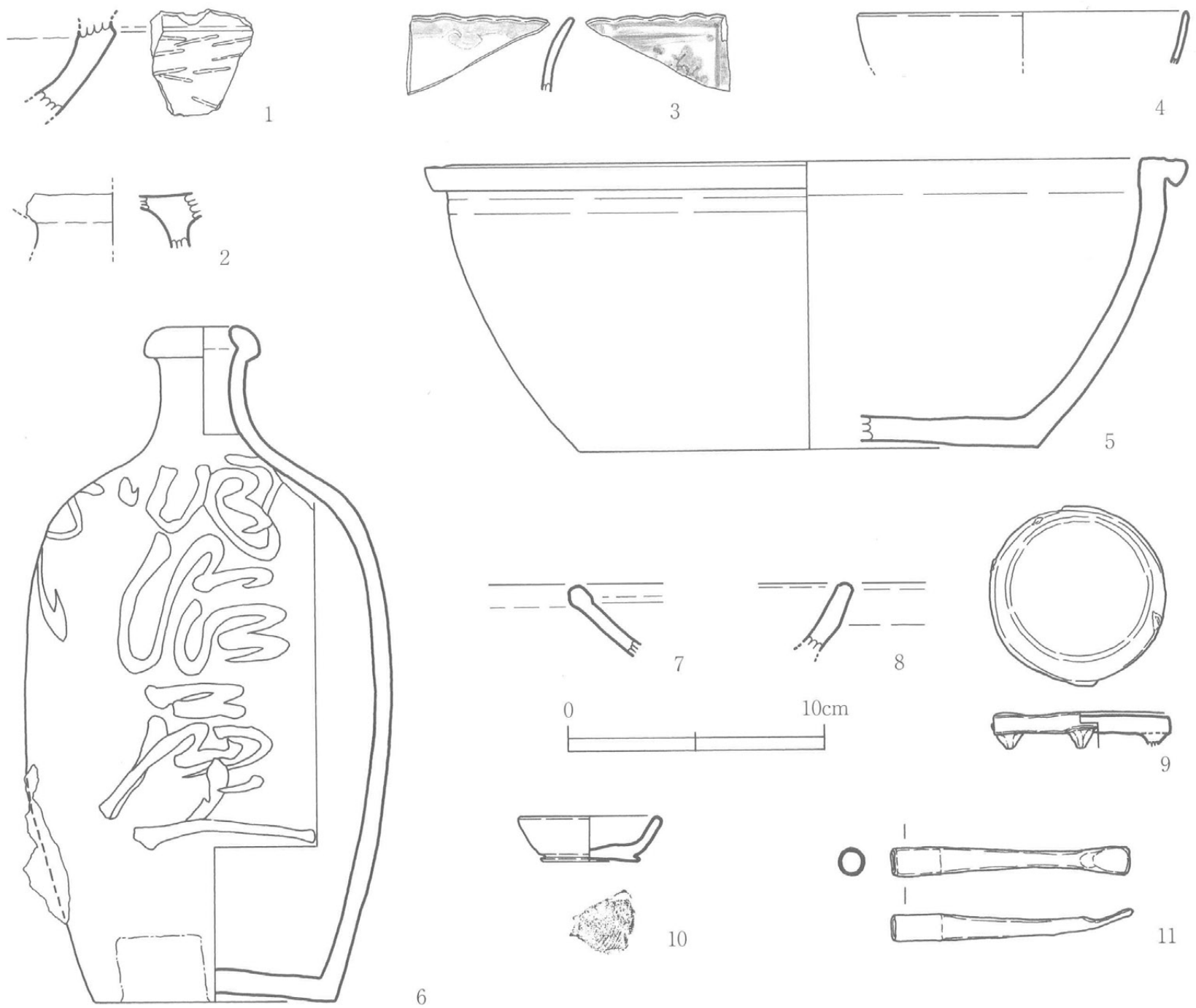
第28図 YG3・基本土層図及び遺構土層断面図 (SD01, SC01~04, SX02)



第29图 YG3・掘立柱建物跡実測图① (SB01・04)



第30图 YG3・掘立柱建物跡実測図② (SB02・03)



第31図 YG3・出土遺物実測図

出土遺物等からみて①群を近世～近代、②群を古代末～中世初頭頃、③群を縄文時代晩期頃に比定している。また、共伴遺物が確認されていない③群については、YG1の調査事例から弥生時代後期～終末期頃を想定している。調査区東側の微高地部周辺で検出した掘立柱建物跡は、建物を構成している柱穴の埋土から、概ね2時期（②群：SB01～03、③群：SB04）に大別することができる。SB01は梁間2間（約3.4m）・桁行2間（約4.3m）以上の南北棟建物跡で、北半部は調査区外へと延びているため不明である。時期的な問題は残るが、いわゆる棟持ち型の建物跡とみられる。南東隅の柱穴内からは土師器の高台付埴（2）が出土している。SB02は西側に一面庇の付く東西棟建物跡で、梁間2間（約3.9m）・桁行2間（約4.3m）を計る。なお、この2棟は切り合い関係にあるが、明確な柱穴同士の切り合いが認められないため、その前後関係は不明である。SB03は調査区際で確認した建物跡で、南北棟・東西棟の別は不明である。規模は東西2間（約4.7m）、南北1間（約2.0m）以上を計る。①群の3棟はいずれも主軸方向が類似していることから、ほぼ同時期あるいはかなり近い段階の建物群であると思われる。弥生時代後期～終末期頃を想定しているSB04も調査区南東部で検出した建物跡で、区域外へ延びているため南北棟・東西棟の別は不明である。東西2間（約4.0m）、南北1間（約2.0m）以上を計る。

SD01は調査区北東部で検出した溝状遺構で、埋土や出土遺物から近世末～近代に比定している。確認できた幅員は約1.5m、深さ0.2～0.4mを計る。地焼の可能性の残る製品（6）も含め、薩摩系陶器が出土遺物の主勢を占めている。

調査区西側に集中する土坑SC01～08には共伴遺物がないことから、明確な時期は不明である。ただし、基本土層の第5a層～第6a層を主たる埋土とし、文明降下軽石等も含まれていないことから、中世前半以前の遺構

と考えている。

SX01・02は倒木痕である。これも埋土中に文明降下軽石が認められないことから、それ以前の痕跡とみられる。SX01は北側、SX02は北東側への倒木痕であり、YG1で検出した倒木痕同様、台風等を含めた自然災害に因る可能性が高い。

出土遺物は包含層の残存状態に比してかなり少なく、しかも細片が大部分を占めている。時代的には、縄文時代晩期、古代末～中世初頭頃、近世～近代の3期に分けられるが、他の調査区同様主となるのは近世以降の遺物であった。1は外面に横方向のミガキが施された縄文時代晩期頃の浅鉢の胴部片である。④群の柱穴内出土遺物で、周辺の包含層内にも当該期の土器片が散見される。2はSB01を構成する柱穴から出土した土師器の高台付埴で、坏部・脚部ともに欠損していることから明確な時期比定はできないが、古代末頃の遺物と考えている。3～11は近世～近代の遺物である。3は19C前半頃の肥前系染付で、輪花形の鉢とみられる。4は産地不詳の白磁碗である。5は薩摩系の鉢で、口縁部は「L」字形に外反させるタイプである。口唇部は釉剥ぎが施されており、1cm角の胎土目積痕も認められる。6は地焼の可能性のある瓶で、外面には「明治屋」「城崎酒店」「銘酒都島」等が白土描きされている。現在も操業を続けている事業者は残っていないが、都城市内でも戦前までは清酒の製造が行われており、当遺跡の北西部に隣接する前田町に昭和初期まで同名の造り酒屋が所在していたことが確認されていることから⁽¹⁾、この瓶もそこでオーダーメイドされたいわゆる「通い瓶」であったと推測される。7は薩摩系陶器の土瓶、8は焙烙の皿部である。9は隣接するYG2Bでも出土している三足ハマである。陶質で、円板部表面には高台の熔着痕が認められる。史料や絵図によると、中央東部地区遺跡群のすぐ東側に都城焼物所という官窯が18C後半頃開窯されて以降、当遺跡周辺には昭和初期まで民間窯を含めた複数の陶器窯が所在していたという伝承が残っている。そういった意味では、地焼の可能性の残る6の出土とも合わせて、こうした窯道具が集中的に出土する傾向は、近在に当該期の窯業遺跡が遺存している可能性を示唆しているとも考えられ、また周辺環境の面でも、窯場周辺に燃料用として植栽されることもある竹材が、住宅密集地である当調査区南側に不自然な形で残っていた点などは、こうした伝承を傍証する上で非常に興味深いといえよう。10は土師器の小皿で、底部は糸切り離しである。16C末～17C前半頃に比定している。11は青銅製の煙管の吸口である。

〈註〉

(1) 都城市立図書館・武田浩明氏のご教示による

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
1	D-2	pit	縄文土器	深鉢	にぶい赤褐	黒	横M	N	④⑤微・並	
2	〃	SB01 pit	土師器	高台 付埴	にぶい橙	にぶい橙	ロクロN?	ロクロN?	混入物なし	
3	一括	1層	磁器(染付)	鉢	灰白	灰白	ロクロN →型打?	ロクロN →型打?	〃	輪花鉢
4	E-2	SD01 一括	〃(白磁)	碗?	〃	〃	ロクロN	ロクロN	〃	
5	〃	〃 下層	陶器	鉢	にぶい赤褐	にぶい赤褐	〃	〃	④微・少	口唇・露胎,1cm角の胎土目? 積痕あり 底部・露胎,切り離し後H→N
6	一括	1層	〃	瓶	灰赤	灰赤	〃	〃	混入物なし	「明治屋」「城崎酒店」「銘酒都島」の白土銘あり 底部・砂目積痕あり
7	E-2	SD01 一括	〃	土瓶	〃	〃	〃	〃	⑤微・少	焼成悪い
8	〃	〃 〃	土製品	焙烙	にぶい褐	にぶい褐	〃	〃	混入物なし	
9	一括	1層	〃(窯道具)	三足 ハマ	橙	橙	〃	〃	〃	表面に高台(直径2.6cm)の溶着痕あり
10	E-2	SD01 中層	土師器	小皿	にぶい橙	にぶい橙	〃	〃	〃	底部・糸切り離し
11	〃	〃 〃	銅製品	煙管 吸口						

表7 YG3・出土遺物観察表

5. 中町遺跡の基本層序

[第32図]

当遺跡においては、年見川に面した北半部を中心にかなり広範囲にわたる削平・造成工事等が行われており、結果的に各調査区の層序は、御池降下軽石層以下あるいはアカホヤ火山灰層以下しか残存していないという状況であった。こうした造作がいつの段階で行われたか、掘るべき史料等がないことから推測の域を出ないものの、出土遺構から少なくとも近代以前には現在の地形が形成されていたものと考えられる。このように当遺跡でも調査区ごとに様相が異なっていることから、ここでは第2次調査の基本土層をベースに基本層序を示し、各地点の状況は各項で触れることとした。各層の概要は次の通りである。

第1層：御池降下軽石粒をまばらに含む灰褐色砂質シルト層（表土層）、第2層：御池降下軽石層（上面削平を受けた箇所あり）、第3層：漆黒色粘質シルト層、第4a層：アカホヤ火山灰を多量に含む黒褐色粘質シルト層（アカホヤ火山灰層の漸移層）、第4b層：アカホヤ火山灰層、第5層：暗黒褐色粘質シルト層、第6層：蒲牟田スコリア〔霧島火山系を噴源とする褐色スコリア（KMS）；約7,400～8,300年前〕をまばらに、桜島・末吉軽石〔桜島起源の黄白色軽石（P11）；約7,500年前〕を多量に含む暗黒褐色粘質シルト層（P11は下位に集中）、第7層：KMSをまばらに、P11をまんべんなく含む暗黄褐色シルト層、第8層：KMS、P11をごくわずかに含む暗黄褐色シルト層、第9層：明黄褐色粘質土層。

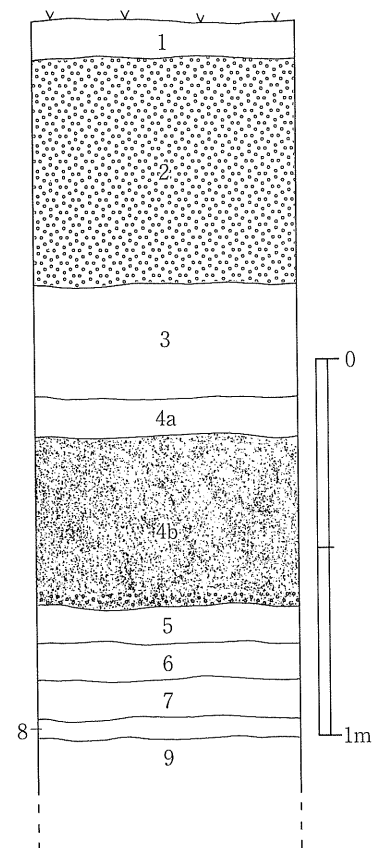
当遺跡では、近世ないし近代とみられる遺構を第2層及び第4層上面で確認しているが、それらに伴う遺物は大半が第1層中からの出土であった。また、局部的にアカホヤ火山灰層下まで確認したトレンチでは、第6層から第9層にかけて分布する小礫群（一部焼礫含む）が検出されたほか、縄文時代早期とみられる遺物も出土している。

6. 中町遺跡・第1次調査

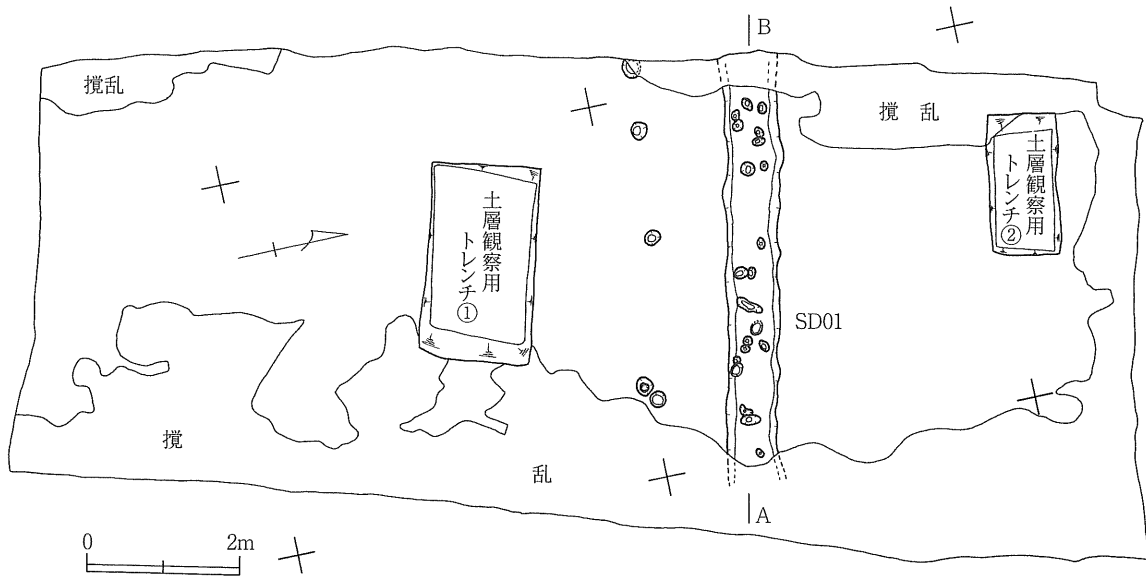
1) A地区 (NM1A)

当地区では、当初映画館跡地と宅地跡の計約700㎡を調査対象としていたが、調査に先立って設定した試掘トレンチで確認した結果、映画館跡地は建物の建設・解体等に伴う攪乱が著しく遺跡の遺存が確認されなかったことから、かろうじてアカホヤ火山灰層が残存していた西側部分約88㎡を対象に、平成8年11月5日から同年12月5日にかけて調査を実施している。当調査地点は、調査区南端の断面で観察すると、わずかに残存する御池降下軽石層や漆黒色粘質シルト層が確認できたものの、基本的には対象区全体が実施年代不詳の造成工事によってアカホヤ火山灰層上面まで削平を受けている状態であった。また、土層観察用トレンチでアカホヤ火山灰層以下の状況も確認したが、遺構・遺物は検出されなかった。今回の調査では、検出面となるアカホヤ火山灰層上面で、ほぼ東西方向に走行し、埋土中に多量の小礫や軽石が詰められた溝状遺構（SD01）とピット5箇所を検出している。SD01は幅員約0.7m、検出面からの深さ約0.15～0.2mを計り、床面には軽石等を埋め込んだ痕跡が小ピット状に散見される。埋土の床面から上層部まではほぼまんべんなく軽石や小礫が充填されており、それらの間には軽石片を多量に含む御池降下軽石粒・アカホヤ火山灰・漆黒色粘質シルトの混土層が認められる。また、充填された軽石群が東側では部分的に破碎され、浅いくぼみとなっている。この遺構の機能については、溝と平行にピットが点在していることから、雨落しの溝や通路的な役割などを想定しているが、いずれも推測の域を出ない。

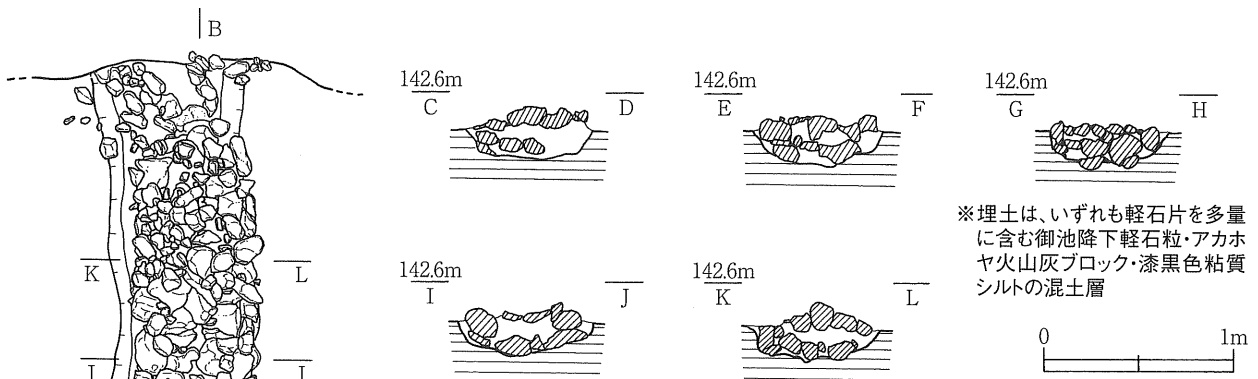
[第33図～第35図, 図版1]



第32図 中町遺跡基本土層図

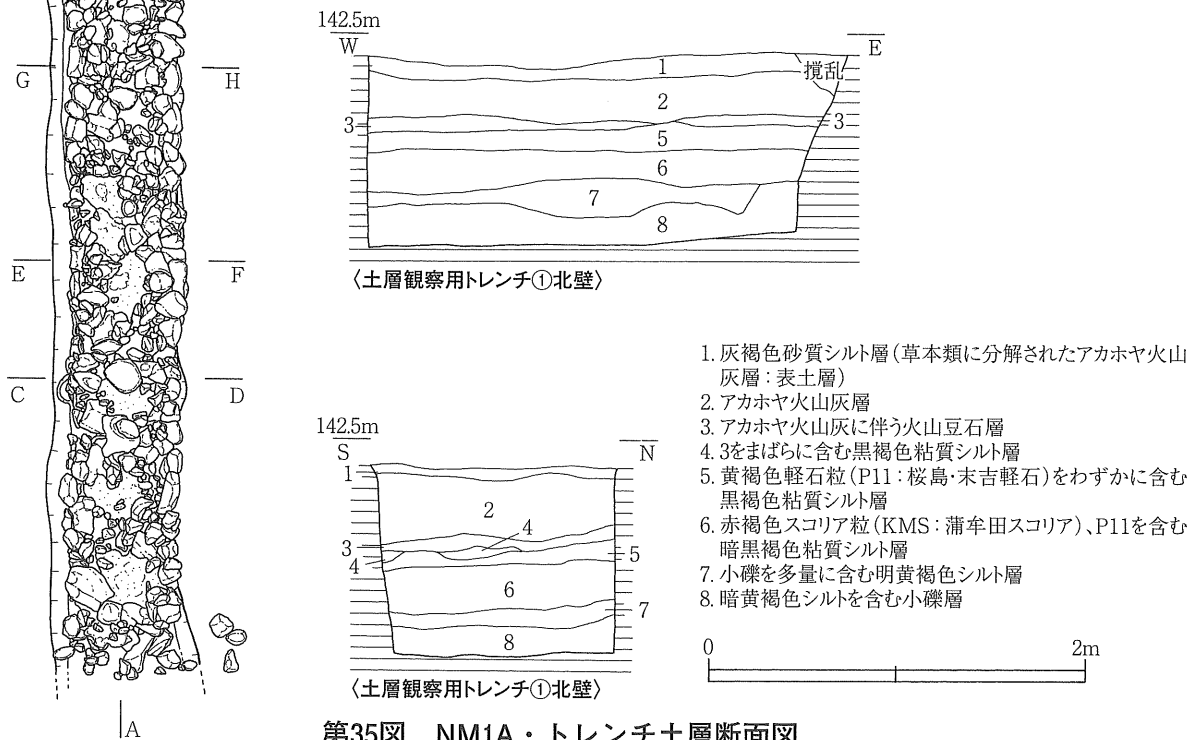


第33図 中町遺跡・第1次調査A地区 (NM1A) 遺構分布図



※埋土は、いずれも軽石片を多量に含む御池降下軽石粒・アカホヤ火山灰ブロック・漆黒色粘質シルトの混土層

第34図 NM1A・1号溝状遺構 (SD01) 実測図



1. 灰褐色砂質シルト層 (草本類に分解されたアカホヤ火山灰層：表土層)
2. アカホヤ火山灰層
3. アカホヤ火山灰に伴う火山豆石層
4. 3をまばらに含む黒褐色粘質シルト層
5. 黄褐色軽石粒 (P11：桜島・末吉軽石) をわずかに含む黒褐色粘質シルト層
6. 赤褐色スコリア粒 (KMS：蒲牟田スコリア)、P11を含む暗黒褐色粘質シルト層
7. 小礫を多量に含む明黄褐色シルト層
8. 暗黄褐色シルトを含む小礫層

第35図 NM1A・トレンチ土層断面図

なお、今回検出したいずれの遺構にも遺物が伴っていないため明確な時期比定はできないが、少なくとも近世以降に行われたとみられる削平工事以後の遺構であると思われる。

2) B地区 (NM1B)

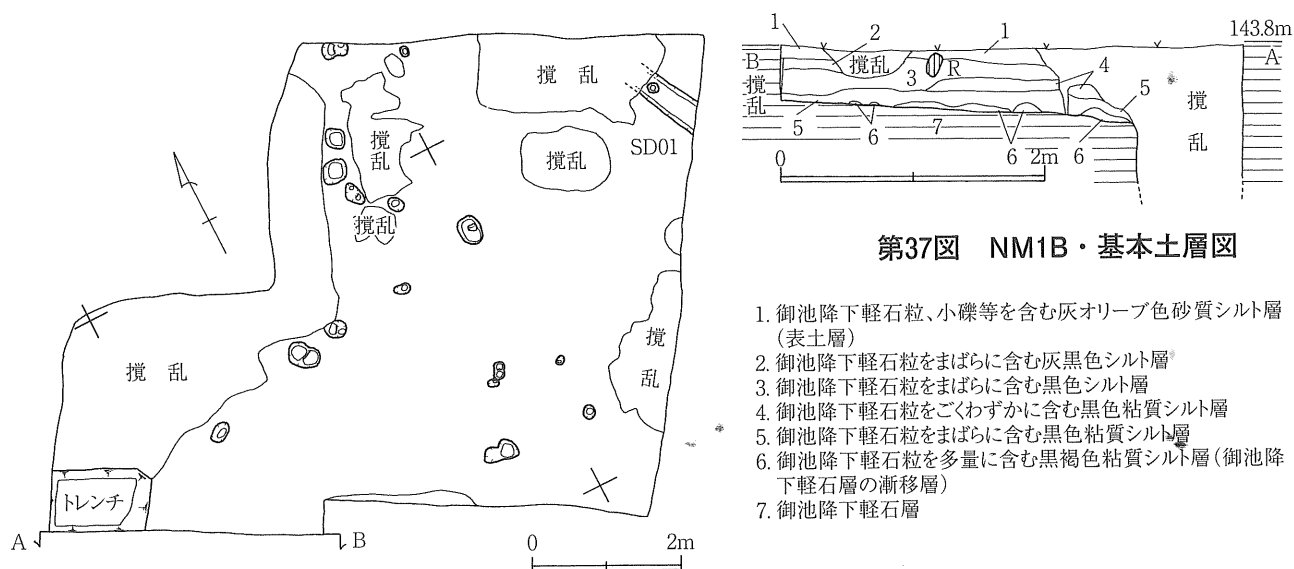
[第36図～第39図, 表 8・9, 図版 2]

当地区も店舗跡地約148㎡を調査対象としていたが、対象区西側は建物の基礎等に伴う攪乱が激しかったため、東側部分約44㎡のみを対象に平成8年11月6日から同年11月21日にかけて調査を実施している。当地点ではNM1Aでみられたアカホヤ火山灰層まで達する削平工事の痕跡は認められず、柳川原遺跡基本層序の第3層から第6b層に該当する御池降下軽石層から文明降下軽石層以下までの土層が良好な状態で残存していた。

御池降下軽石層漸移層を検出面とする今回の調査では、南東方向に走行する溝状遺構の一部と散在して分布するピット18箇所を検出している。SD01は調査区北東角で確認した幅員約0.8m、検出面からの深さ約0.15mを計る小溝で、御池降下軽石をまばらに含む黒色粘質シルトを主たる埋土とする。ピットは、御池降下軽石をわずかに含む灰黒色シルトを埋土とするもの（近世段階）と、SD01とほぼ同じ埋土をもつ中世段階の遺構に分けられるが、調査範囲が狭小であったため建物跡として確認できるものはなかった。なお、今回検出したいずれの遺構にも遺物が共伴していなかったため、細かな時期比定はできなかった。

遺物はいずれも包含層中出土のもので、概ね第37図で示した基本土層の2ないし3層に所属している。内容的には陶磁器類が主で、一部土製品も含まれているが、ほぼすべての遺物が近世に比定できよう。

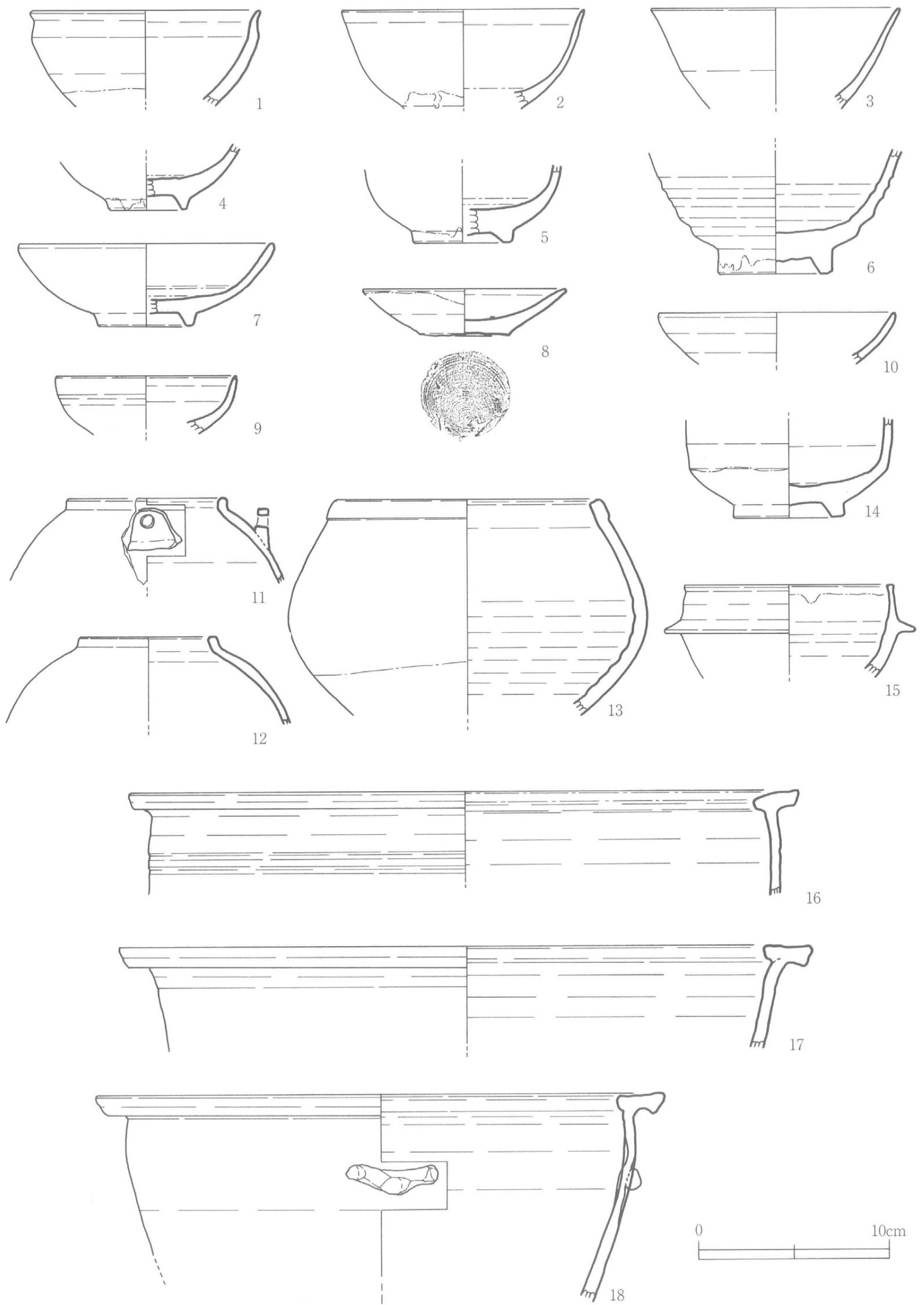
まず、陶器（1～20）については、他の調査地点と同様に薩摩系のものが主勢を占めている状況であった。唯一中世の遺物である1は天目碗で、外面体部下半は露胎である。高台部の形状は不明だが、器壁がやや肉厚であることから、14C末～15C初頭頃の瀬戸・美濃系と考えている。2～5は薩摩系陶器の碗である。いずれも内面見込は蛇ノ目釉剥ぎが施されていたとみられ、体部下半ないし高台部は露胎である。2には口縁から体部上半にかけて白化粧土がみられる。ロクロ痕が明瞭に残る6は鉢である。内面見込には砂目積痕が3ヶ所認められる。7～10は皿で、7・9は内面見込に蛇ノ目釉剥ぎが施されており、10は胎土・釉薬ともに磁器に近い雰囲気がある。高台の付かない8は底部の糸切り離し痕から、薩摩系では少数派の右回転の轆轤引きであることがわかる。また、内面にはパミス状の目積痕が残る。土瓶（11～13）はいずれも口唇部が釉剥ぎされており、13の胴部下半は露胎でススが付着している。14は内面が露胎で、二次的の火熱による黒変が認められる火入である。15は小ぶりの羽釜で、YG2Bでも同種のものがみられる。口唇部には砂目積痕が残り、露胎である罌部以下にはススの付着が認められる。甕（16・17）はともに口縁折り返しで、断面形は「T」字状を呈する。釉剥ぎされた口唇部には、ほぼ同じサイズ（1.5cm角）の胎土目積痕がみられる。18は胴部上位に刻目を有す



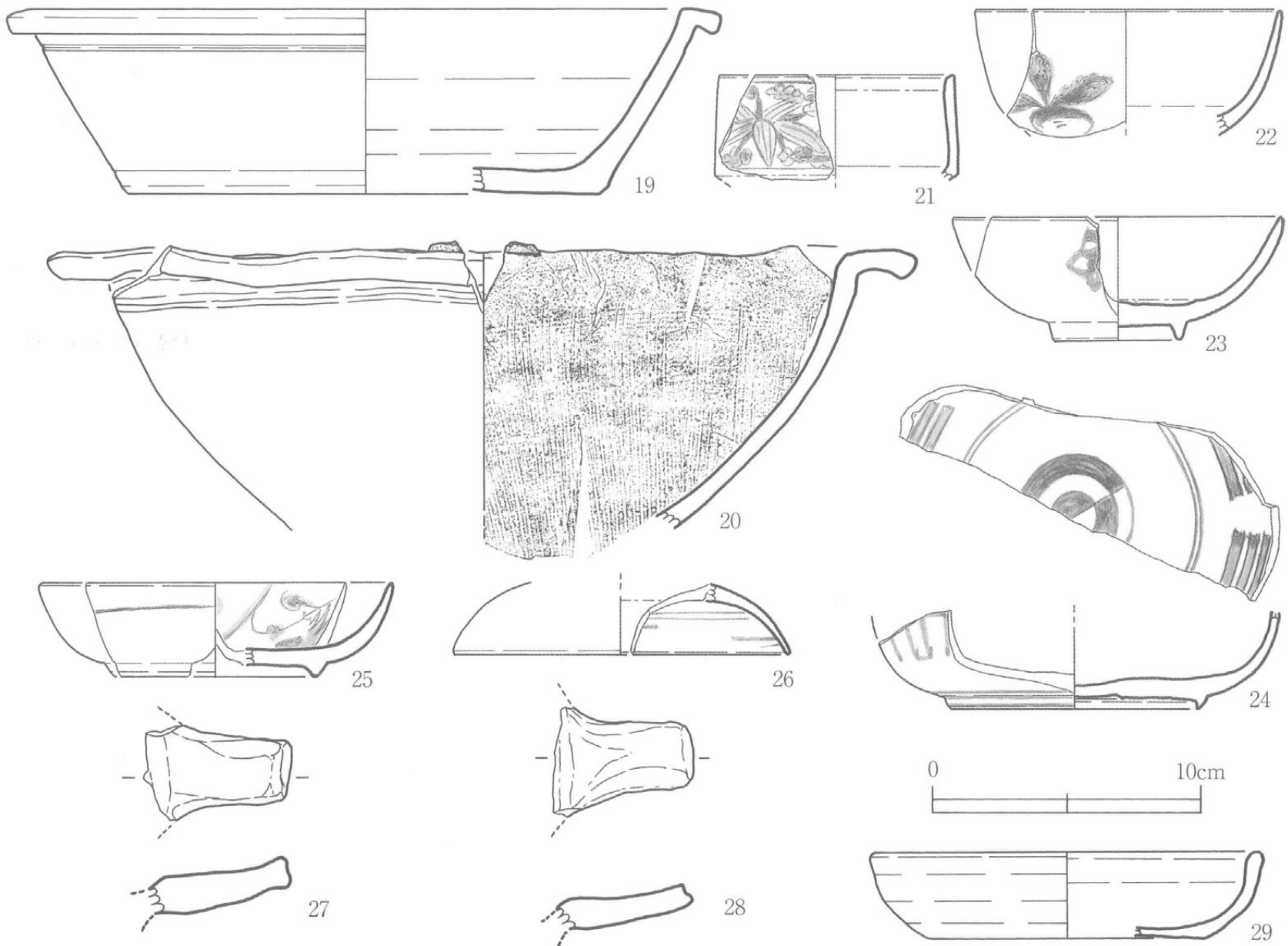
第37図 NM1B・基本土層図

1. 御池降下軽石粒、小礫等を含む灰オリーブ色砂質シルト層（表土層）
2. 御池降下軽石粒をまばらに含む灰黒色シルト層*
3. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色シルト層
4. 御池降下軽石粒をこくわずかに含む黒色粘質シルト層
5. 御池降下軽石粒をまばらに含む黒色粘質シルト層
6. 御池降下軽石粒を多量に含む黒褐色粘質シルト層（御池降下軽石層の漸移層）
7. 御池降下軽石層

第36図 中町遺跡・第1次調査B地区 (NM1B) 遺構分布図



第38図 NM1B・出土遺物実測図①



第39図 NM1B・出土遺物実測図②

るリボン状突帯が貼り付けられた深めの鉢、19は盤状の浅鉢である。ともに口唇部は重ね焼きを目的とする釉剥ぎが施されている。20は1単位8条の挿目を有する挿鉢で、口唇部には1.5~1.8cm角の胎土目積痕がみられる。なお、重ね焼きの際に受けた別個体の重みによって、口縁部は波状に歪んでいる。これら薩摩系陶器類については、他の調査地点出土遺物と同様に18C後半から19C代（幕末頃までか？）の所産と考えている。

磁器類（21~26）には、鉢・碗・皿・碗蓋がある。いずれも波佐見焼を含む肥前系磁器とみられるが、薩摩系磁器が含まれる可能性も否めない。体部屈曲部下位が露胎の21は、いわゆる段重で、内面口縁部は蓋とともに重ね焼きするために釉剥ぎされている。22・23はともに肥前系の丸形碗で、やや器高が低い23は内面見込を蛇ノ目釉剥ぎした後、アルミナ状のものを塗布している。22の外面には野菜文、23には五弁花状のスタンプが施されている。24は蛇ノ目凹形高台の深皿で、見込には算木文、外面には源氏香文がみられる。25は内外器面とも唐草文が施された五寸皿である。26は碗蓋で、内面天井部には釉剥ぎが施されている。これらも陶器と同様に18C後半から19C初頭ないし前半までの幅に収まると考えている。

27~29は焙烙の把手及び皿部である。茶や豆類等の焙煎に用いられたとみられ、当遺跡群はもとより市内の近世集落では普遍的にみられる遺物である。

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種別	器種	色調		調整		胎土	特徴・備考
					外	内	外	内		
1	一括	基本 土層2	陶器	碗	黒褐	黒褐	ロクロN	ロクロN	混入物なし	④体部下半:露胎 天目碗 瀬戸・美濃系もしくは唐津?
2	〃	〃	〃	〃	黄褐	黄褐	〃	〃	⑤微・少	④口縁~④体部上半:白化粧土 ④体部下半:露胎
3	〃	〃	〃	〃	褐	褐	〃	〃	〃	
4	〃	〃	〃	〃	暗赤褐	暗赤褐 ~暗灰黄	〃	〃	混入物なし	④見込:蛇ノ目釉剥ぎ 高台部以下:露胎
5	〃	〃	〃	〃	褐	褐	〃	〃	〃	④見込:蛇ノ目釉剥ぎ 高台部以下:露胎
6	〃	〃	〃	鉢?	暗赤褐 ~明褐	暗赤褐 ~明褐	〃	〃	⑤微・少	高台部以下:露胎 高台内:兜巾状 ④見込:砂目 積痕3ヶ所(本来は4ヶ所?) ④④体部:ロクロ痕明 瞭④見込~④体部上半:白化粧土
7	〃	〃	〃	皿	黄灰	黄灰	〃	〃	〃	④見込:蛇ノ目釉剥ぎ 高台内:兜巾状 高台畳付:露胎

表8 NM1B・出土遺物観察表①

挿図 番号	出土 地区	遺構 層位	種 別	器種	色 調		調 整		胎 土	特 徴・備 考
					外	内	外	内		
8	一括	基本 土層 3	陶器	皿	にぶい橙 ～褐	褐	ロクロN	ロクロN	㊸微・少	㊸体部下 半:露胎 ㊸見込:ミ ス状の目積痕 底部:糸切り離 し(ロクロ右回 転)
9	〃	基本 土層 2	〃	〃	灰白	灰白	〃	〃	混入物なし	㊸見込:蛇ノ目 釉剥ぎ
10	〃	基本 土層 3	〃	〃	明オリーブ 灰	明オリーブ 灰	〃	〃	〃	磁器質に近い
11	〃	基本 土層 2	〃	土瓶	にぶい黄褐	にぶい黄褐	〃 H明瞭	〃	㊸㊸微・少	口唇:露胎
12	〃	〃	〃	〃	にぶい赤褐	にぶい赤褐	〃	〃	〃	口唇～㊸口縁: 露胎 ㊸体部:透明釉 上に自然釉か かる
13	〃	〃	〃	〃	暗オリーブ 褐 ～黒	オリーブ黒	〃 H明瞭	〃	〃	口唇:露胎 ㊸体 部下 半:露胎,スス 付着 ㊸体部: ロクロ痕明瞭
14	〃	〃	〃	火入	黒～浅黄 橙	にぶい橙	ロクロN	〃	㊸微・微	㊸体部下 半:㊸露胎 高 台内:兜巾状 ㊸見込: 二次被熱に よる黒変
15	〃	〃	〃	羽釜	オリーブ 黄 ～黒	灰赤	〃	〃	㊸微・微	㊸口縁以下: 露胎 口唇: 砂目積痕あり 鋸部以下: 露胎,スス付 着
16	〃	〃	〃	甕	オリーブ 黒	黒褐	〃	〃	㊸㊸微・少	口唇:釉剥ぎ, 1.5cm角の胎 土目積痕あり 口縁:折返し 口縁
17	〃	〃	〃	〃	暗オリーブ 灰	暗オリーブ 灰	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ, 1.5cm角の胎 土目積痕あり 口縁:折返し 口縁
18	〃	基本 土層 3	〃	鉢	黒褐	灰オリーブ	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ ㊸体部上位: 刻目を有する リボン状突帯 あり
19	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	口唇:釉剥ぎ
20	〃	〃	〃	播鉢	〃	暗赤褐	〃	〃	〃	㊸口縁～口唇: 釉剥ぎ ㊸8 条1単位の播 目 口唇:1.5～ 1.8cm角の胎 土目積痕あり
21	〃	基本 土層 2	磁器(染付)	段重	灰白	灰白	〃	〃	精良 混入物なし	筒形碗 ㊸屈 曲部以下・㊸ 口縁:釉剥ぎ ㊸「笹文」肥 前系?
22	〃	基本 土層 3	〃(〃)	碗	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	〃	㊸:「野菜文」 ? 肥前系?
23	〃	〃	〃(〃)	皿	オリーブ色 を帯びた灰 白	オリーブ色 を帯びた灰 白	〃	〃	〃	㊸:「五弁花 文」? 高台 疊付:露胎 ㊸口縁:蛇ノ 目釉剥ぎ, アルミナ状の 熔着物あり
24	〃	基本 土層 2	〃(〃)	〃	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	〃	底部:蛇ノ目 凹形高台,高 台内に砂目状 の熔着痕あり ㊸見込: 「算本文」 ㊸ :「源氏香文」 肥前系?
25	〃	〃	〃(〃)	〃	オリーブ色 を帯びた灰 白	オリーブ色 を帯びた灰 白	〃	〃	〃	高台疊付: 露胎 ㊸㊸:「唐草 文」?
26	〃	基本 土層 3	〃(〃)	蓋	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	〃	㊸天井部: 釉剥ぎ?
27	〃	基本 土層 2	土製品	焙烙 把手	にぶい黄橙 ～浅黄橙	にぶい黄橙 ～浅黄橙	手捏ね	手捏ね	㊸微・微	両面に指頭痕 あり
28	〃	〃	〃	〃	灰白～橙	灰白～橙	〃	〃	〃	両面に指頭痕 あり
29	〃	〃	〃	〃	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ロクロN	ロクロN	〃	㊸:部分的に 黒変

表9 NM1B・出土遺物観察表②

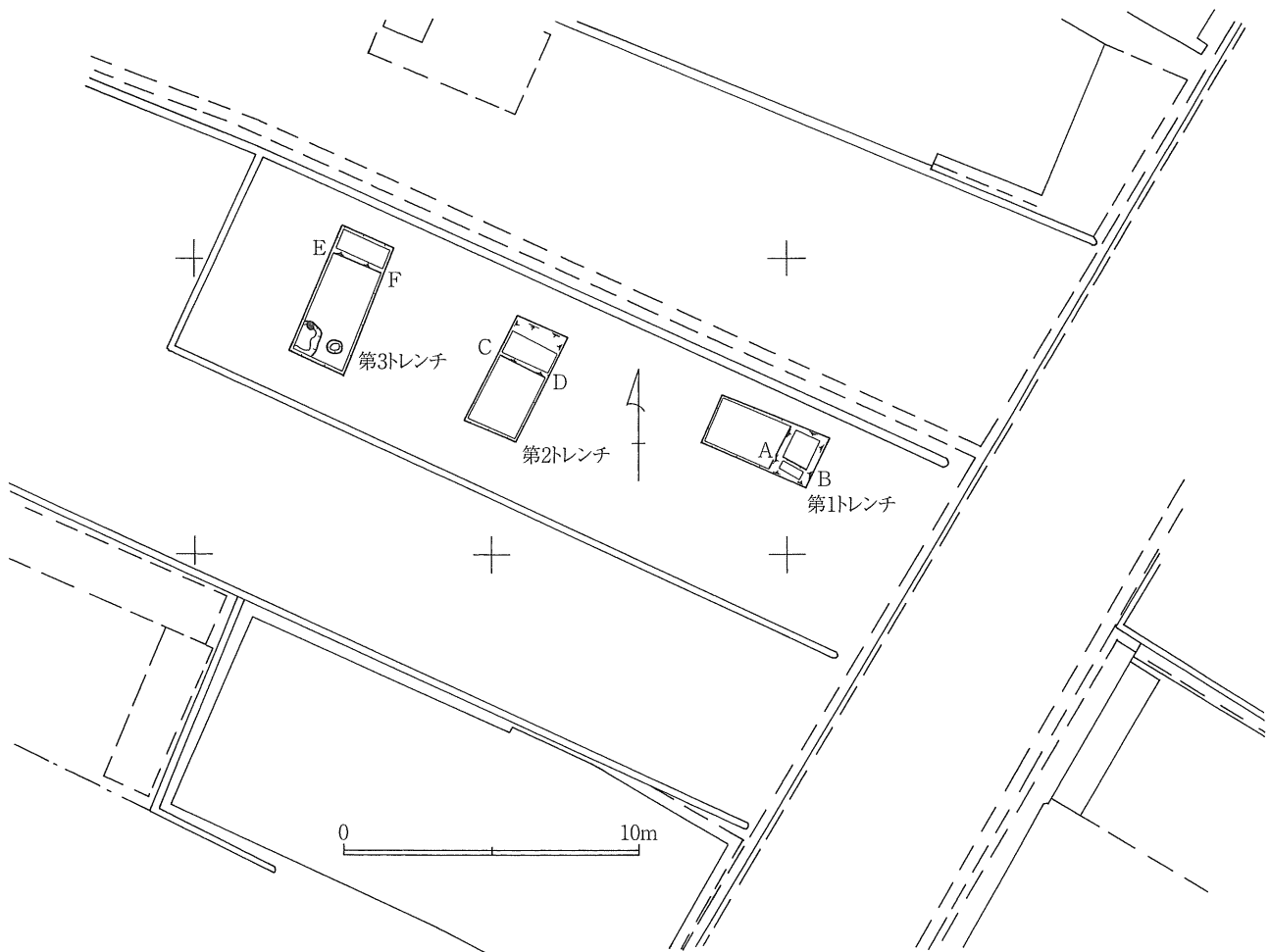
7. 中町遺跡・第2次調査

第2次調査は、母事業との兼ね合いで期間の確保が困難であったことと、第1次調査の成果より区画整理の影響が考えられる御池降下軽石層上位の遺構面がすでに削平を受けて消失している可能性が高いと予想されたことから、基本的には現状保存されるアカホヤ火山灰層以下の状況把握を目的に、トレンチ法を用いて調査を行っている。なお、今回の総調査面積は95㎡である。

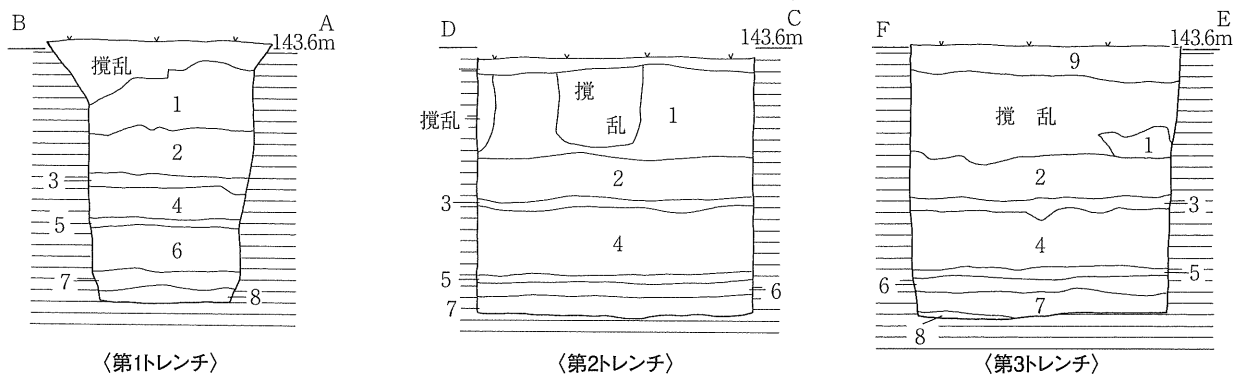
1) A地区 (NM2A)

[第40図～第42図, 表10, 図版2]

平成9年9月24・25日に実施した当地区の調査では、トレンチを3ヶ所設定してアカホヤ火山灰層以下の状況を中心に確認作業を行っている。その結果、すべてのトレンチで表土直下に遺存する御池降下軽石層を確認することができたが、調査着手前まで集合住宅が所在していた関係でかなりの深さまで攪乱が及んでおり、いずれのトレンチで検出した御池降下軽石層もすでに上面が削平を受けた状態であった。ただし、削平を受けて



第40図 中町遺跡・第2次調査A地区 (NM2A) トレンチ配置図

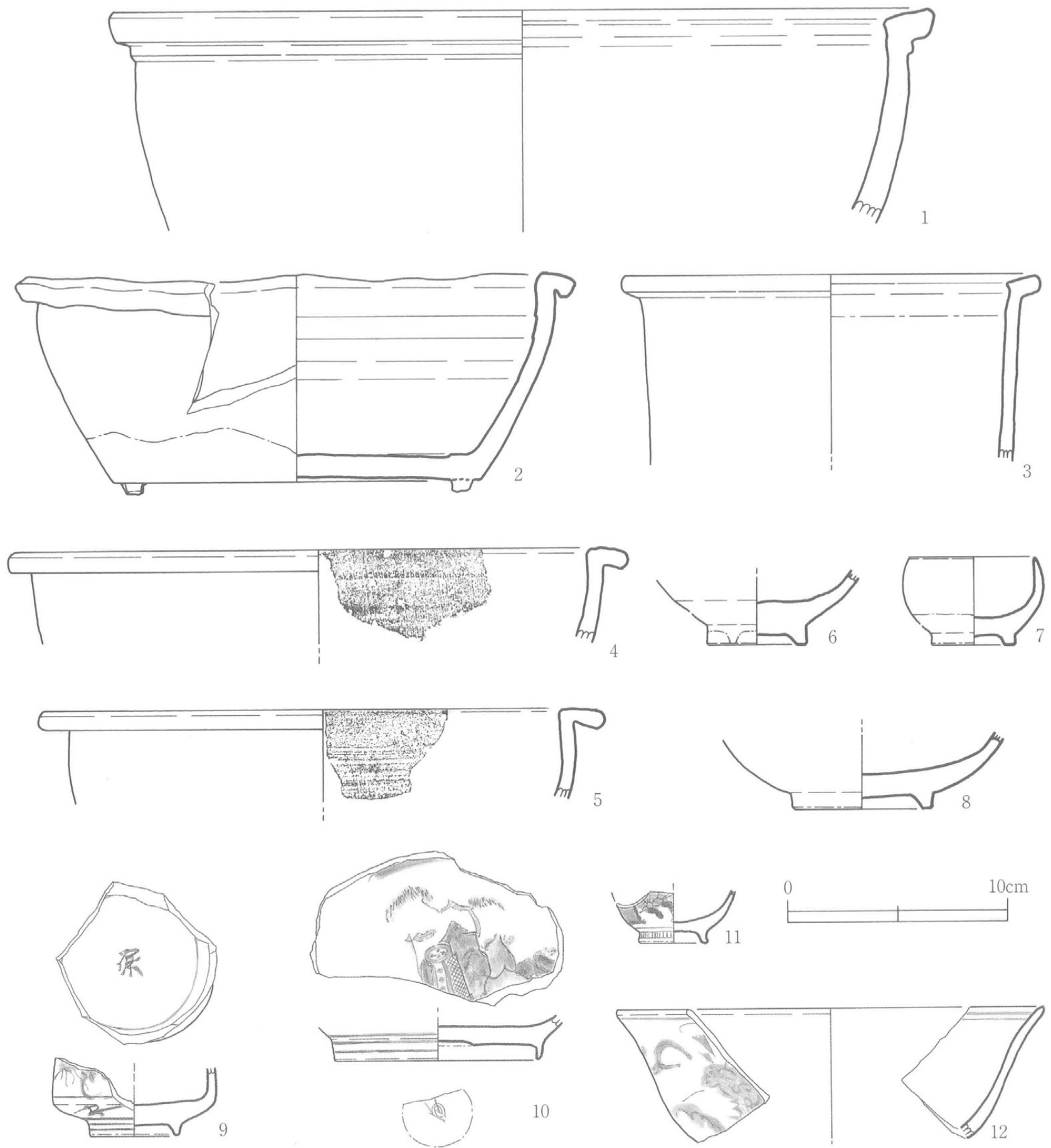


1. 御池降下軽石層 2. 漆黒色粘質シルト層 3. アカホヤ火山灰漸移層 4. アカホヤ火山灰
5. アカホヤ火山灰に伴う火山豆石層 6. 暗黒褐色粘質シルト層 7. KMS(蒲牟田スコリア)をまばらに、P11(桜島・末吉軽石)を多量に含む暗黒褐色粘質シルト層(P11は、とくに下位に集中)
8. KMS、P11をまんべんなく含む暗黄褐色シルト層 9. シラス、御池降下軽石粒を多量に含む灰褐色砂質シルト層(盛土層)

第41図 NM2A・トレンチ土層断面図

基部のみとなっていたが、第3トレンチの南側では土坑状のわずかな落ち込みとピットが検出されており、埋土の状況やその上位の表土層等に混入していた陶磁器類より、近世末から近代にかけての時期の遺構であると考えている。なお、基本層序の第3層以下については、攪乱及び造成工事等の影響もなくプライマリーな状態で残存していたが、縄文時代早期の遺物包含層となる第6層及び第7層において、とくに明確な遺構や当該期遺物の出土はなかった。

当地区では、各トレンチの表土ないし攪乱層に混入して十数点の陶磁器が出土している。遺構や包含層に伴うものではないが、大半が近世(18C後半~19C代)の遺物と考えられることから、他の調査区から出土した



第42図 NM2A・出土遺物実測図

資料との比較という意味合いで、図化可能なものを掲載している。

陶器(1~8)は他の地区と同様に薩摩系が主流であるが、一部地焼が含まれている可能性も残る。1は「L」字状に外反させた口縁の直下に段を有するやや深めの鉢で、口唇部には貝目状の目積痕がある。2も口縁が外反する盤状の鉢で、口唇部には胎土目積痕、底部には1.5cm角ほどの胎土目が熔着している。3は外面に白化粧土が施された植木鉢とみられ、近代のものと考えている。搦鉢(4・5)は口縁を折り返して「L」字状に外反させるタイプで、単位が確認できた4の搦目は1単位7条である。6は内外面に白化粧土が施された碗で、蛇ノ目釉剥ぎが施された内面見込には、焼成の際に熔着して剥離した別個体の高台部が残っている。7も白化粧土のかかった小杯で、高台畳付のみが露胎である。また、高台内には兜巾状の削り出しが認められる。8は皿で、内面見込に三足ハマの脚部の痕跡が残る。

磁器（9～12）は染付のみであり、いずれも肥前系と考えているが、11だけは釉薬の雰囲気が他と異なっている。年代的には多少の時期幅が想定されるが、概ね18C後半から19C初頭ないし前半までの範囲内に収まると考えられる。9は筒形碗で、外面体部に雪持笹文、屈曲部下に折松葉文が描かれているほか、内面見込には虫文が認められる。10は蛇ノ目凹形高台の深皿で、内面には山水文がみられる。また、高台内中央には形の崩れた渦福が入る。11は体部に梅樹文、高台部に格子文がみられる小杯である。高台部の端部がやや外側に張り出した作りであり、透明釉も他の遺物に比べて青みが弱い。12は口縁端反の鉢とみられる。外面には雪輪文、内面口縁部には二条圏線が認められる。

挿図番号	出土地区	遺構層位	種別	器種	色調		調整		胎土	特徴・備考
					外	内	外	内		
1	一括	2T 表土	陶器	鉢?	灰赤～黒褐	にぶい黄橙 ～暗褐	ロクロN	ロクロN	㊸微・少	口唇:貝目積痕?あり
2	〃	3T 〃	〃	〃	〃	黒褐	〃 H明瞭	〃 H明瞭	㊸㊹微・並	口唇:露胎,1.5×0.8cmの胎土目積痕あり ㊸体部下半:露胎 底部:露胎,1.5～0.8×1.5cmの胎土目積痕あり
3	〃	2T 〃	〃	〃?	灰白	灰白～赤褐	ロクロN	ロクロN	㊸微・微	㊸口縁以下:露胎 ㊸体部～㊸口縁:白化粧土
4	〃	〃 〃	〃	播鉢	黒褐～灰赤	にぶい褐	〃	〃	㊸㊹微・少	㊸:7条1単位の播目 全体的に雑な釉薬のかかり方
5	〃	3T 〃	〃	〃	オリーブ褐	暗灰黄	〃	〃	㊸㊹微・少	口唇:釉剥ぎ
6	〃	1T 〃	〃	碗	にぶい黄褐 ～灰白	灰白	〃	〃	㊸微・少	高台部以下:露胎 ㊸㊹体部上半:白化粧土 ㊸見込:蛇ノ目釉剥ぎ,別個体の高台部が剥離して 熔着
7	〃	〃 〃	〃	小杯	淡黄～褐	淡黄	〃	〃	㊸微・微	㊸㊹体部上半:白化粧土 高台内:兜巾状 高台量付:露胎
8	〃	〃 〃	〃	皿	褐灰	褐灰	〃	〃	〃	㊸見込:三足ハマの痕跡あり 高台量付以下:露胎
9	〃	3T 〃	磁器(染付)	碗	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	精良 混入物なし	筒形碗 高台量付:露胎 ㊸見込:虫文 ㊸体部:「雪持笹文」 ㊸屈曲部下位:「折松葉文」 肥前系か?
10	〃	1T 〃	〃(〃)	皿	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	〃	底部:蛇ノ目凹形高台 高台内:崩れた「渦福」 ㊸:「山水文」? 肥前系か?
11	〃	3T 〃	〃(〃)	小杯	灰白	灰白	〃	〃	〃	高台量付:露胎 ㊸:「梅樹文」?,「格子文」
12	〃	表採	〃	鉢	やや青みを 帯びた灰白	やや青みを 帯びた灰白	〃	〃	〃	㊸体部:「雪輪文」 肥前系か?

表10 NM2A・出土遺物観察表

2) B地区 (NM2B)

[第43図～第46図, 図版2]

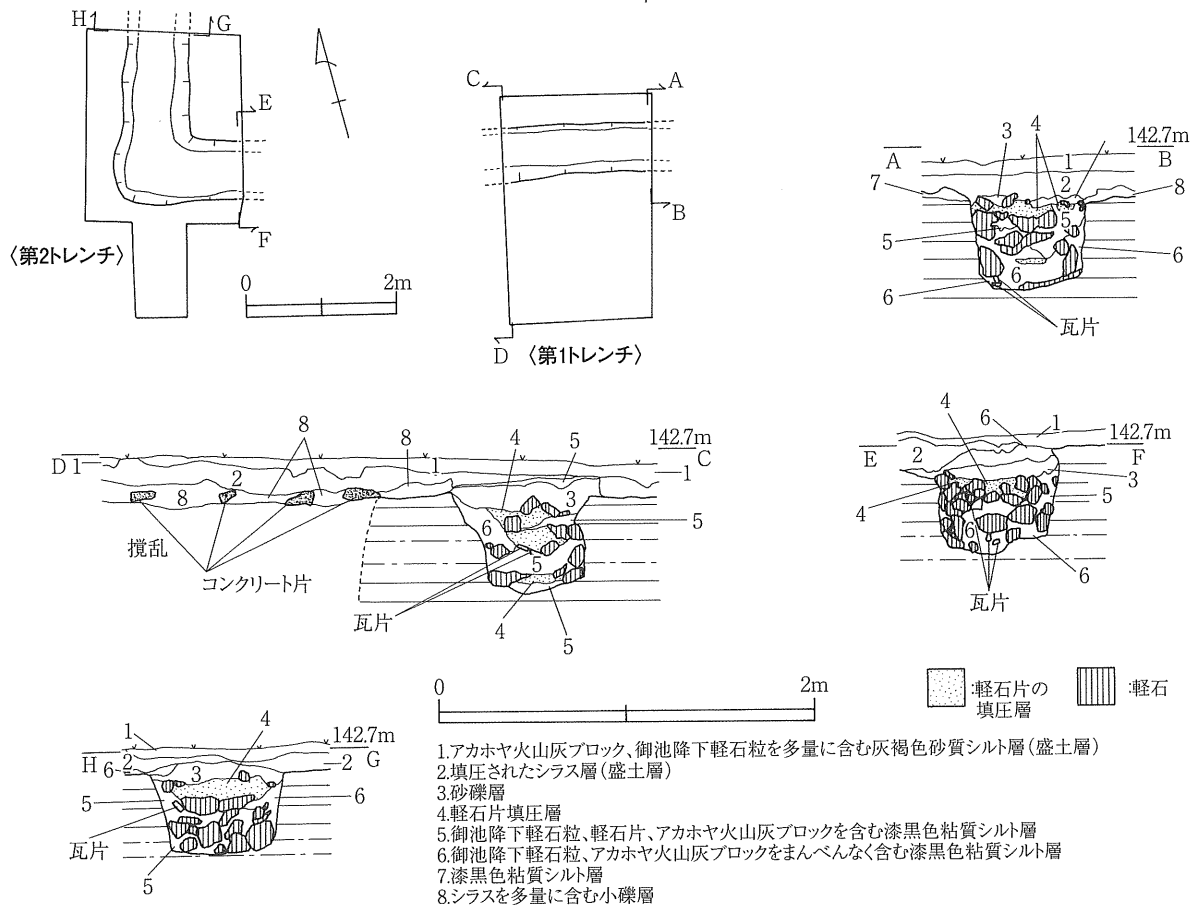
店舗跡地で、区画整理後は駐車場予定地となっている当地区では、平成9年9月25日から同27日にかけて調査を実施している。当地点では御池降下軽石層より上位はすでに削平を受けており、検出面としたアカホヤ火山灰層も建物の基礎工事や解体工事による攪乱の影響を少なからず受けている状況であった。そのため、当初は事業の直接的な影響を受けないアカホヤ火山灰層以下の遺跡確認を目的に調査を開始したが、第1トレンチでNM1AのSD01に連結するとみられる溝状遺構（SD01）が確認されたことから、最終的に7ヶ所のトレンチを設定し、その走行方向の確認を試みている。また、アカホヤ火山灰層以下まで掘り下げた2トレンチのうち、第4トレンチでは第6層から第7層にかけて分布する散石遺構（SS01）と土坑（SC01）が検出されており、縄文時代早期の遺跡が遺存していることが明らかになった。

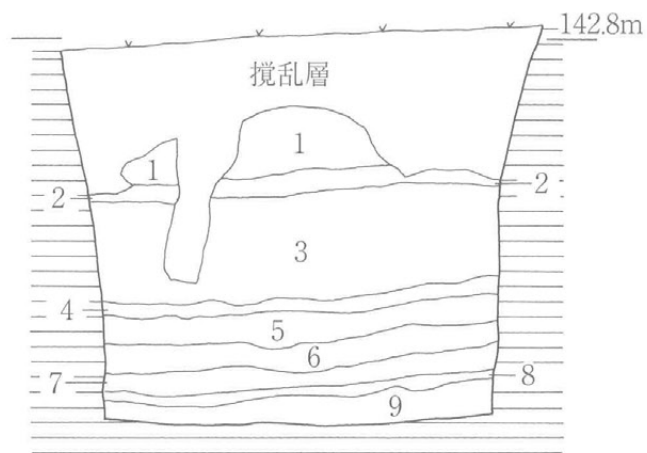
まず、第1・2トレンチで検出したSD01は、NM1A側から西走し、第2トレンチ内で北折する溝状遺構である。幅員は約0.7～0.8m、検出面とした漆黒色粘質シルト層下部ないしアカホヤ火山灰層からの深さは約40～50cmを計る。床面から上層にかけて認められる多量の軽石や、それらの間に堆積した埋土がNM1AのSD01とほぼ同じであることから同一の溝状遺構であると考えられるが、当調査区のSD01では、最上層と中層部において恒常的な填圧を受けることによって凝灰岩状に固着したとみられる軽石層が面的に確認されており、この遺構の機能の一つに想定している通路的な役割を肯定する上で有用な資料と考えている。なお、今回もこの遺構に伴う遺物は確認されていないため、その構築時期については不明である。

アカホヤ火山灰層以下まで掘り下げ作業を行った第3・4トレンチでは、かなりの攪乱を受けていたものの、基本層序の第3層以下の堆積が確認されており、このうち第4トレンチでは基本層序の第6層下部から第7層中位にかけて分布するSS01と、第7層に掘り込まれた楕円状の平面形を呈すとみられるSC01を検出している。第6層下部で2～4cm大の小礫群として確認したSS01は、第7層中やSC01の埋土中では拳大以上の礫が中心



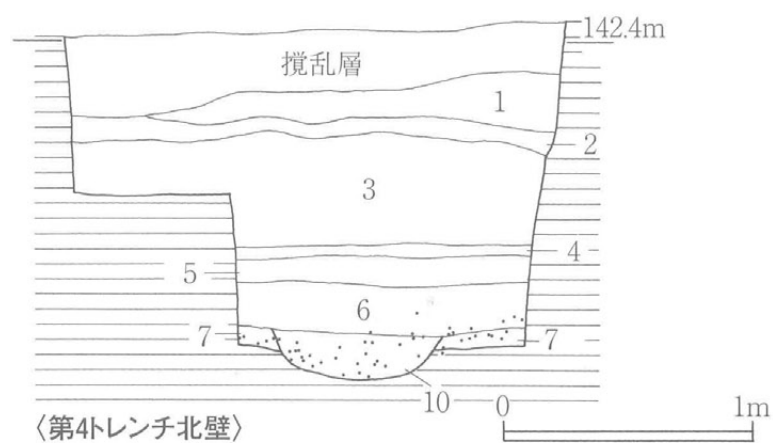
第43図 中町遺跡・第2次調査B地区 (NM2B) トレンチ配置図



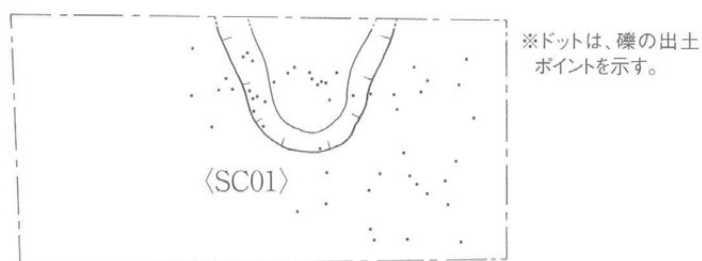


〈第3トレンチ東壁〉

1. 漆黒色粘質シルト層
2. アカホヤ火山灰漸移層
3. アカホヤ火山灰層
4. アカホヤ火山灰に伴う火山豆石層
5. 暗黒褐色粘質シルト層
6. KMS(蒲牟田スコリア)をまばらに、P11(桜島・末吉軽石)を多量に含む暗黒褐色粘質シルト層 (P11は、とくに下位に集中)
7. KMS、P11をまんべんなく含む暗黄褐色シルト層
8. 暗黄褐色シルト層
9. 小礫をまばらに含む明黄褐色粘質土層
10. 7と9の混土層

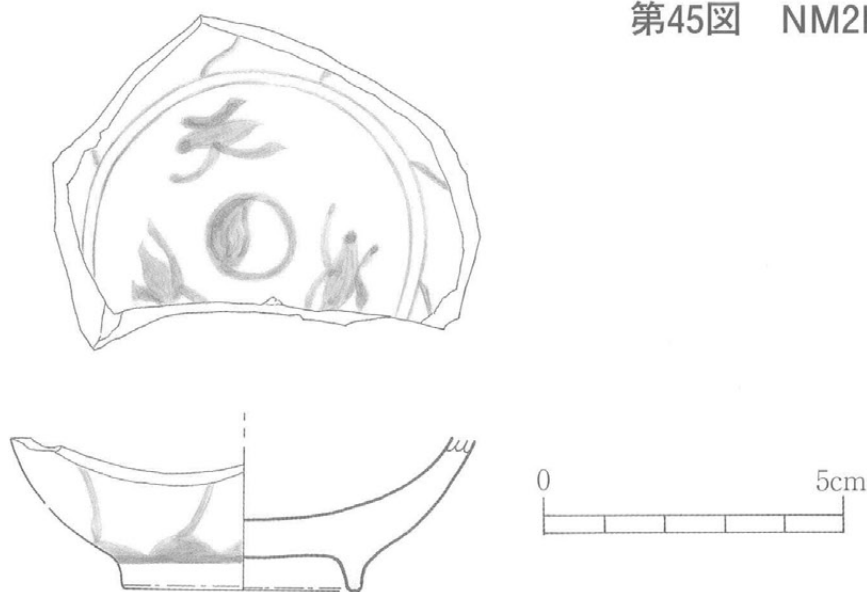


〈第4トレンチ北壁〉



第45図 NM2B・トレンチ土層断面図及び礫群(SS01)分布図

となり、その中の一部には火熱を受けて赤変、あるいは破碎しているものが見受けられたが、下部に配石を伴っておらず、集石遺構ほどのまとまりも欠くことから、ここでは縄文時代早期の散石遺構と捉えるにとどまった。また、約0.2m程度の深さを有し、埋土の床面から上層にかけて礫の分布が認められるSC01には、遺物や炭化物、焼土等は伴っていなかったが、平面分布では概ねその外側に散石状の小礫群、埋土中第46図NM2B・出土遺物実測図に拳大の礫群が認められることから、SS01に伴う遺構であった可能性が高いと推測している。



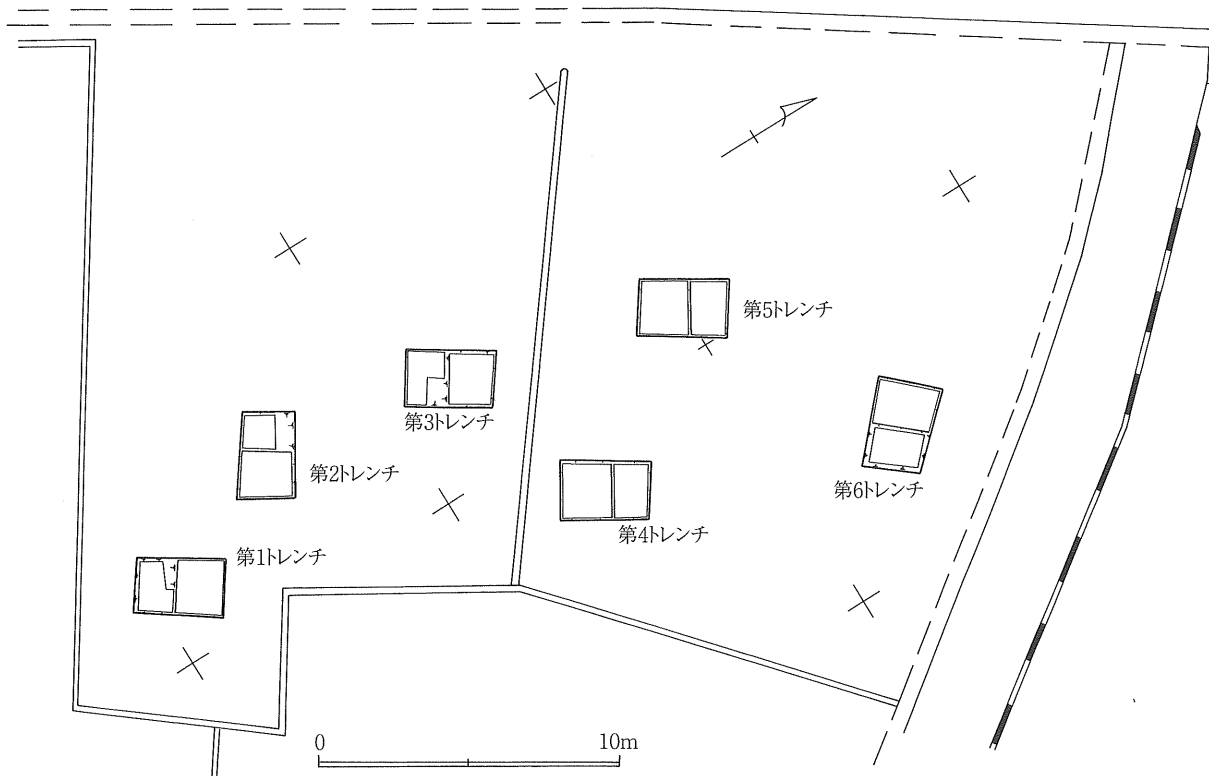
第46図 NM2B・出土遺物実測図

これまで当市内で確認された縄文時代早期の遺構はいずれもシラス台地上での検出事例であり、沖積地における出土は今回が初例となった。地形的にみると、御池軽石の降下中も離水していなかったとみられる柳川原遺跡と当調査地点とでは比高差約2mを計り、早期の段階にはすでに離水していた可能性が高いと考えられることから、今後当該期の生活圏を考える上では、こうした沖積地も視野に入れながら検討を進める必要がある。なお、今回の調査では第6トレンチより磁器碗が1点出土したのみであるが、内外面の染付文様(内面:蝶文、外面:捻り文)や高台部のつくりから、19C前半頃の薩摩系磁器の可能性を考えている。

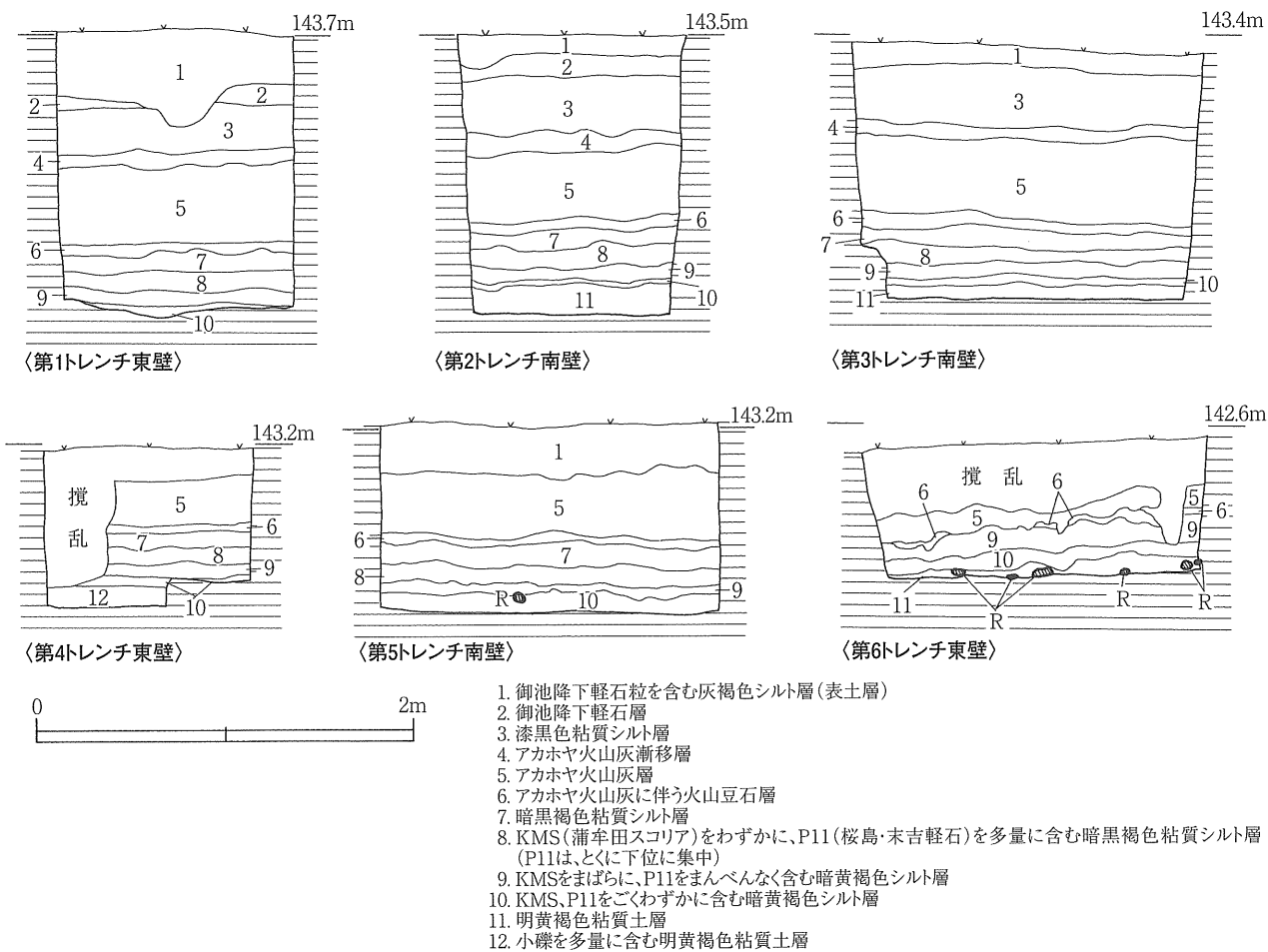
3) C地区 (NM2C)

[第47図～第49図, 図版2]

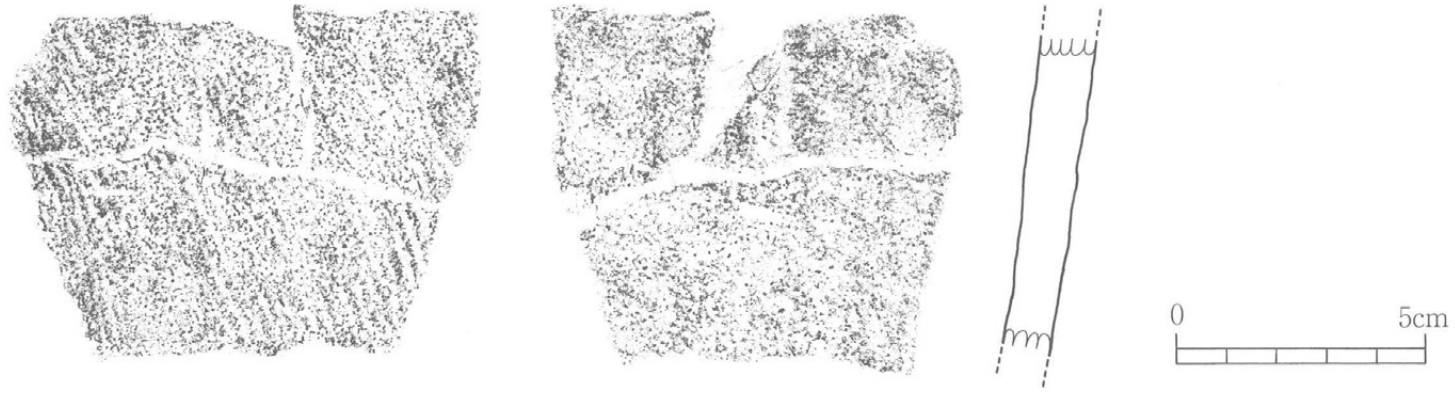
市道の拡幅と店舗建設が予定されている当地区では、平成9年9月27日から同30日にかけて調査を実施している。当地区でも市道沿いの西側部分(拡幅予定地)は掘削を伴う攪乱を受けていたほか、第1～3トレンチでは基本土層の第2層ないし第3層まで、第4～6トレンチでは第5層まで至る削平の痕跡が認められたことから、今回設定した6ヶ所のトレンチでは基本的に第5層以下の状況を確認する目的で調査を進めている。当地区の旧地形は、各トレンチで検出したアカホヤ火山灰層の下位レベルで比較すると、南側がほぼ平坦で、北側は年見川に向けて徐々に傾斜している様子が窺え、第1トレンチと第6トレンチの間では比高差約0.6mを計る。今回の調査では、こうした地形上の高低差を問わず、すべてのトレンチにおいて第6～9層中に分布する礫群を確認したほか、第4トレンチの第9層中からは数点の土器片を検出している。まず、礫群については、南側に設定したトレンチでは概ね小礫群が中心で、北寄りになるにつれ大型礫が分布する傾向が指摘できるほ



第47図 中町遺跡・第2次調査C地区 (NM2C) トレンチ配置図



第48図 NM2C・トレンチ土層断面図



第49図 NM2C・出土遺物実測図

か、層位的には第6層から第7層（P11集積層周辺）に3～5cm大の小礫が集中し、第8・9層では火熱を受けて赤変、破碎したものを含む15～30cm大の礫が散在する様相が看取される。これは、NM2Bで認められた傾向と基本的に合致しており、NM2A・B両地区が立地している年見川流域の低地面に面した緩傾斜地一帯において、こうした当該期遺構群の広がりを示唆する上で有用な検出事例となった。なお、これらの遺構に伴うものとしては唯一の遺物である第4トレンチ出土の土器は、かなり磨耗しているものの内器面は丁寧なナデ、外器面には斜方向の貝殻条痕文が施された胴部片で、やや外反しながらストレートに立ち上がる円筒形土器であると考えている。

V. 小 結

今回の中央東部地区遺跡群における発掘調査は、母事業との兼ね合いで期間・対象区域ともに限られた中での調査であったため、遺跡の全体像を把握するという点では甚だ隔靴搔痒の感が否めない結果となっている。しかしながら、これまで遺跡の存在すら否定的であった中心市街地の一角でこうした資料の遺存が確認され、今後開発が進んだ地域においても埋蔵文化財の保護を念頭においた事業の実施が必要であることを印象付けられたという意味では、今回の調査も少なからず評価に値することかもしれない。また、検出された断片的資料の中から、今後都城盆地における各時代の歴史的様相を明らかにしていく上で検討課題となる新たな知見が得られたことも、成果の一つに挙げられよう。そこで、ここでは時代を追いながら当遺跡群の概観について触れ、あわせて今後の課題を整理してまとめにかえたいと思う。

まず、今回の調査によって、当遺跡群の上限は少なくとも縄文時代早期まで遡ることが明らかとなった。これまで都城市内で確認されている当該期の遺跡はいずれもシラス台地上に立地しており、想定される当時の生業形態からも、アカホヤ火山灰降下以前の生活圏はおのずとシラス台地周辺に限定して捉える傾向があった。しかし、今回NM2B・NM2Cにおいて当該期の散石や土器片が確認されたことで、今後は扇状地面を含む盆地底の低地部分においてもアカホヤ火山灰層以下の調査を積極的に進め、同時に自然科学分析等の導入によって当時の自然環境を復元的に捉えながら、この時期の生活圏や生業形態についての把握や検討を進めていくことが急務になってきたといえよう。

縄文時代前期以降については出土資料が皆無であり、わずかに遺物や遺構が散見される後・晩期についても明確な集落跡の存在を示唆できる資料がないことから、その位置付けは難しい。ただし、今回の調査の成果で少なくとも弥生時代後期以降には当該地一帯に集落が展開していたことが想定できるようになってきたことから、生産基盤（水田）として年見川流域の低地面や扇状地の開析谷等を利用していた集団の進出が縄文時代晩期以降のどの段階で図られたか、時期的な絞込みについては今後の調査の成果に期待したいと思う。

集落の展開を示唆する遺構が検出された弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての状況については、棟持ち型掘立柱建物（SB07）を含む弥生時代後期後半～終末期頃の掘立柱建物群が年見川沿いの低地面付近（YG1）に、花卉状住居（SA01）など古墳時代初頭～前期頃の遺構が低地面よりも上位の扇状地面端部付近（YG2A）に分布する傾向を指摘することができ、河川流域における集落占地の時期的変移を考察する上で興

味深い資料といえる。また、遺物についても限られた内容ではあったが、YG2AのSA01内出土遺物からは宮崎平野部や薩摩半島等との関係が想定される土器相が看取でき、近年丸谷地区遺跡群をはじめとする調査事例の増加の中で明らかになってきた都城盆地の当該期土器相や、これらが共伴している花卉状住居の位置付けを考える上で有用な資料を得ることができた。

今回調査を実施した年見川流域一帯は、古絵図等に拠る限り、江戸後期の段階でも町屋群の縁辺部に形成された水田地帯であった様子がうかがえ、元和年間以降に進んだ近世町屋群の成立過程の中でも、地理的要因等によって町屋としての開発が進まなかった地域である、というのが従来の捉え方であった。しかし、今回の柳川原遺跡の調査で、密度的には疎らであるものの古代末～中世の遺構・遺物が確認され、断続的に生活空間として利用されていたことが明らかになってきたことで、今後は今回調査を行った一帯が城下町的都市基盤の整備を進める上で何らかの意図をもって開発されなかった地域であるということも、選択肢の一つに挙げていく必要性が生じてきたといえる。また、一方でYG2Aにおいて検出された硬化面を伴う溝状遺構（SD01-2）のように、近世の町割小路と類似した軌跡を辿る中世遺構が、少なくとも中世後半の段階（文明軽石降下前後の時期）には構築されていたという事実は、基本的に元和年間で初現期とされる近世町屋群の整備に先立って、その基層となる町並がすでに存在していた可能性を強く印象付けたといえよう。

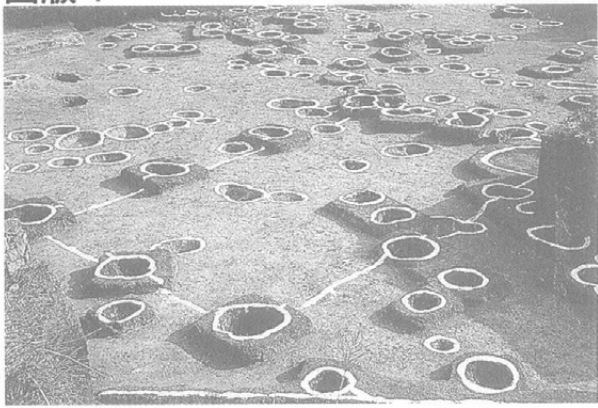
当初最も多くの成果が期待された近世段階の遺構については、その後の開発に伴う攪乱の影響が大きかったことや、調査区が町屋群の縁辺部中心であったことなどから、YG2Aで屋敷地の一部と見られる区画溝等を確認したにとどまっている。ただし、遺物については、ほぼ同時期の集落跡である久玉遺跡出土遺物よりもやや質の高い磁器類が散見されることや、窯跡の存在を示唆する窯道具の出土、町屋群の外縁に配置されていたという職人集団の存在を裏付ける鍛冶関連遺物など、いくつかの特筆すべき事項がある。

まず、今回出土した遺物の主勢を占めている近世陶磁器類は、主に肥前系磁器と薩摩系陶器に大別でき、年代が下がるにつれて磁器類よりも陶器類が割合的に卓越する傾向が見受けられる。これは中世から近世にかけての集落跡であり、面的な調査が進められてきた久玉遺跡においても指摘できる傾向であり、その背景として自藩製品の流通（殖産興業）を進めようとした薩摩藩の政策が大きく作用していたことが想像される。ただし、こうした大きな流れは概ね両遺跡で共通しているものの、移入品である肥前系磁器については、18C以降とくに農村的色彩が濃くなる久玉遺跡よりも質の高い製品が出土している印象が強く、戦国期からの譜代的町人や特殊な文化的技能を有する渡来系集団といった、経済的に優位な階層が集住していた当遺跡群の特性が強く反映されていると考えられる。

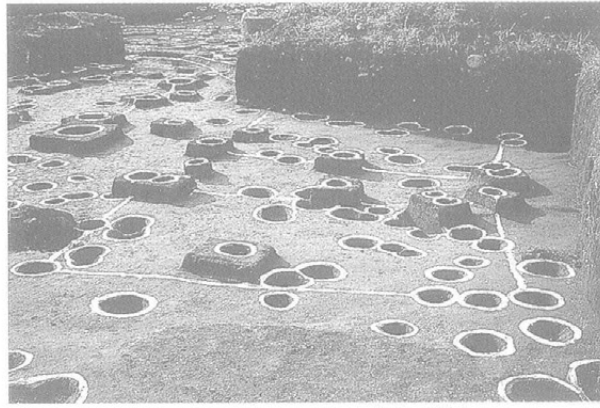
薩摩藩の私領地であった本市においても、18C後半頃には本藩同様都城島津家の庇護を受けて焼物所が開窯されており、官窯から民窯へと主体は移り変わりながらも、市内ではほぼ唯一の窯場として戦前まで操業していたことが伝えられている。しかし、実際に窯跡調査が実施されたことはなく、伝世されている製品についても不明確な点が多かったため、これまでその内容は全く未知の状態であったといえる。そういった意味では、今回初めてYG2B・YG3の両地区で窯道具（三足ハマ、トチン）が出土し、少なくとも当遺跡群周辺で窯業が営まれていたことを傍証できたことは、今後の窯跡調査に大きな示唆を与えたといえよう。また、従来は薩摩焼と総称し、一括して扱われてきた南九州産の近世陶器類についても、こうした地焼製品の解明が進むことによって再分類が進み、今回便宜的に用いた「薩摩系」陶器の細分化が図られることを期待したいと思う。

町屋群の東縁部にあたるYG2Aでは、近世の溝状遺構内から鞆の羽口がまとめて出土したことから、周辺に鍛冶関連施設が所在していた可能性を想定している。『都城市中央東部地区史跡・旧街路等調査報告書』の中で重永卓爾氏は、「新地移り」といわれる領主館造営に伴う近世町屋群の整備に際して、主要街道に面して配置された町人街（本町・唐人町）の外縁部には職人が置かれていたことを指摘しており、今回出土した遺物によって、そうした町人主体の商業地帯という側面に職能的機能も付与された都市構造の一端が改めて裏付けられたといえよう。

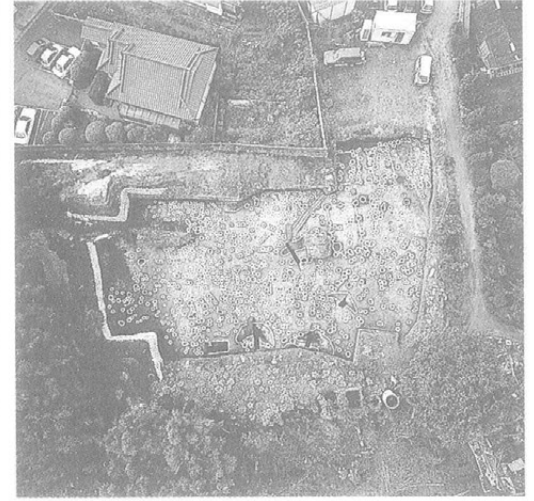
いずれにせよ、当遺跡群における発掘は緒についたばかりであり、今後の調査の進展の中で、ここに提示したいいくつかの検討課題が少しでも明らかになっていくことを期待するとともに、400年にも亘って活かし続けられてきた町割を犠牲にして創りだされたこの新たな街並が、これからの時代を生きる人々にとって有意義なものになることを祈りながら擱筆したいと思う。



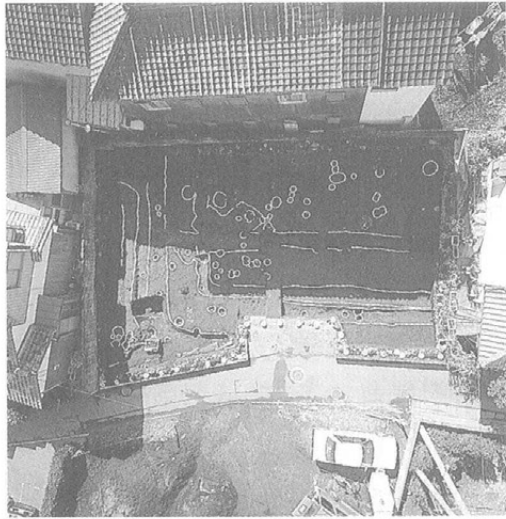
YG1 SB01 完掘状況



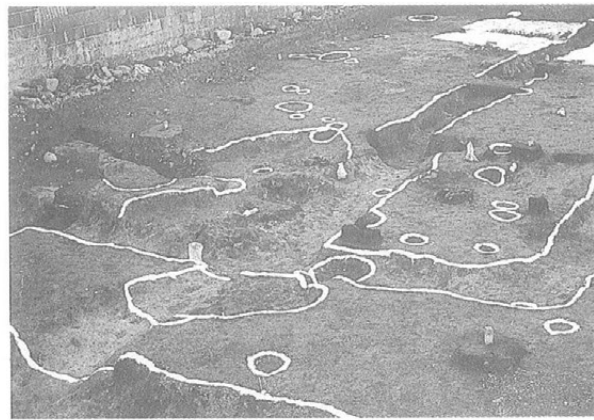
YG1 SB02・03 完掘状況



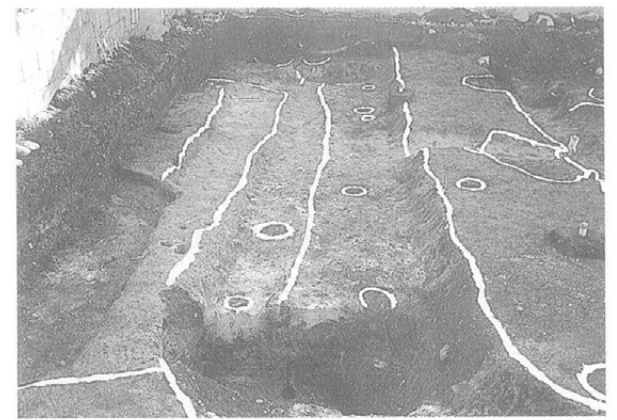
YG1 遺構実掘状況 (全景)



YG2A 遺構完掘状況 (全景)



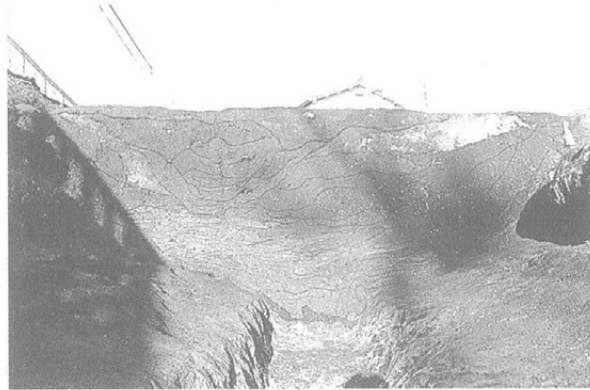
YG2A SA01 完掘状況



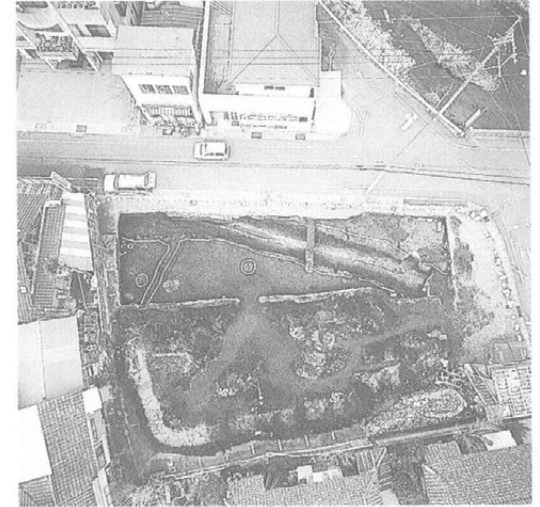
YG2A SD01・05 完掘状況



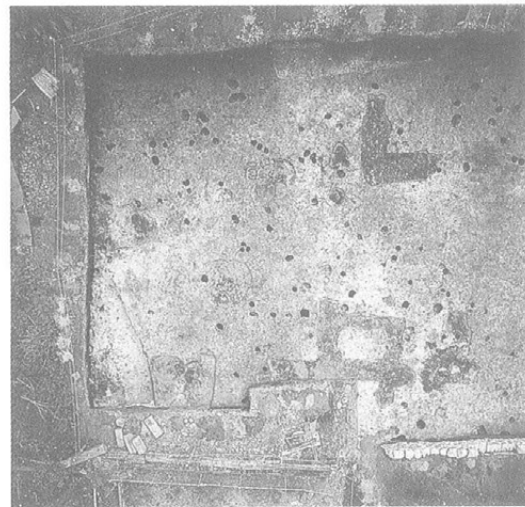
YG2B SD01 掘り下げ状況



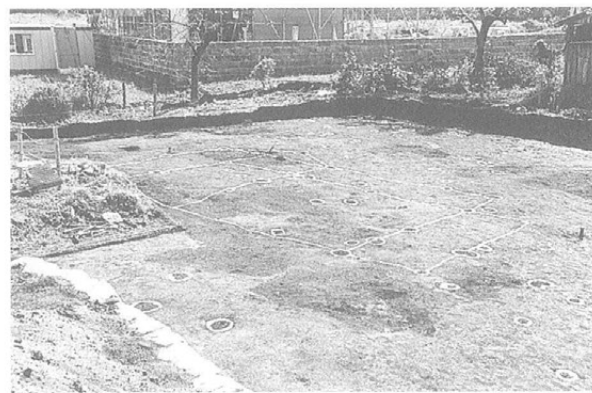
YG2B SD01 土層断面



YG2B 遺構完掘状況 (全景)



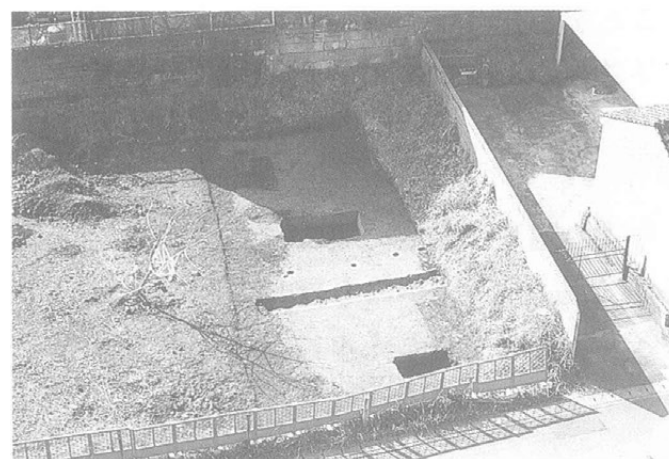
YG3 掘立柱建物群 完掘状況



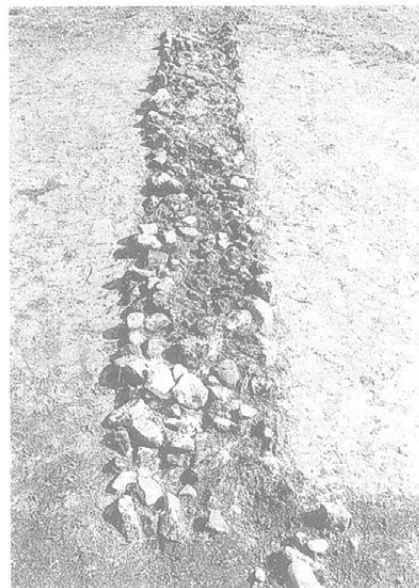
YG3 掘立柱建物群 検出状況



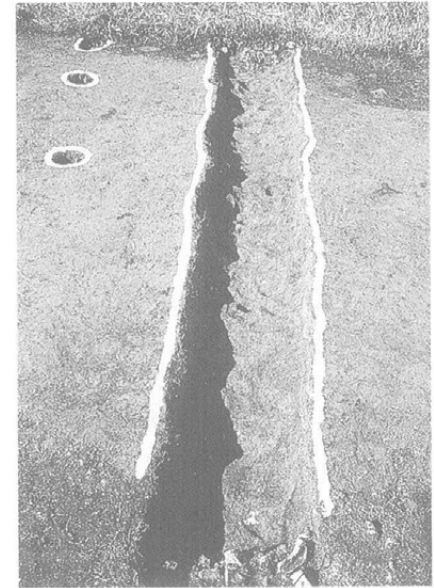
YG3 SB01・02 検出状況



NM1A 遺構完掘状況 (全景)



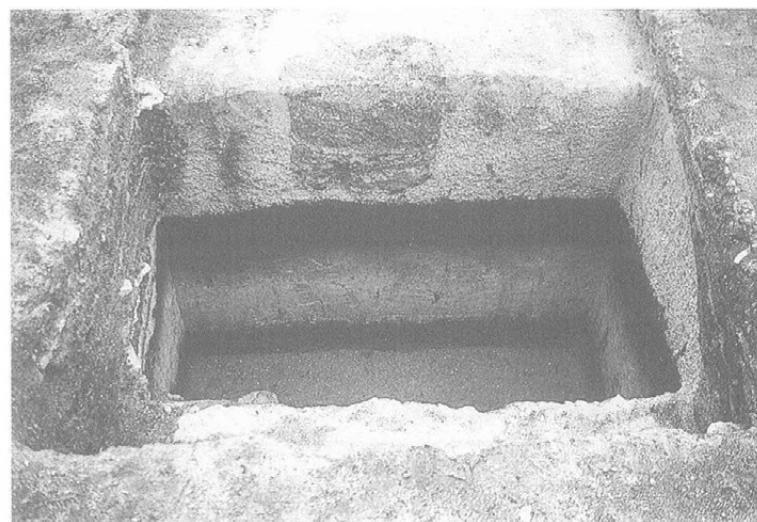
NM1A SD01 検出状況



NM1A SD01 完掘状況



NM1B 遺構完掘状況 (全景)



NM2A・第2トレンチ 土層断面



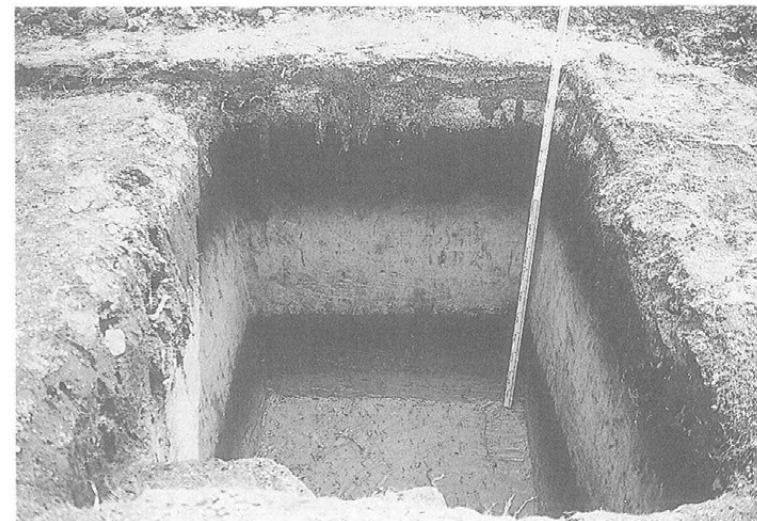
NM2B・第1トレンチ SD01 検出状況



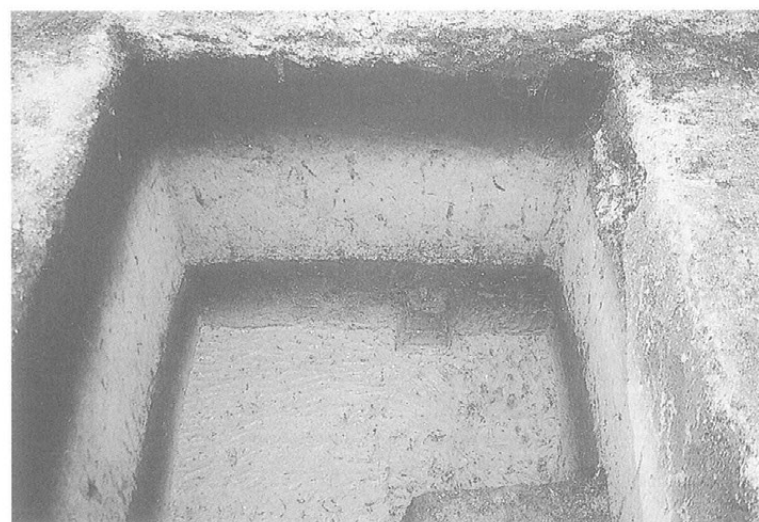
NM2B・第2トレンチ SD01 完掘状況



NM2B・第4トレンチ SC01 検出状況



NM2C・第2トレンチ 土層断面



NM2C・第3トレンチ 礫出土状況



NM2C・第4トレンチ 礫・土器片出土状況

報告書抄録

書名	フリガナ 中央東部地区遺跡群 柳川原遺跡 (第1～3次調査) 中町遺跡 (第1・2次調査)						
副書名	中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書						
巻次							
シリーズ名	都城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第43集						
編著者名	横山哲英						
編集機関	都城市教育委員会						
所在地	宮崎県都城市姫城街6街区21号						
発行年月日	1998年3月31日						
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因	
柳川原遺跡 (第1次)	宮崎県都城市 中町11-8外	31°43'22"	131°04'10"	1995.08.17～ 1995.10.31	710	区画整理事業関連	
柳川原遺跡 (第2次)	宮崎県都城市 天神町2195-7外	31°43'21" 31°43'24"	131°04'12" 131°04'09"	1996.11.05～ 1997.02.07	433		
柳川原遺跡 (第3次)	宮崎県都城市 中町2149-3外	31°43'24"	131°04'10"	1997.10.01～ 1997.10.30	640		
中町遺跡 (第1次)	宮崎県都城市 中町2666外	31°43'23" 31°43'22"	131°04'05"	1996.11.06～ 1996.11.14	130		
中町遺跡 (第2次)	宮崎県都城市 中町2675外	31°43'22" 31°43'23"	131°04'05" 131°04'06"	1997.09.24～ 1997.09.30	95		
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項
柳川原遺跡	第1次 集落跡	縄文時代晩期 弥生時代後期～終末期 古代末～中世初頭 中世後半～近世		柱穴群 掘立柱建物跡 柱穴群 掘立柱建物跡 柱穴群 溝状遺構 柱穴群		土器 磁器 黒色土器 陶磁器 土師器 金属製品	市内初例となる近世の窯道具類の出土
		古墳時代初頭～前期 中世 近世～近代		竪穴住居跡 土坑 柱穴 溝状遺構 道路状遺構 土坑 溝状遺構 土坑 柱穴		土器 石器 土師器 陶磁器 土師器 錢貨 窯道具 (ハマ・トチン) 韃の羽口	
		縄文時代晩期 弥生時代後期～終末期 古代末～中世初頭 近世～近代		柱穴 掘立柱建物跡 柱穴群 掘立柱建物跡 柱穴群 溝状遺構 柱穴群		土器 土師器 陶磁器 窯道具 (ハマ)	
中町遺跡	第1次 集落跡	近世～近代? 中世 近世		溝 (道路状遺構?) 柱穴 溝状遺構 柱穴		陶器 陶磁器 土製品	市内初例となる扇状地面での縄文時代早期遺跡の出土
		縄文時代早期 近世～近代?		散石遺構 土坑 溝 (道路状遺構?)		土器 陶磁器	

都城市文化財調査報告書第43集

中央東部地区遺跡群

柳川原遺跡（第1～3次調査）

中町遺跡（第1・2次調査）

－中央東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書－

1998年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会

発行 〒885 宮崎県都城市姫城町6街区21号
TEL(0986)23-9547 FAX(0986)24-1989

印刷 有限会社 新生社印刷
〒885 宮崎県都城市都北町7284-1
TEL(0986)38-3500